

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第19集

日本住宅公団高坂丘陵地区

埋蔵文化財発掘調査報告

— VII —

緑山遺跡

1982

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第19集

日本住宅公団高坂丘陵地区

埋蔵文化財発掘調査報告

— VII —

みどり 緑 やま 山 い 遺 せき 跡

1982

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県の首都圏に属する地域は、各種開発事業が進行し、目まぐるしい変化發展をきたしているところであります。

特に、首都東京から放射線状に延びる私鉄、国鉄各線沿いは、大小宅地開発事業が集中し埋蔵文化財行政との調整が最も多い地域であります。

日本住宅公団の開発もこの例外ではなく、東松山市高坂丘陵地区の土地区画整理事業もその一つであります。

当然、本地区内には多くの埋蔵文化財包蔵地がみられ、慎重に協議を重ねてまいりましたが、8ヶ所の遺跡についてはやむなく発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は、昭和53年に埼玉県教育委員会が日本住宅公団の委託を受け実施し整理作業は当事業団が委託を受けて行なったものであります。

本書は高坂丘陵地区土地区画整理事業地内の綠山遺跡に関する報告書でありますが、刊行にあたり多くの方々から種々の御協力、御指導をいただきました。

ここに、日本住宅公団首都圏開発本部第二事業計画課、同埼玉西宅地開発事業所、東松山市教育委員会及び地元関係者の方々に改めて深く感謝いたします。

昭和57年9月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長 五 郎

例　　言

- 1 本書は日本住宅公団高坂丘陵地区土地区画整理事業にかかる、埼玉県東松山市大字田木字緑山1102—1に所在する緑山遺跡（6号遺跡、53—委保記第17—1953号）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は埼玉県教育委員会文化財保護課が調整し、日本住宅公団の委託により、埼玉県教育委員会が昭和53年度に実施し、報告書作成作業は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和57年度に受託し、実施した。
- 3 発掘調査は埼玉県教育局文化財保護課第3係があたり、水村孝行、今井宏、井上尚明が担当した。
- 4 出土品の整理及び図の作成は、今井宏、酒井清治が主としてあたり、石森英子の協力があった。
- 5 本書の執筆は、横川好富、酒井清治、今井宏、井上尚明があたり、分担は次のとおりである。

横川 I—1

酒井 N—6—2、V—3

今井 I—2、II、III、N—1、2、3、4、5、6—1、3

井上 N—1、6—2、V—2

なお、石質の鑑定は町田端男氏（埼玉県立自然史博物館）にお願いした。

出土遺物、粘土の化学分析については河西学氏（株式会社パリサーヴェイ）にお願いした。

- 6 本書の編集は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究部第4課があたり、横川好富が監修した。

目 次

序

例 言

| | |
|--------------|----|
| I 調査の概要 | 1 |
| 1 調査に至るまでの経過 | 1 |
| 2 調査の経過（日誌抄） | 3 |
| II 遺跡の立地と環境 | 5 |
| III 遺跡の概観 | 8 |
| IV 遺構と出土遺物 | 10 |
| 1 住居跡と出土遺物 | 10 |
| 1号住居跡 | 10 |
| 2号住居跡 | 13 |
| 3号住居跡 | 16 |
| 4号住居跡 | 17 |
| 5号住居跡 | 19 |
| 6号住居跡 | 22 |
| 7号住居跡 | 27 |
| 8号住居跡 | 27 |
| 9号住居跡 | 29 |
| 2 堅穴跡と出土遺物 | 33 |
| 1号堅穴跡 | 33 |
| 2号堅穴跡 | 34 |
| 3号堅穴跡 | 35 |
| 4号堅穴跡 | 36 |
| 3 炉穴と出土遺物 | 37 |
| C列炉穴 | 37 |
| D列炉穴 | 37 |
| E列炉穴 | 44 |
| F列炉穴 | 47 |
| G列炉穴 | 59 |
| I列炉穴 | 60 |

| | |
|-------------------------|-----|
| 4 土壌と出土遺物 | 63 |
| D列土壌 | 63 |
| E列土壌 | 66 |
| F列土壌 | 71 |
| G列土壌 | 80 |
| H列土壌 | 87 |
| 5 集 石 | 92 |
| 1号集石 | 92 |
| 6 グリッド出土遺物 | 94 |
| (1) 縄文時代の遺物 | 94 |
| i 土 器 | 94 |
| ii 石 器 | 117 |
| (2) 奈良時代の遺物 | 140 |
| i 土 器 | 140 |
| ii 瓦 | 141 |
| (3) その他の遺物 | 141 |
| i 古 銭 | 145 |
| V 結 語 | 147 |
| 1 緑山遺跡の炉穴について | 147 |
| 2 緑山遺跡の性格と周辺の集落について | 151 |
| 3 緑山遺跡出土の瓦 —勝呂廃寺の系譜の中で— | 155 |
| VI 付 篇 | 174 |
| 緑山遺跡出土遺物の化学的分析 | 174 |
| A 重鉱物分析 | 174 |
| B 珪藻分析 | 180 |
| C 粘土試料重鉱物分析 | 180 |

挿 図 目 次

| | | | | | |
|------|---------------|----|------|-----------------------------------|----|
| 第1図 | 周辺の遺跡（縄文時代） | 4 | 第33図 | 3号竪穴跡出土土器 | 35 |
| 第2図 | 周辺の遺跡（古墳時代以降） | 7 | 第34図 | 4号竪穴跡 | 36 |
| 第3図 | 緑山遺跡地形図 | | 第35図 | 4号竪穴跡出土土器 | 36 |
| 第4図 | 緑山遺跡全測図 | | 第36図 | 炉穴分布図(1) | |
| 第5図 | 基本層序 | 9 | 第37図 | 炉穴分布図(2) | |
| 第6図 | 1号住居跡 | 10 | 第38図 | C2・D2グリッド炉穴 | 38 |
| 第7図 | 1号住居跡出土土器 | 11 | 第39図 | D3・D4・D6グリッド炉穴 | 40 |
| 第8図 | 1号住居跡出土石器 | 11 | 第40図 | D5グリッド炉穴 | 41 |
| 第9図 | 2号住居跡 | 12 | 第41図 | D5・D6・E6・F1グリッド炉穴 出土土器 | 43 |
| 第10図 | 2号住居跡炉 | 13 | 第42図 | D5グリッド炉穴2・4出土石器 | 43 |
| 第11図 | 2号住居跡出土土器 | 14 | 第43図 | E2・E4・E7グリッド炉穴 | 45 |
| 第12図 | 2号住居跡出土石器 | 15 | 第44図 | E5グリッド炉穴 | 46 |
| 第13図 | 2号住居跡出土勾玉 | 15 | 第45図 | E6・F1グリッド炉穴 | 48 |
| 第14図 | 3号住居跡 | 16 | 第46図 | F4グリッド炉穴 | 49 |
| 第15図 | 4号住居跡 | 17 | 第47図 | F4グリッド1号炉穴出土土器 | 50 |
| 第16図 | 4号住居跡出土土器 | 17 | 第48図 | F4・F7・G8グリッド炉穴 出土土器 | 51 |
| 第17図 | 5号住居跡 | 18 | 第49図 | F5グリッド炉穴 | 53 |
| 第18図 | 5号住居跡出土土器(1) | 20 | 第50図 | F5・F6グリッド炉穴 | 54 |
| 第19図 | 5号住居跡出土土器(2) | 21 | 第51図 | F7・G5・G8グリッド炉穴 | 57 |
| 第20図 | 6号住居跡 | 23 | 第52図 | G6グリッド炉穴 | 58 |
| 第21図 | 6号住居跡カマド | 24 | 第53図 | 1-1グリッド炉穴 | 59 |
| 第22図 | 6号住居跡出土土器・石器 | 25 | 第54図 | 土壤分布図(1) | |
| 第23図 | 7号住居跡 | 26 | 第55図 | 土壤分布図(2) | |
| 第24図 | 7号住居跡出土土器 | 27 | 第56図 | D3・D5・D6グリッド土壤 | 64 |
| 第25図 | 8号住居跡出土土器 | 27 | 第57図 | D3・D5・D6・E2・E3 E5・E6グリッド土壤出土土器 | 95 |
| 第26図 | 8号住居跡 | 28 | 第58図 | E2・E3・E5グリッド土壤 | 97 |
| 第27図 | 9号住居跡出土土器 | 29 | 第59図 | E6グリッド土壤 | 68 |
| 第28図 | 9号住居跡 | 30 | 第60図 | F1グリッド土壤 | 70 |
| 第29図 | 1号竪穴跡 | 32 | 第61図 | F1グリッド土壤出土土器 | 72 |
| 第30図 | 1号竪穴跡出土土器・石器 | 33 | | | |
| 第31図 | 2号竪穴跡 | 34 | | | |
| 第32図 | 3号竪穴跡 | 35 | | | |

| | | | |
|--|-----|------------------------------------|-----|
| 第62図 土墳出土石器 | 73 | 第97図 グリッド出土石器(1) | 119 |
| 第63図 F 2 グリッド土墳 | 74 | 第98図 グリッド出土石器(2) | 120 |
| 第64図 F 4・F 6・F 8 グリッド土墳 | 75 | 第99図 グリッド出土石器(3) | 121 |
| 第65図 F 4・F 5 グリッド土墳出土土器 | 76 | 第100図 グリッド出土石器(4) | 122 |
| 第66図 F 5・F 7 グリッド土墳 | 78 | 第101図 グリッド出土石器(5) | 123 |
| 第67図 F 6 グリッド土墳出土土器 | 79 | 第102図 グリッド出土石器(6) | 124 |
| 第68図 G 5・G 6 グリッド土墳 | 81 | 第103図 グリッド出土石器(7) | 125 |
| 第69図 F 5・F 7・G 6・G 7・H 7 グリッド土墳出土土器 | 82 | 第104図 グリッド出土石器(8) | 126 |
| 第70図 G 7 グリッド土墳 | 84 | 第105図 グリッド出土石器(9) | 127 |
| 第71図 G 7・G 8 グリッド土墳 | 86 | 第106図 グリッド出土石器(10) | 128 |
| 第72図 H 1・H 7 グリッド土墳 | 88 | 第107図 グリッド出土石器(11) | 129 |
| 第73図 1号集石 | 93 | 第108図 グリッド出土石器(12) | 130 |
| 第74図 グリッド出土土器分布図(早期) | 94 | 第109図 グリッド出土石器(13) | 131 |
| 第75図 グリッド出土土器分布図(前期) | 95 | 第110図 グリッド出土石器(14) | 132 |
| 第76図 グリッド出土土器(1) | 96 | 第111図 グリッド出土石器(15) | 133 |
| 第77図 グリッド出土土器(2) | 97 | 第112図 グリッド出土石器(16) | 134 |
| 第78図 グリッド出土土器(3) | 98 | 第113図 グリッド出土土器 | 140 |
| 第79図 グリッド出土土器(4) | 100 | 第114図 緑山遺跡出土瓦(1) | 142 |
| 第80図 グリッド出土土器(5) | 101 | 第115図 緑山遺跡出土瓦(2) | 143 |
| 第81図 グリッド出土土器(6) | 102 | 第116図 緑山遺跡出土瓦(3) | 144 |
| 第82図 グリッド出土土器(7) | 103 | 第117図 緑山遺跡出土瓦(4) | 146 |
| 第83図 グリッド出土土器(8) | 104 | 第118図 5号住居跡出土耳環及びグリッド 出土古鏡 | 146 |
| 第84図 グリッド出土土器(9) | 105 | 第119図 炉穴主軸方向 | 147 |
| 第85図 グリッド出土土器(10) | 106 | 第120図 炉穴規模 | 148 |
| 第86図 グリッド出土土器(11) | 108 | 第121図 高坂丘陵の古墳時代後期～奈良・ 平安時代集落分布図 | 151 |
| 第87図 グリッド出土土器(12) | 109 | 第122図 遺跡の標高と沖積世との比高差 | 152 |
| 第88図 グリッド出土土器(13) | 110 | 第123図 緑山遺跡の瓦出土地点と 接合関係 | 155 |
| 第89図 グリッド出土土器(14) | 111 | 第124図 瓦・須恵器グリッド別出土量 | 156 |
| 第90図 グリッド出土土器(15) | 112 | 第125図 瓦の厚さ | 156 |
| 第91図 グリッド出土土器(16) | 112 | 第126図 緑山遺跡出土瓦の桶枠板幅と厚 さの関係 | 157 |
| 第92図 グリッド出土土器(17) | 114 | 第127図 緑山遺跡出土瓦の布目数 | 157 |
| 第93図 グリッド出土土器(18) | 115 | | |
| 第94図 グリッド出土土器(19) | 116 | | |
| 第95図 グリッド出土土製円板 | 116 | | |
| 第96図 石器分布図 | 118 | | |

| | | | |
|--------------------------------|-----|------------------------------|-----|
| 第 128 図 丸瓦の布の縫じ方 | 158 | 第 134 図 勝呂廃寺出土瓦の時期区分 | 166 |
| 第 129 図 平瓦側面の凸面に対する 分割角度 | 158 | 第 135 図 勝呂廃寺交叉波状文軒丸瓦の 変遷図 | 167 |
| 第 130 図 勝呂廃寺第Ⅰ期の軒丸瓦とその 類例 | 159 | 第 136 図 寺院、古墳、窯跡の関連概念図 | 169 |
| 第 131 図 印き文様の比較 | 163 | 第 137 図 重鉱物組成図 | 178 |
| 第 132 図 勝呂廃寺出土瓦 桶枠板幅と厚 さの関係 | 164 | 第 138 図 重鉱物組成図 | 181 |
| 第 133 図 勝呂廃寺、赤沼窯跡出土瓦の 布目数 | 164 | | |

図 版 目 次

- | | |
|----------------------|--|
| 図版 1 緑山遺跡全景（空撮） | 図版17 F 4 グリッド 2号炉穴 |
| 図版 2 緑山遺跡遠景（西より） | F 5 グリッド 3・6・7号炉穴 |
| 緑山遺跡近景（西より） | 図版18 F 5 グリッド 4号炉穴 |
| 図版 3 1号住居跡 | G 8 グリッド 1号炉穴 |
| 1号住居跡遺物出土状態 | 図版19 D・E 5 グリッド炉穴・土壤 |
| 図版 4 2号住居跡 | D 2 グリッド 土壤 |
| 2号住居跡遺物出土状態 | 図版20 F 2 グリッド 2号土壤 |
| 図版 5 4号住居跡 | F 5 グリッド 2号土壤 |
| 5号住居跡 | 図版21 F 8 グリッド 1・2号土壤 |
| 図版 6 5号住居跡遺物出土状態 | G 6 グリッド 2号土壤 |
| 5号住居跡遺物出土状態 | 図版22 G・H 7 グリッド 土壤群 |
| 図版 7 6号住居跡 | G 7 グリッド 2号土壤 |
| 6号住居跡カマド及び遺物 出土状態 | 図版23 G 7 グリッド 5・6・9号土壤 |
| 図版 8 6号住居跡遺物出土状態 | G 7 グリッド 8号土壤 |
| 6号住居跡遺物出土状態 | 図版24 G 8 グリッド 3号土壤 |
| 図版 9 7号住居跡 | H 7 グリッド 2号土壤 |
| 7号住居跡カマド | 図版25 1号住居跡出土土器 |
| 図版10 8号住居跡 | 1号住居跡出土石器 |
| 8号住居跡土層 | 図版26 2号住居跡出土土器 |
| 図版11 8号住居跡粘土出土状態 | 1号竪穴跡出土土器 |
| 8号住居跡遺物出土状態 | 図版27 4・5号住居跡出土土器 |
| 図版12 9号住居跡 | 4・5号住居跡出土土器 |
| 9号住居跡土層及び遺物出土状態 | 図版28 5号住居跡出土土器 |
| 図版13 1号竪穴跡 | 5号住居跡出土土器 |
| 2号竪穴跡 | 図版29 6・7・8・9号住居跡出土土器 |
| 図版14 3・4号（手前）竪穴跡 | 6・7・8・9号住居跡出土土器 |
| 1号集石 | 図版30 緑山遺跡出土瓦 |
| 図版15 D 5 グリッド 1号炉穴 | 図版31 緑山遺跡出土瓦 |
| D 5 グリッド 2号炉穴 | 図版32 緑山遺跡出土瓦 |
| 図版16 F 4 グリッド 1～3号炉穴 | 図版33 緑山遺跡出土瓦 |
| F 4 グリッド 1号炉穴炉跡 4 | 図版34 D 5・D 6・E 6・F 1 グリッド 炉穴出土土器・石器 |

| | |
|---|--|
| F 4・F・7 F 8 グリッド炉穴出土 土器 | グリッド出土土器(7)裏 |
| 図版35 F 4 グリッド 1号窓穴 F 5 グリッド 4号土壤 | グリッド出土土器(8)表 |
| F 6 グリッド 1号土壤及びグリッ ド出土土器 | グリッド出土土器(8)裏 |
| 図版36 D 3・D 5・D 6・E 2・E 3・ E 5・E 6 グリッド土壤出土土器 | グリッド出土土器(9)表 |
| F 1 グリッド土壤出土土器 | グリッド出土土器(9)裏 |
| 図版37 F 4・F 5 グリッド土壤出土土器 F 5・F 7・G 6・H 7 グリッド 土壤出土土器 | グリッド出土土器(10) |
| 図版38 グリッド出土土器 グリッド出土土器(1) | グリッド出土土器(11) |
| 図版39 グリッド出土土器(2)表 グリッド出土土器(2)裏 | 図版45 グリッド出土土器(13) |
| 図版40 グリッド出土土器(3)表 グリッド出土土器(3)裏 | 図版46 グリッド出土土器(13) |
| 図版41 グリッド出土土器(4)表 グリッド出土土器(4)裏 | 図版47 グリッド出土土器(13) |
| 図版42 グリッド出土土器(5)表 グリッド出土土器(5)裏 | 図版48 グリッド出土土器(13) |
| 図版43 グリッド出土土器(6)表 グリッド出土土 (6)裏 | 図版49 グリッド出土土器(13) |
| 図版44 グリッド出土土器(7)表 | グリッド出土土器(14) |
| | 図版50 グリッド出土土器(17) |
| | グリッド出土土器(18) |
| | 図版51 グリッド出土土器(19)及び土製円板 グリッド出土石器(4) |
| | 図版52 グリッド出土石器 (5・6) |
| | グリッド出土石器 (7・8) |
| | 図版53 グリッド出土石器 (9・10) |
| | グリッド出土石器 (11~13) |
| | 図版54 グリッド出土石器(14) |
| | グリッド出土石器(15) |
| | 図版55 グリッド出土石器(16) |
| | 5号住居跡出土耳環・グリッド出土 古錢 |

I 調査の概要

1. 発掘調査に至るまでの経過

日本住宅公団首都圏開発本部が、東松山市高坂地区97.2haにわたって実施する宅地開発事業は、区画整理方式によるものである。

これに先だち、昭和46年6月29日、日本住宅公団首都圏宅地開発本部長は、文化庁と日本住宅公団とで取りかわされた「日本住宅公団の事業施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」により、埼玉県教育委員会「住宅地区開発予定地（高坂地区）内の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて」の照会があった。

これを受けて県教育委員会文化財保護室では、手許にある昭和39年度に調査した埋蔵文化財包蔵地台帳と開発区域を照合し、50基を越える塚や古墳が区域内に所在することを確認した。

しかしながら、この開発地区が丘陵地帯であり他に相当数の遺跡の所在が予想されるので、改めて分布調査を実施したうえ回答することになった。

この分布調査は、昭和47年2月に実施し、古墳時代遺物の散布が認められ、集落跡が予想されるところが3か所、古墳10基、塚約130基が確認されたが、区域のはほとんどが山林のため、さらに詳細な確認調査が必要であると考えられた。

とりあえず、昭和47年3月、この結果を公団に「住宅地区開発予定地（高坂地区）内の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて」回答し、今後、これらの取扱いについては、両者で協議を続けることになった。

その後、昭和48、49年の協議を経て、昭和50年3月1日、「高坂地区における埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて」の公団からの協議があり、開発を予定している他の地域と同時に、この高坂丘陵地区について区画整理方式の計画概要が説明された。文化財保護室では、事業区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地について「覚書」により、現状保存または記録保存のための発掘調査を実施するよう、昭和50年3月3日回答した。

| 遺跡名 | 所在地 | 種別 | 時代 | 状況 |
|-------------------|-----------------|-----------|----------|------|
| 1号 (塚140~142) | 東松山市田木字根平1465 | 塚群 | | 山林 |
| 2号 (塚4~8、集落跡9) | 東松山市田木字立野138-24 | 集落跡 塚群 | 奈良・平安 | 畠・山林 |
| 3号 (塚125・126) | 東松山市田木字舞台1673 | 塚群 | | 畠 |
| 4号 (舞台) | 東松山市田木字舞台1640 | 集落跡 | 繩文・古墳・奈良 | 山林 |
| 5号 (塚10~17) | 東松山市田木字児沢160-18 | 塚群 | | 山林 |
| 6号 (集落跡95) | 東松山市田木字緑山1102-1 | 集落跡 | 繩文・古墳 | 畠・山林 |
| 7号 (塚102・103) | 東松山市田木字根平1478 | 塚群 | | 山林 |
| 8号 (古墳126~135) | 東松山市田木字桜山1316 | 古墳群 | 古墳 | 山林 |

さらに、開発区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地については、県教育委員会直営で記録保存のための発掘調査を実施することとし、次のような発掘調査事業の年次区分が了解された。

昭和50年4月11日付で、日本住宅公団首都圏宅地開発本部長と埼玉県知事との間に「埋蔵文化財包蔵地発掘調査に関する協定書」が締結され、昭和50年6月から発掘調査に入った。

| 年 度 | 作業内容 | 発 挖 作 業 | 整 理 作 業 | 報 告 書 刊 行 |
|-----|-------------------------|-------------------|---------|--------------|
| 50 | 舞 台・根 平 地 区 (1・3・4号) | | | |
| 51 | 根 平・桜 山 地 区 (1・8号) | | | |
| 52 | 立野・児沢・桜山地区 (2・7・8号) | 舞 台 地 区 (3・4号) | | |
| 53 | 児沢・綠 山 地 区 (4・6号) | 根 平 地 区 (1・7号) | | 舞 台 地 区 |
| 54 | | 桜山・綠山地区 (6・8号) | | 根平・児沢・立野地区 |
| 55 | | | | 桜 山(古墳群) 地 区 |
| 56 | | | | 桜 山(窓跡群) 地 区 |
| 57 | | | | 綠 山 地 区 |

発 挖 調 査 の 組 織

1. 発 挖 (昭和52年度)

| | | | | |
|---------|--------------|---------|---------|-----------------------------|
| 主 体 者 | 埼玉県教育委員会 | 教 育 長 | 石 田 正 利 | 之 男 明 夫 朗 史 清 夫 平 勉 富 行 宏 明 |
| 事 務 局 | 埼玉県教育局文化財保護課 | 課 長 | 杉 山 泰 一 | 智 幹 史 岳 |
| 企 業 調 整 | 主幹兼課長補佐 | 主幹兼課長補佐 | 早 伸 | 駒 本 間 |
| | 埼玉県教育局文化財保護課 | 文化財第二係長 | 川 沢 | 長 谷 川 和 修 |
| 庶 務 經 理 | 埼玉県教育局文化財保護課 | 庶 務 係 長 | 太 千 | 田 村 野 川 好 孝 |
| 發 挖 | 埼玉県教育局文化財保護課 | 文化財第三係長 | 沼 橋 今 井 | 水 井 上 尚 |

2. 整 理 (昭和57年度)

| | | | | |
|-----------|---------------|-----------------|-------------|---------------------|
| 主 体 者 | 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 | 理 事 長 | 井 五 郎 進 夫 | 二 一 美 浩 人 富 塩 行 治 宏 |
| 副 理 事 長 | | 副 理 事 長 | 井 上 辺 野 井 | 澄 長 栄 和 朗 |
| 常 務 理 事 長 | | 常 務 理 事 長 | 渡 佐 関 江 福 | 良 草 和 良 |
| 管 理 部 長 | 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 | 管 理 部 長 | 本 橋 小 水 酒 今 | 井 井 井 井 |
| 整 理 | 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 | 調 査 研 究 部 長 | 川 川 村 井 | 庄 田 朝 好 良 清 |
| | | 調 査 研 究 部 副 部 長 | | 川 井 |
| | | 調 査 研 究 第 四 課 長 | | |

3. 発 挖 調 査 協 力 者 東松山市教育委員会及び地元関係者

2. 発掘調査の経過（日誌抄）

畠山遺跡の発掘調査は、昭和53年8月から54年3月までの8ヶ月間の計画で実施された。遺跡は、物見山丘陵より東へ派生する一小舌状台地全体に相当し、調査前の地目は桑園及び荒地であった。

以下には、発掘調査の進行状況を月毎に記して行きたい。

8月 14日より発掘調査を開始する。調査区全域の桑の抜根及び雑草刈り込み作業を行なう。座標軸に沿い $12 \times 12\text{m}$ のグリッドを設定し、併せて標高を求める基準杭とした。グリッドは北から南へ1～9。西から東へA～1に分割し、各グリッドをA1、A2…グリッドと呼称した。

F列及び5列に沿ってトレントを設定し、遺構、土層状態の把握に務める。ローム面まで40～70cmと緩傾斜面に表土、明茶褐色土が厚く堆積している。調査区中央の平坦面E5、緩傾斜面F6～8グリッドの遺構確認作業を表土より人力で行なう。住居跡、炉穴、土壤が確認され、相当数の遺構の存在が予想された。

9月 残暑厳しき中、F4・5、G7・8グリッドの遺構確認作業を行なう。各グリッドとも緩傾斜面のため明茶褐色土の堆積が厚く、多量の条痕文、黒浜、諸磯a式土器が出土した。住居跡4軒、炉穴12基、土壤18基が集中して検出された。

10月 G7グリッドで既に確認されていた住居跡の全容を把握するためH7・8、G5・6及び調査区最北端のF1～3グリッドの確認作業を実施する。G5・6グリッド東半部では、ロームが観られず、淡茶褐色粘質土に変わり、遺物、遺構が希薄になるようである。H7グリッドの住居跡は、諸磯a式期と判明した。

11月 調査前の擾乱により地山が露出したA～C列及びE列の確認作業を行なう。A～C列にはロームの堆積遺物の出土も無く、元来遺構が存在しなもないと思われる。

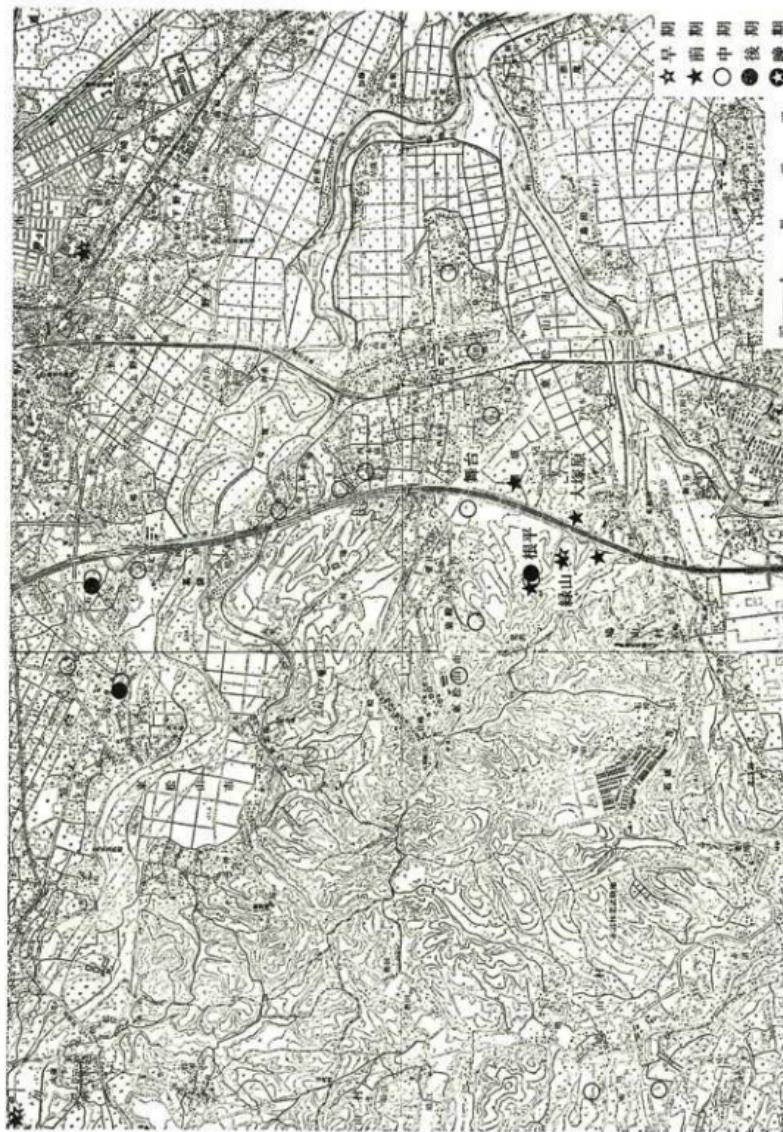
12月 淡茶褐色土が堆積するG列以東の表土を重機で削平した後、遺構確認作業を実施する。遺物の出土もほとんど無く、遺構は僅かに炉穴、土壤が各1基検出されたにすぎない。

1月 近接した5・6・9号住居跡を中心、F5～8、G5・6グリッドの竪穴跡、炉穴、土壤群の調査を実施する。5号住居跡は、6号住居跡に切られていたが床面より多量の遺物が出土した。炉穴は小形で、炉跡が单一のものが多く、遺物も少ない。完掘したものから順次実測、写真撮影を行なう。

2月 D列の炉穴群及び2号住居跡と周辺の土壤群の調査を行なう。土壤群は、長径1m前後の梢円形プランを呈するものが主体を占め、堀り込みも深いものが多い。覆土中より遺物の出土は少ない。2号住居跡は隅丸方形プランを呈する諸磯a式期のものであった。並行して実測、写真撮影を行なう。

3月 E・F列1～5グリッドの各遺構の調査を実施する。8号住居跡は覆土中より瓦、床面より多量の粘土塊が検出され、瓦工房跡の可能性があり慎重に調査を行なう。F4グリッドの炉穴は本遺跡最大で複数の炉跡が検出された。航空写真測量のため調査区全域の清掃を行なう。航空写真測量終了後、図面、写真撮影の補充を行ない、8ヶ月の調査を終了する。

（今井 宏）



第1図 周辺の遺跡（縄文時代）

II 遺跡の立地と環境

緑山遺跡は東松山市大字田木字緑山1102—1に所在する。東武東上線高坂駅の南西約3kmの物見山丘陵上（南北企丘陵）にある。

物見山丘陵は関東山地より派生する丘陵で、嵐山町、都幾川村、玉川村等の市町村一帯に広がり東端が東松山市高坂地区まで延びている。丘陵には多数の開析谷があり組み、屋根はなだらかな起伏に富み、また大小の河川がその間をねって流れ、景観の美しい所である。

緑山遺跡を乗せる丘陵は、この物見山丘陵で最も標高の高い山の一つであり、坂東札所十番岩殿觀音で有名な物見山より派生した一支丘である。物見山は標高136mを計り、頂上からは遠く筑波山までの広大な関東平野を一望でき、眼下には派生する丘陵地帯や越辺川に形成された沖積地が広がっている。また物見山には、大小多数の開析谷があり組んでおり、派生する丘陵の大部分は東あるいは南東方向へ延び、裾部にいわゆる舌状を呈する小支丘が形成されている。頂上より南東へ延びる屋根上には、総数120基余りからなり、現在までに70基ほど調査されている物見山塚群（井上ほか1980）が存在している。

遺跡は、この物見山より東へ派生する標高68mの小支丘上の鞍部から緩傾斜面にかけて営なまれていた。遺跡の北側には深い開析谷が存在し、南側には谷を距て、8世紀初頭の須恵器生産に関連した立野遺跡（今井ほか1980）が所在している。沖積地との比高差は約45mを計り、支丘はなだらかなスロープを描きながら沖積地へと移行している。

前述のように、物見山丘陵周辺は小支丘や台地が発達し、遺跡の立地条件を充分に満たす地域である。事実多くの各時期に亘る遺跡が、濃密に分布している。既に関越高速自動車道、こども動物自然公園の建設や日本住宅公団高坂丘陵地区土地区画整理事業などにかかり、いくつかの遺跡で発掘調査が実施されている。それらの遺跡を中心に、緑山遺跡と関連がある周辺の遺跡を概観してみたい。

緑山遺跡から2点のナイフ形石器が出土し、物見山丘陵では初めて旧石器時代の遺物が発見されている。ユニットなどの存在する可能性が想定されたが、残念にも検出し得なかった。松山台地周辺でも、表採資料から数遺跡が確認されているに過ぎず、まだ本格的な発掘調査も実施されていない。発掘調査時に出土したものとしては、青島城跡（田中ほか1974）でナイフ形石器2点、石核1点、雉子山遺跡（栗原ほか1973）でナイフ形石器1点、花見堂遺跡（金井塚ほか1976）で尖頭器1点が散発的に検出された程度であり、今後の調査研究に期待せざるを得ないのが現状である。

次に、縄文時代早期・前期の遺跡を概観してみたい。緑山遺跡では、早期後半の野島式から茅山上層式に亘る条痕文系土器群を伴出する70余基の炉穴群、土壙及び竪穴跡と前期後半の黒浜式期、諸磯a式期の住居跡や土壙が検出されている。また、遺構外では田戸下層式、前期初頭の花模下層式、中期初頭の五領ヶ台式土器が間断無く出土している。

物見山丘陵内で早期の遺構が検出された遺跡として桜山窯跡群（水村ほか1932）、立野遺跡（今井ほか1980）がある。桜後窯跡群では、古墳々丘下より野島式土器を伴出する2基の集石、立野遺

跡からは、鶴ヶ島台式土器を出土する集石が単独に 1 基検出されている。また、遺構は検出されていないが、根平遺跡（今井ほか1980）では田戸下層式と鶴ヶ島台式土器、駒堀遺跡（谷井ほか1974）から野島式、鶴ヶ島台式、茅山上層式土器、大塚原遺跡（今井ほか1980）では条痕文土器が出土している。いずれの遺跡も小支丘の先端部に位置し、古墳時代など後世の遺構と重複しているのが特徴である。早期の遺構は破壊された可能性もあるが、いずれにしろ早期の遺跡としては極く小規模なものであったと思われる。前期の遺構は、緑山遺跡で検出された住居跡、土墳群以外には確認されていない。桜山古墳群（井上ほか1981）から諸磧 a・b 式、立野遺跡から諸磧 b 式土器がややまとまって出土しているが、まだ断片的な資料で全体の様相を把握するまでに至っていない。周辺地域の前期の遺跡としては、関山・黒浜・諸磧 b 式期の集落跡である平松台遺跡（金井塚ほか1969）や黒浜式期の住居跡が検出された八幡遺跡（梅沢1978）がある。

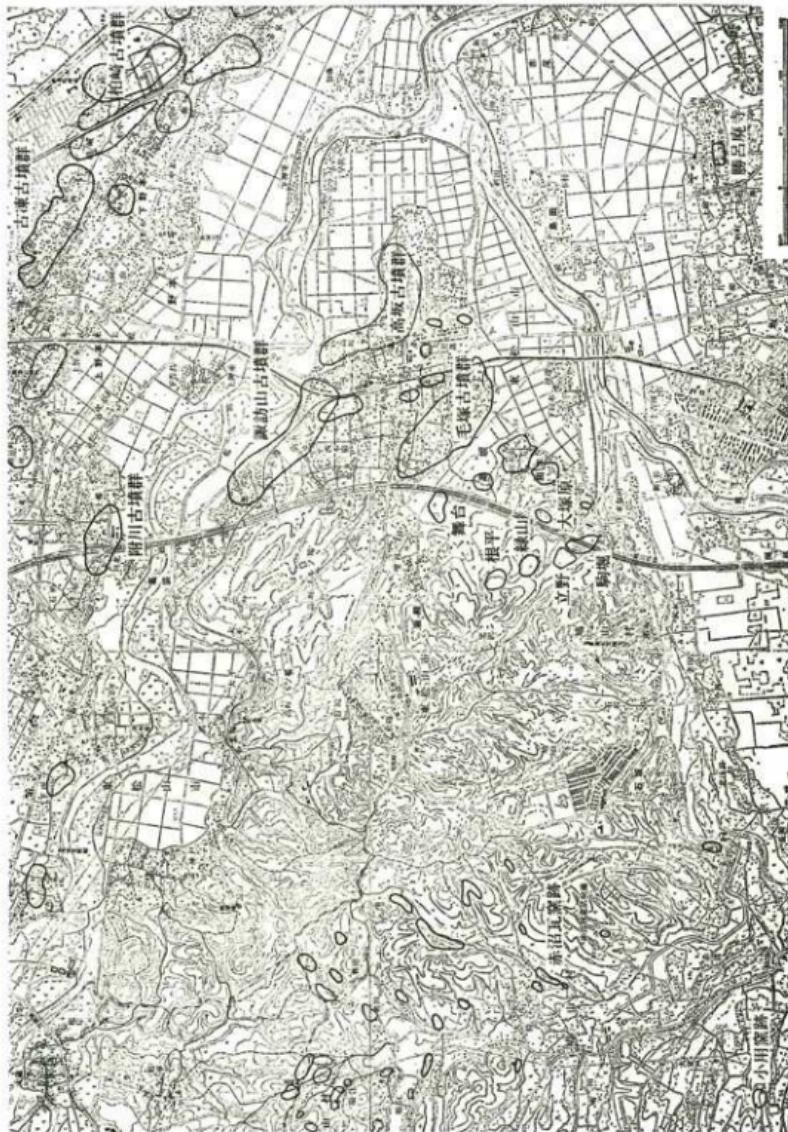
中期の遺跡は、比企地方全域で 100 を超える遺跡が確認され、物見山丘陵内にも 3 遺跡が所在している。そのうち舞台遺跡（井上ほか1978）の発掘調査が実施され、8 軒の加曾利 E I・II 式期の住居跡が検出されている。周辺地域では、勝坂～加曾利 E 式期の住居跡 21 軒が検出された岩の上遺跡（栗原ほか1973）、加曾利 E 式期の環状土墳群が検出された江光山遺跡（梅沢1973）などが著名である。

後・晩期の遺跡は、松山台地では堀之内 II 式期の敷石住後跡が検出された岩の上遺跡や加曾利 B 式出土器を出土した雉子山遺跡が知られているが、ここ物見山丘陵では、根平遺跡から加曾利 B III 式土器 1 個体が単独出土しているに過ぎず、まだ空白な地域である。

次に、古墳時代の遺跡を概観してみたい。物見山丘陵内で、古墳の調査は駒堀遺跡、田木山遺跡（野部1974）、舞台遺跡（谷井1974）、根平遺跡、桜山古墳群（小久保ほか1981）で実施されている。いづれの古墳も小規模な円墳が多く、石室の形態、出土遺物から 7 世紀後半に位置づけられるものである。集落跡としては、五領～鬼高窓の駒堀遺跡、鬼高窓全般に亘る大集落跡として著名な舞台遺跡などが調査され、多くの資料が蓄積されている。

また、これらの古墳や集落跡とそれぞれ有機的な関連をもつ須恵器及び埴輪窯跡や工房跡などの生産遺跡もいくつか調査され、その操業年代、製作技法、製品の供給先など種々の問題を提起している。現在県内最古の 6 世紀前半に比定される須恵器窯跡 2 基と 6 世紀後半を中心とする 17 基の埴輪窯跡からなる桜山窯跡群、7 世紀初頭の須恵器窯跡が 1 基単独で検出された根平遺跡、7 世紀後半の須恵器窯跡 2 基が確認された舞台遺跡がある。これら 3 遺跡の須恵器窯跡は、製作技法などでそれぞれ系統が異なり、直接的な系統関係は認められていない。さらに、鳩山町、玉川村、嵐山町に広がる南北企窯跡群の操業年代を一気に 1 世紀遡らせた小用窯跡（高橋1977）が調査されている。また立野遺跡では、8 世紀初頭の須恵器過別所的な役割を果したと思われる 2 軒の大型住居跡が検出されている。

緑山遺跡では、窯跡は未確認であるが、瓦の生産に関与したと思われる工房跡が検出され、赤沼瓦窯跡（稻村1960）、勝呂廬寺（宮ほか1982）との関係など、また新たな問題を提起している。



第2図 周辺の遺跡（古墳時代以降）

III 遺跡の概観

緑山遺跡は、比企丘陵内の通称物見山丘陵より東へ向かって派生する小支丘上に所在している。遺跡は、小支丘上の平坦面から緩傾斜面上にかけて広がり、調査前の現地踏査では、桑園と荒地であった。北、南の両側には谷が入り、特に北側の谷は深く急斜面となっている。谷を挟む南側の支丘上には立野遺跡、児沢遺跡が占地している。東側の斜面は、越辺川に形成された沖積地へ緩やかなスロープで移行している。遺跡中央の平坦面での標高は68m、沖積地との比高差は約45mを測る。物見山丘陵内では、既にいくつかの遺跡が報告され、その多くは、眼下に沖積地を臨む支丘上の先端部に占地しているが、緑山遺跡は、根平遺跡同様に丘陵の内奥部に立地している。

発掘調査は、平坦面から緩傾斜面に至る調査区全域に12×12mの基本グリッドを設定し、まず遺構の状態や土層堆積状況を把握するため遺跡を4分割する形でトレンチの掘り下げから開始した。遺構確認面であるローム面まで表土、明茶褐色土、茶褐色土が40~80cm堆積し、緩傾斜面でやや層厚を増している。また、C列以西、G列以東ではローム層が認められず、遺構が存在する可能性の少ない濃茶褐色粘質土が堆積していた。

遺構確認作業は、柔、雜木の枝根や厚い表土層の排除に労力を費やしたが、ローム層の認められる区域は表土より人力で行ない、遺構の存在する可能性の少ない区域は表土を重機で排除し、遺構の検出に努めた。

調査の結果、住居跡9軒（縄文時代前期3、古墳時代2、奈良時代4）、竪穴跡4基（縄文時代早期）、炉穴67基（縄文時代早期）、土壙70基、集石1基。

縄文時代早期の竪穴跡は、支丘肩部に相当するF1、緩傾斜面のF8、G7グリッドに検出され1号竪穴跡は、掘り込みも深く保存状態は良好である。山量の条痕文土器が出土している。炉穴は長径1m前後の梢円形を呈する單炉跡のものが多く、遺物の出土は少ない。遺跡中央の平坦面から緩傾斜面にかけて標状に点在して分布している。前期の住居跡は、F2・4、H7グリッドで検出され、2号住居跡は、掘り込みも深く保存状態も良好であった。諸磯a式期の遺物が出土している土壤からは、縄文時代早・前期及び奈良時代の遺物が出土しているが、南側の緩傾斜面に集中して検出された。掘り込みも深く、保存状態は良好なものが多い。また、立石を伴ない基壇と思われるものが1基検出された。集石は、遺跡東端の2号住居跡北西の緩傾斜面に位置するH6・H7グリッドにかけて検出された。

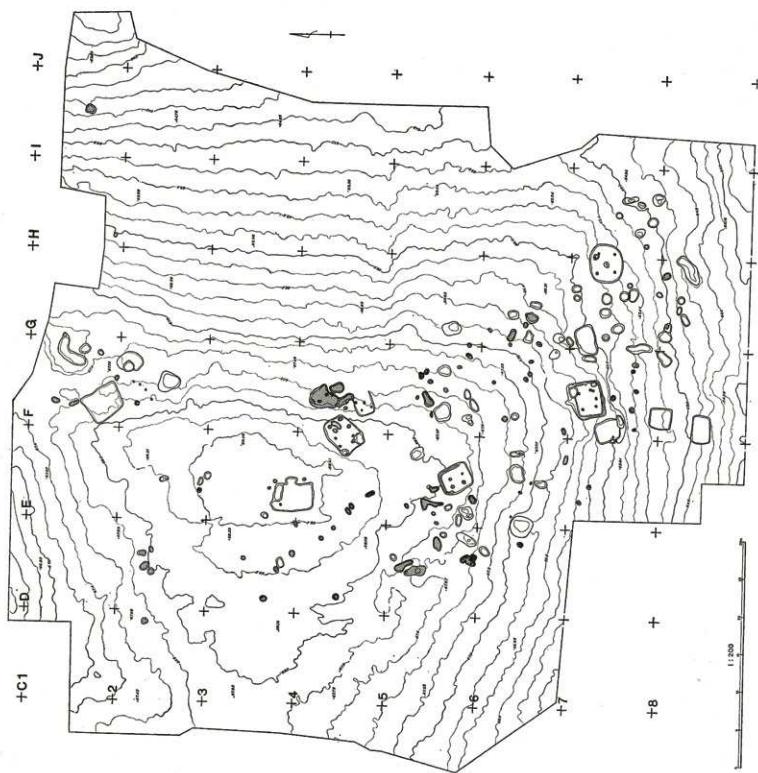
古墳時代の4・5号住居跡は、F1・7グリッドより検出された。4号住居跡は、傾斜面に横築されているため東壁が不明瞭である。5号住居跡は、奈良時代の住居跡にそっくり切られていたが床面上より多量の遺物が出土している。

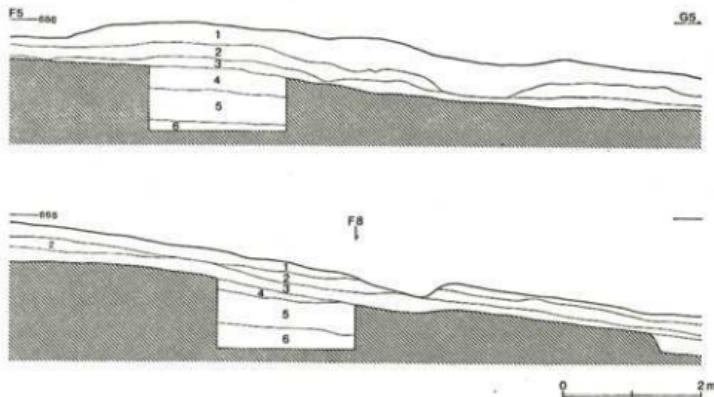
奈良時代の住居跡は、平坦面上にF4・5、緩傾斜面F7グリッドから近接して検出された。各住居跡の出土遺物から、ほぼ同時期の所産と推定されるが、概期の一般的住居跡形態とはやや異なり、カマドの無いもの、張り出しもをつ住居跡がある。6・8・9号住居跡のカマド内や覆土中からは、平瓦及び丸瓦が出土している。また、8号住居跡の床面上からは、多量の灰色粘土塊が置か



第3図 緑山遺跡地形図

第4図 梓山地盤全測図





第5図 基本層序

れた状態で検出され、単純的ではあるが、瓦の工房跡の可能性があるため、周辺の緩斜面を鋭意精査したが、窯跡は検出得なかった。

物見山丘陵では、桜山窯跡群、根平遺跡、舞台遺跡から、多くの問題を提起した埴輪窯跡と工房跡、須恵器窯跡、立野遺跡では、須恵器生産に関連した工房跡もしくは選別所的な性格をもつ遺構が検出され、また、緑山遺跡から瓦の生産に関連した遺構が確認された意義は大きく、新たな問題を提起している。

緑山遺跡の基本層序は、以下の通りである。

第1層 茶褐色土（表土） 上面には腐解土が混入している。

第2層 明茶褐色土 砂質が強く軟らかい。一部柔・雜木根の攪乱が激しい。

第3層 茶褐色土 弱い粘性を帯びやや硬い。

第4層 黄褐色ローム 遺構の存在する地域に認められ、下部は粘質化している。

第5層 淡茶褐色粘質土 物見山丘陵で一般的に認められる土層、少量の礫を含み硬い。

第6層 灰色粘土 少量の赤褐色鉄分をしみ状に含む。

Ⅱ章 引用・参考文献

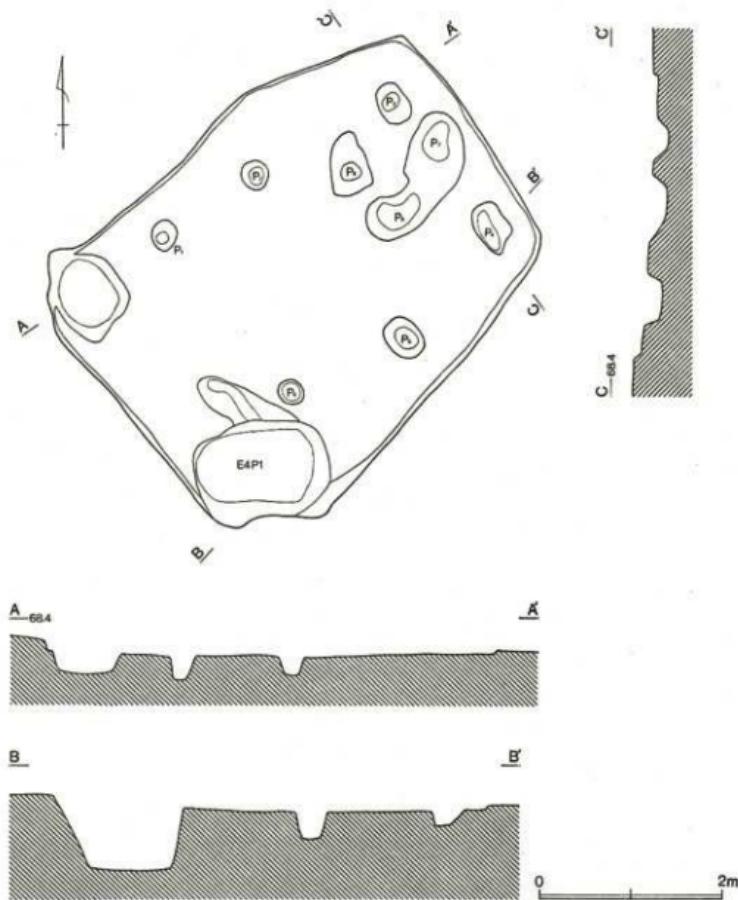
- 福村組元「埼玉県北金郡今宿瓦窯址」 日本考古学年報3 1950
- 井上尚明ほか「物見山城跡」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第24集 1980
- 井上 雄ほか「舞台」 資料編 埼玉県遺跡発掘調査報告書第17・18集 1978・1979
- 今井 宏ほか「鬼沢・立野・大塚原」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第28集 1980
- 梅沢太久夫「江光山遺跡の調査」 第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨 1973
- 梅沢太久夫「八幡遺跡」 都幾川市教育委員会 1969
- 金井塙良一ほか「平松台遺跡一調査の概報一」 1969
- 金井塙良一ほか「花見堂」 嵐山町教育委員会 1976
- 栗原文蔵「岩の上・雉子山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第1集 1973
- 小久保徹「桜山古墳群」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第2集 1981
- 水村孝行ほか「桜山窯跡群」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第7集 1982
- 高橋一夫「比企郡鳩山村出土の須恵器」 埼玉考古16号 1977
- 田中一郎ほか「青島城跡」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第6集 1974
- 谷井 龍二ほか「鶴淵」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第4集 1974
- 野部徳秋ほか「田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集 1974
- 宮 昌之ほか「埼玉県古代寺院跡調査報告書」 埼玉県県史編さん室 1982

IV 遺構と出土遺物

1 住居跡と出土遺物

1号住居跡（第6図）

遺跡は中央部の平坦面から緩傾斜面に移行する肩部のE4、F4グリッドにかけて検出された。4.92×3.75mの長方形プランを呈する住居跡で、南コーナーが1号土壙と重複している。壁高



第6図 1号住居跡

は西辺で10cm、東辺で4cmと東へ行くにつれ浅くなり保存状態は不良であった。床面は一部堅固であったが、柔、雜木根の攪乱も有り全体的に軟弱である。柱穴はP₁～P₂とP₄～P₆が3本づつ平行してあり、主柱穴になるものと思われる。炉跡は床面を精査したが、検出できなかった。遺物は床面上より少量の土器と石鏃、石皿、ナイフ形石器が出土している。

土器（第7図）

1は0段多条のRLの繩文厚体を地文とし、3条の多截竹管による平行沈線文を持つ。表面は荒れているが、内面は丁寧に磨かれている。2・3・5・6は羽状繩文の胴部片である。原体は0段多条のLRとRLの繩文を使用している。3は羽状間に指撫痕が見られる。胎土には纖維を含み、内面は磨かれている。6は焼成不良、赤褐色、他は焼成良好、茶褐色を呈している。



第7図 1号住居跡出土土器

石器

石鏃（第98図11）

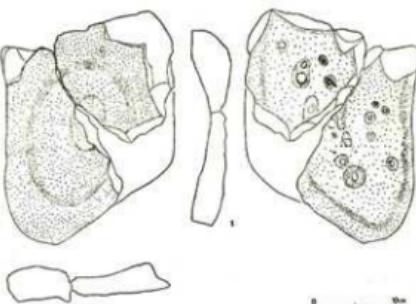
無茎小形のもので完形品。両面とも側辺より細かな剥離が加えられ、先端部も鋭い。基部の抉りは浅い。0.77g、チャート製。

石皿・凹石（第8図）

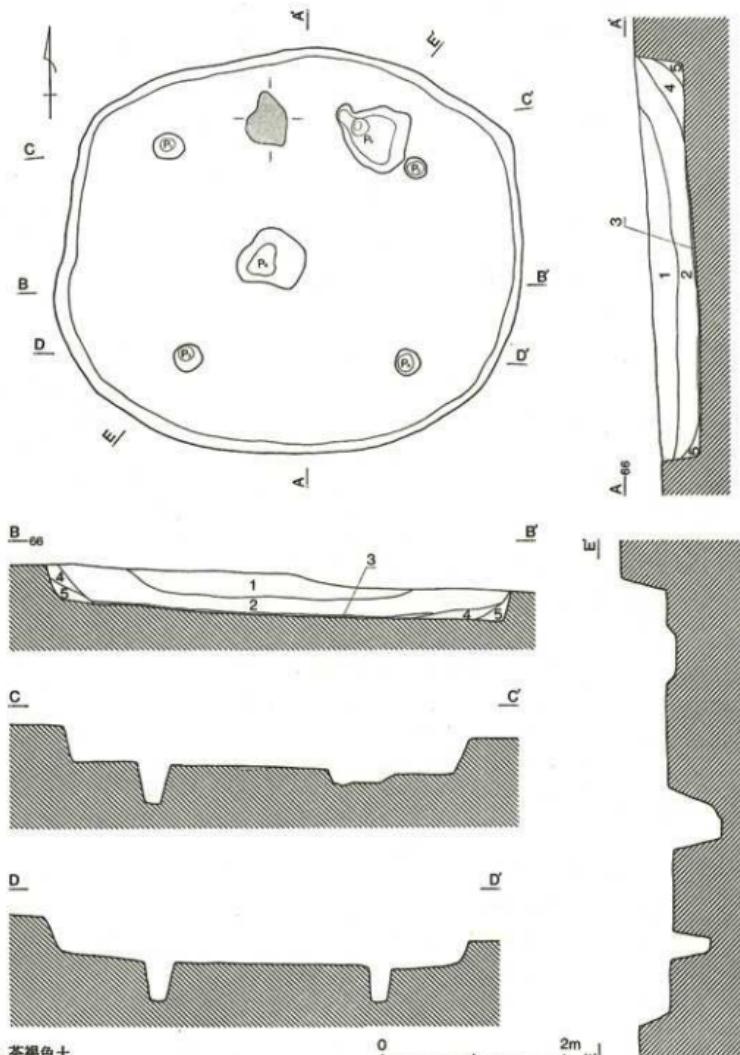
石皿と凹石に両面とも使用された大形のもの。中央で破損し、程度欠損している。石皿側は18×12cmの範囲椭円形に擦り減っている。重さ2.75kg、綠泥片岩製。

ナイフ形石器（第97図2）

覆土上面より出土している。整った剥片を表材にしたものと思われ、片面のみ調整加工が施され、片面は主剥離面を残している。調整加工は主剥離面



第8図 1号住居跡出土石器



1. 茶褐色土
2. 黑褐色土
3. 黑灰色土
4. 黄褐色土
5. 灰色土

0 2m

第9図 2号住居跡

側から行なわれ、鋭い先端部、刃部を作り出している。基部は作り出されていない。3.6 g、黒曜石製。

2号住居跡（第9図）

G7グリッドの緩傾斜面に検出された。5.12×4.43mの隅丸長方形を呈する保存状態良好な住居跡である。壁高は北辺で54cm、他の三辺で約40cmを測り、緩く立ち上がっている。覆土は茶褐色土・黒褐色土が主体となり、黒褐色土中より遺物の多くが出土している。炉跡は、北壁寄りのP₁とP₄間に検出された。60×43cmの範囲が床面より5cm前後掘り窪められ、覆土には焼土が認められたが、炉底はあまり焼けていない。床面はほとんど凹凸もなく全体が堅固である。柱穴は6本検出され、P₁～P₄と中央のP₅が主柱穴と考えられる。遺物は土器の他、石鎌、打製石斧、凹石、勾玉が見られる。

土器（第11図）

1～4は条痕文土器である。1は口唇部に刺突を持ち、凹線文と刺突列点文で文様が構成されるやや外反する口縁部である。2・3は条痕のみ見られる胴部片。4は底部に近いものではほとんど無文。1～3の胎土には多量の繊維を含む。焼成良好で茶褐色。4は少量の繊維と雲母が含まれ焼成良好、赤褐色を呈する。

5・6は同一個体と思われる口縁部片、口唇直下に2条の平行沈線文、1条のコンパス文が見られ、6には小突起と器表側からの穿孔が見られる。

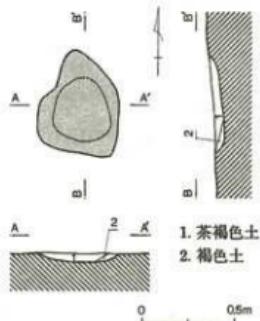
胎土には少量の繊維と石英が含まれ、焼成良好で堅緻である。黒褐色。7は平縁の深鉢口縁、縄文を地文とし半截竹管による2条の爪形文を持つ。8は小波状口縁、口唇部直下に竹管による刺突、無節LRの縄文を地文としている。少量の繊維を含み、焼成不良、濃茶褐色。9は頸部片、平行沈線とコンパス文で構成され、繊維を多量に含むが焼成良好、茶褐色。5～9は黒浜式。

10～19は覆土下層及び床面上より出土した諸磽a式である。10は小波状口縁を呈するもので、波頂部より円形刺突文が垂下し、口縁に沿って2条の竹管刺突が加えられている。地文に単節RLの縄文を持つ。胎土には少量の砂粒を含み、焼成良好、赤褐色。11は爪形文、12は平行沈線文、胎土には10同様砂粒を含む。焼成良好。13～19は縄文のみの深鉢。単節RLの原体を器壁が良く乾いてから押捺している。胎土には少量の砂粒を含み、焼成良好で堅緻。13・16は黒褐色、他は茶褐色。20は小形深鉢になるものと思われ、爪形文の菱形区画内を平行沈線文で充填している。胎土は砂粒も含まずきめ細かい。内面は丁寧に磨かれ滑沢である。焼成良好、堅緻。有尾式の搬入品と思われる。

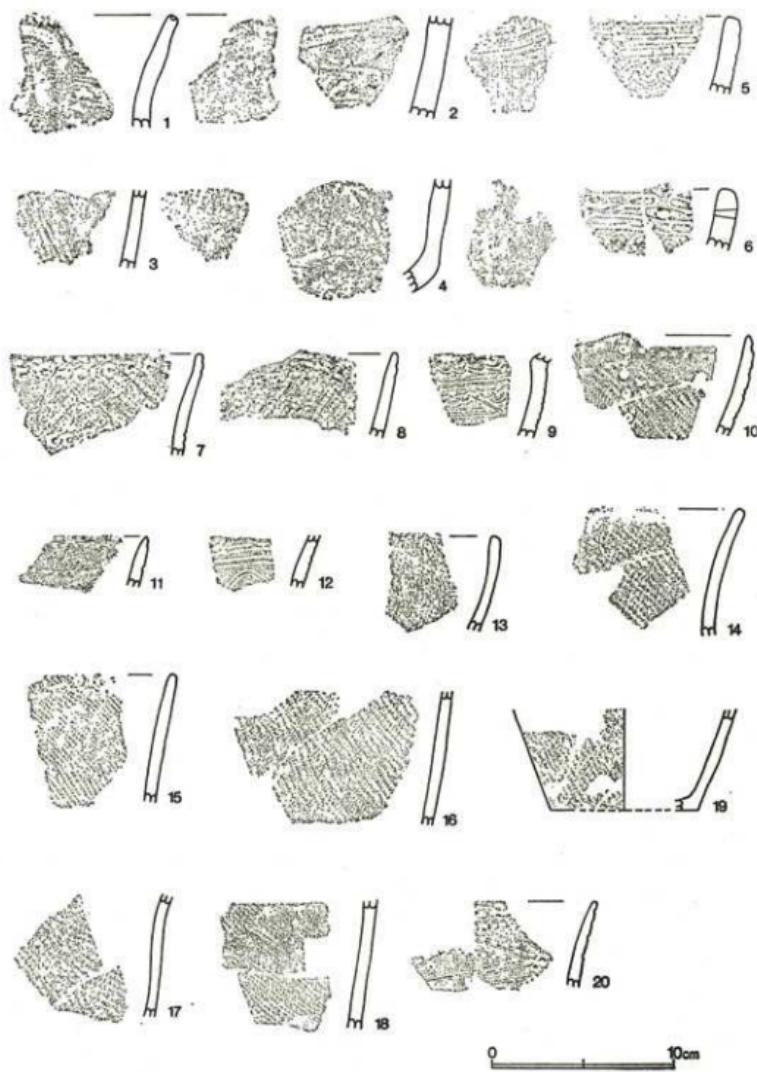
石器（第12図）

石鎌（第99図18）

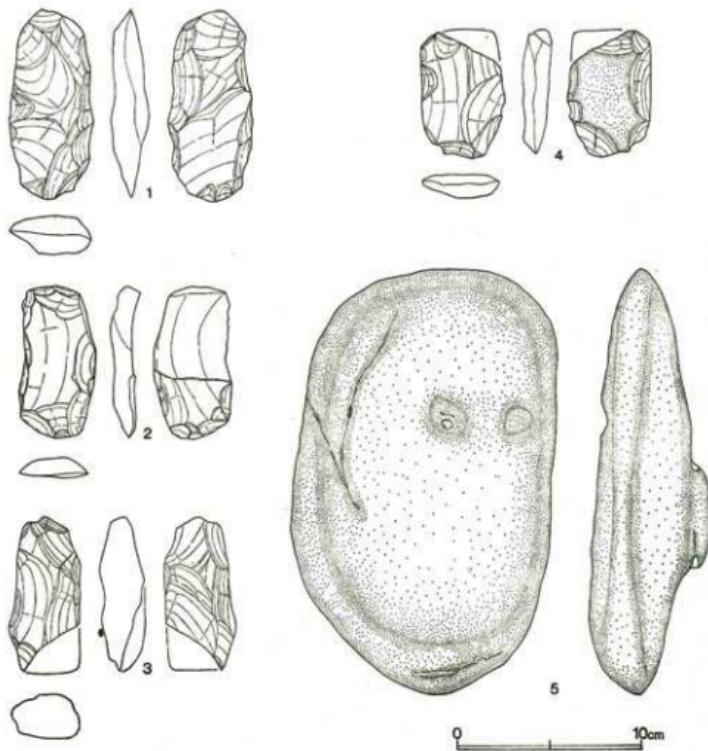
先端部を欠損する小形の無茎石鎌。両面とも細かな剥離が側辺より加えられ、抉りは浅い。チャート製。



第10図 2号住居跡炉跡



第11図 2号住居跡出土土器



第12図 2号住居跡出土石器

打製石斧（第12図1～4）

1は短冊形を呈する完形品。両面とも大きな主剥離面を残し、側邊から粗い剥離が加えられている。刃部は薄い。2はやや湾曲した短冊形の完形品。刃部は両面より調整され薄い。3は刃部を欠損する粗雑な作りのもの。肉厚で調整も雑である。4は頭部を欠損する小形品。片面には大きく自然面を残し側邊より調整されている。

凹石（第12図5）

住居跡中央のP内より出土し、円盤状の自然縫を使用している。平面側に一ヶ所凹部が認められる。

勾玉（第13図）

北西コーナーの壁直下床面上より出土している。頭部を欠損しているが、全面丁寧に磨きこまれている。頭部に一条、尾部に二条の沈線が刻まれ、穿孔は両側より行なわれている。



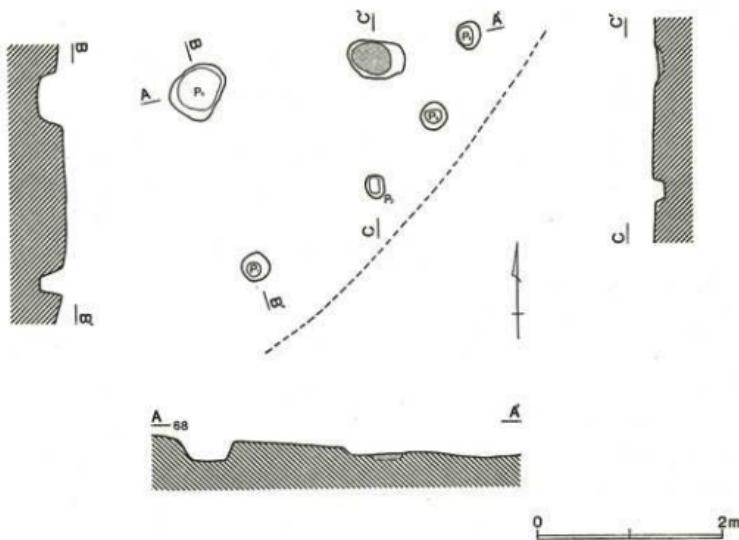
第13図 2号住居跡出土勾玉

1・2号住居跡出土石器

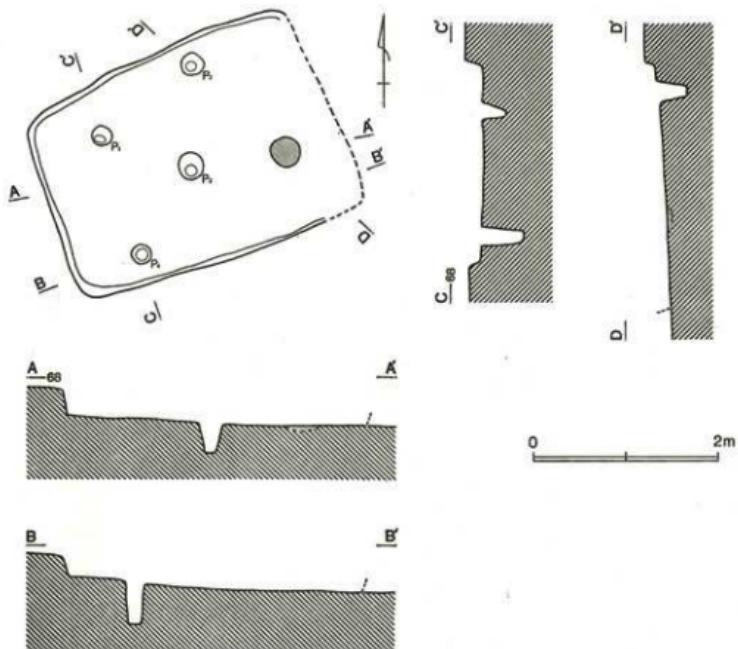
| 図番 | 種別 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石質 | 備考 |
|------|-------|--------|-------|--------|-------|---------|------------|
| 8 | 石皿・凹石 | | | | | 綠泥片岩 | 中央で破損の程度欠損 |
| 12-1 | 打製斧石 | 10.2 | 4.0 | 2.0 | 100 | ホルンフェルス | 完形 |
| 〃 2 | 打製石斧 | 8.2 | 3.5 | 1.0 | 60 | 粗粒砂岩 | 完形 |
| 〃 3 | 打製石斧 | 8.4 | 3.6 | 2.4 | 90 | ホルンフェルス | 刃部欠損 |
| 〃 4 | 打製石斧 | 6.6 | 3.4 | 1.2 | 60 | 泥岩 | 頭部欠損 |
| 〃 5 | 凹石 | 23.1 | 14.1 | 6.0 | 3089 | 粗粒砂岩 | 完形 |
| 13 | 勾玉 | 2.2 | 0.5 | 0.4 | | 蛇紋岩 | 頭部欠損 |

3号住居跡（第14図）

1号竪穴跡の南側に近接してF2グリッドより検出された。耕作等の擾乱のため壁もすべて失われ、炉跡と柱穴5本が検出されたもので、規模、プランは不明である。炉跡は44×36cmの範囲が5cm前後床面より掘め立てられ、堅く焼けていた。柱穴はP₁～P₄が並んで検出され深さもほぼ同じである。炉跡内より黒浜期の細片が出土している。



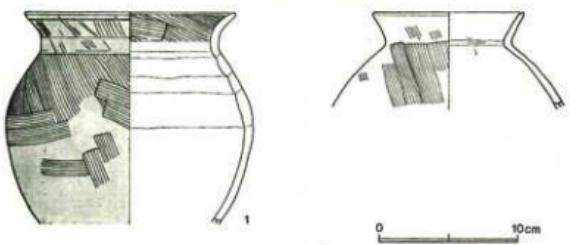
第14図 3号住居跡



第15図 4号住居跡

4号住居跡（第15図）

1号住居跡の東に近接して検出されている。東への緩傾斜面の肩部に位置し、東壁は斜面により流失して不明である。プランは長方形を呈し、主軸方向はN-69°—Eである。規模は長辺32m、短辺2.4mを計る。壁は急角度で立ち上がり、現壁高は最高部の西壁で25cm程度である。壁溝はない。床面は平坦であるが、地表面の傾斜と同様に東側へ僅かに傾斜している。一部軟弱な部分もあるが全体的に堅くしまった床面である。ピットは4個検出され、直径25cm前後、深さ30~45cmを計る。



第16図 4号住居跡出土土器

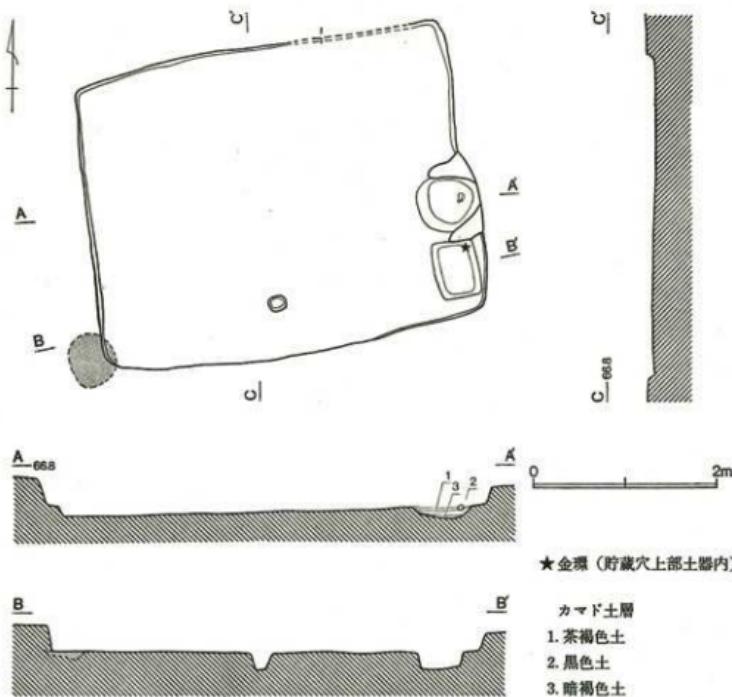
が、その配列は整ってない。炉は東よりの所で確認され、地床炉である。直径30cmの円形を呈し、深さは5cmであり、炉底は焼けてしまつて

いた。

出土遺物は少なく、土師器甕形土器の破片 2 個体分である。

4号住居跡出土土器

| 器種 | 番号 | 大きさ(cm) | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|----|----|--------------------|--|--|--------------------------|
| 甕 | 1 | 口径 15.1 胴径 17.8 | 胴部上半に最大径があり張っている。口縁部は「く」字状に屈曲し大きく外反しながら開き、肥厚している。輪模痕明瞭、外面及び口縁内面丹彩。 | 胴部上半縦方向のハケ目。中央部横位のハケ。下半ハケの後ナデている。頸部強いナデ。口縁ハケ後弱いナデ。焼成良好。作りは外面丁寧で内面は雑。 | 胎土 砂粒含 色調 赤褐色 |
| 甕 | 2 | 口径 10.9 小破片 | 口縁部は「く」字状に強く屈曲し直線的に小さく開く。 | 胴部外面細やかなハケ整形。口縁内外面ハケ後ナデ。焼成良好、作り良 | 胎土 砂利含 色調 茶褐色 上層出土 |



第17図 5号住居跡

5号住居跡（第17図）

9号住居跡と2号竪穴跡に挟まれ、遺跡の南側緩傾斜面から検出されている。6号住居跡の下面で発見されたもので、6号住居跡内に全体がすっぽりと収まっている。6号住居跡の調査中に東壁際で焼土が検出されたため、北壁の他に東壁にもカマドが存在するものかと考えたが、6号住居跡の床面にトレンチを設定したところ、貼床であることが確認され、これを除去すると10cm下に5号住居跡の床面が発見された。

プランは東西に長い長方形を呈し、規模は 4.25×3.4 mを計る。主軸方向はN-82°-Eである。壁の立ち上がりは最高部で10cmしかない。床面は平坦であるが、西側へ若干傾斜している。

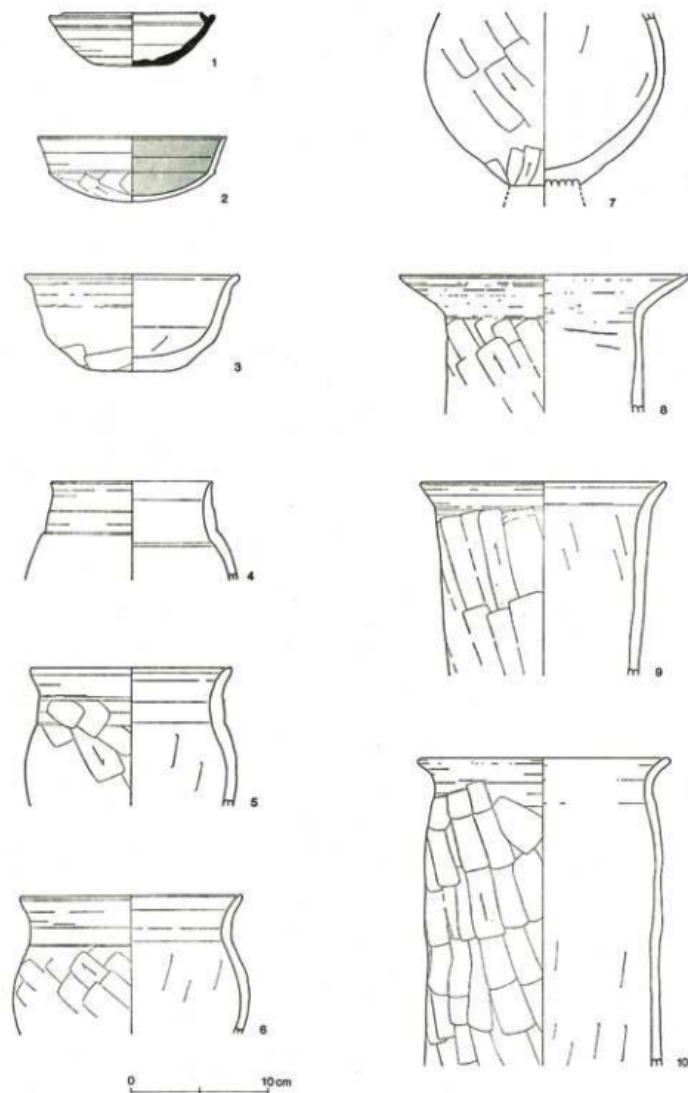
ピットは南壁寄りで直径25cm、深さ16cmの小ピットが1個検出されただけである。貯蔵穴はカマドの南側にあり、南北60cm、東西50cmの長方形を呈し、深さは17cmである。

カマドは東壁中央部やや南寄りにあるが、上部を6号住居跡に削平されてしまっているため、わずかに形状を止めているのみである。焚口幅60cmで全長は70cmである。燃焼部は床面を10cm掘り込んでおり、火床面から挙大の石が1個発見され、支柱かと思われる。

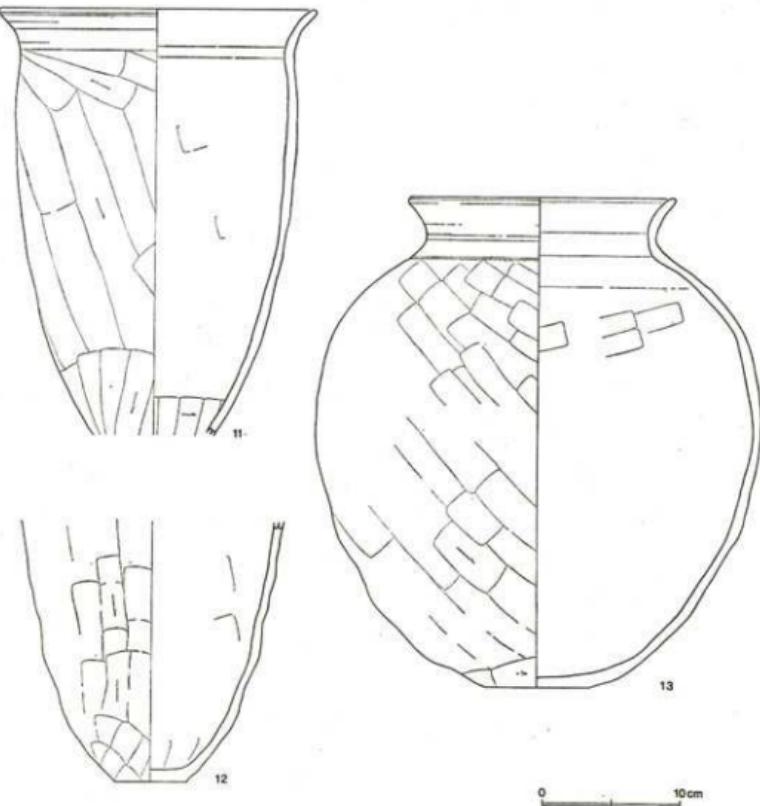
出土遺物は豊富で須恵器壺、土師器壺、甕等があり、実測可能なもので13個体ある。また、東南コーナーより出土した土師器甕の破片に乗った状態で耳環が1点出土している。

5号住居跡出土土器

| 器種 | 番号 | 大きさ(cm) | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|-------|----|-------------------------------|---|--|------------------------------|
| 須恵壺 | 1 | 口径 10.0 受部径 12.0 器高 3.9 | 立ち上がりは、外反気味に内傾している。受部は体部の延長上にあり、端部は肥厚している。口縁部と受部の間に沈線が一束。平坦な底部から内溝する体部へつづく。 | 底部外面窓切り未調整。底部内面凹凸激しくナデが雜。体部外面下半部は窓削り。体部内外面上半部はナデが丁寧。 作りはやや雜である。 | 床面 胎土 細やかな砂粒含む 色調 淡灰色 |
| 壺(内黒) | 2 | 口径 13.6 器高 4.7 30% | 丸味をもった底部から鋭い腰をもち、口縁は直線的に少し外傾する。口唇端はつまみあげられわざかに外反する。 | 全体に作りが丁寧である。 体部外面△方向の窓削り。口縁外圓右回転横ナデ。内面ナデ。 焼成良好で堅緻である。 | 胎土 砂粒わずかに含む 色調 内一黒彩、外一赤褐色 |
| 鉢 | 3 | 口径 15.6 器高 7.0 50% | 平坦な底部から体部中央部でゆるやかな腰をもって立ち上がる。口縁は大きく外反し、口唇は肥厚している。 | 底部窓削り丁寧。体部外面下半不明瞭な窓削り。口縁部内外面横ナデ。焼成良好。 作りは雜で全体に厚ぼったい。 | 床面 胎土 砂粒含む 色調 赤褐色 |
| 甕 | 4 | 口径 11.6 10% | 口縁部と胴部の境に稜をもつ。口縁部はゆるやかに外反し、中央に一本の稜がある。口唇は薄く鋭くつまみ上げられている。 | 胴部外面に不明瞭な窓削り痕。口縁部内外面横ナデ。外圓は右まわり。焼成良好。 作りは丁寧。 | 胎土 砂粒含む 色調 濃茶褐色 |



第18図 5号住居跡出土土器



第19図 5号住居跡出土土器(2)

| 器種 | 番号 | 大きさ(cm) | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|----|----|----------------|--|--|-----------------------|
| 甕 | 5 | 口径 14.5 40% | ゆるい丸味をもつ胴部から直立する頭部へ。口縁はゆるやかに外反し全体に肉厚で、特に頭部はぼてっとしている。 | 胴部外面下方向への箝削り。内面削り後ナデ。口縁部横ナデ。頭部には一部箝削り。内面丁寧な横ナデ。焼成悪く、作りも雑である。 | 胎土 砂粒・小砾多い。 色調 黒褐色 |
| 甕 | 6 | 口径 14.0 10% | 丸味のある胴部から口縁部は小さく外反する。口唇部はつまみ上げられている。 | 胴部外面口縁方向への箝削り。内面は箝削り後ナデ。口縁部内外面は横ナデ。焼成は良好だが作りは雑。 | 胎土 小砾多 色調 茶褐色 |

| 器種 | 番号 | 大きさ(cm) | 形態の特徴 | 手 法 の 特 徴 | 備 考 |
|-----|-----------------------|---------------------------------------|---|---|----------------------|
| 台付甕 | 7 | 胴部最大径 17.5 10% | 丸味のある胴部をもち、底部は肉厚である。台部の剥離痕が認められる。 | 胴部外面縦方向の箝削り、内面横方向の箝削り。脚台との接合部は逆方向の箝削り。 | 胎土 小球多 外面黒色 内面赤褐色 |
| 甕 | 8 | 口径 21.1 10% | 直線的な胴部から口縁部は「く」字状に大きく開く。 | 胴部外面逆方向の箝削り。口縁部内外面横ナデ。焼成良好。作り難 | 胎土 小球多 色調 茶褐色 |
| 甕 | 9 | 口径 18.0 20% | 直線的な胴部から口縁部は小さく開く。全体的に熱を受け器面は荒れている。 | 胴部外面逆方向の箝削り。内面横方向箝削り後ナデ。口縁内外面横ナデ。焼成、作りとも悪い。 | 胎土 砂球多 色調 赤褐色 |
| 甕 | 10 | 口径 18.5% 10% | 直線的に立ち上がる胴部から口縁部は小さいが、大きく外反する。器面は荒れても多い。 | 胴部外面逆方向の箝削り。内面横方向箝削り。口縁部内外面横ナデ。 | 胎土 小球多 色調 赤褐色 |
| 甕 | 11 | 口径 23.2 50% | 胴部最大径は上位にあり、口縁部はゆるやかに開き外反する。 | 胴部外面上位斜上方向、中位斜下方向、下半縦方向箝削り。口縁部内外面横ナデ。作りは丁寧。 | 胎土 砂球多 色調 茶褐色 |
| 甕 | 12 | 底径 5.3 40% | 小さな底部から胴部は下半に張りをもち立ち上がる。 | 底部細やかな箝削り。胴部外面中位縦方向箝削り。下半逆方向箝削り。内面箝削り後ナデ。 | 胎土 砂球多 色調 赤褐色 |
| 甕 | 13 | 口径 19.4 底径 7.5 器高 35.5 | 小さな底部から胴部は球形を呈し肩部でやや張る。頸部で括れ、口縁部は大きく外反し、口唇部は丸味をもっている。 | 底部丁寧な箝削り。胴部外面は斜下方への丁寧な箝削り。内面は丁寧なナデ。口縁部内外面は横ナデ焼成は良好。 | 胎土 砂球多 色調 赤褐色 |
| 耳環 | 直徑 幅 1.7 0.6 | 小形の完形品、断面は橢円形を呈し、両端は鋭い。 | 鋼芯に金貼りがしてあり、部分的に錆により剥落している。 | | 金環 |

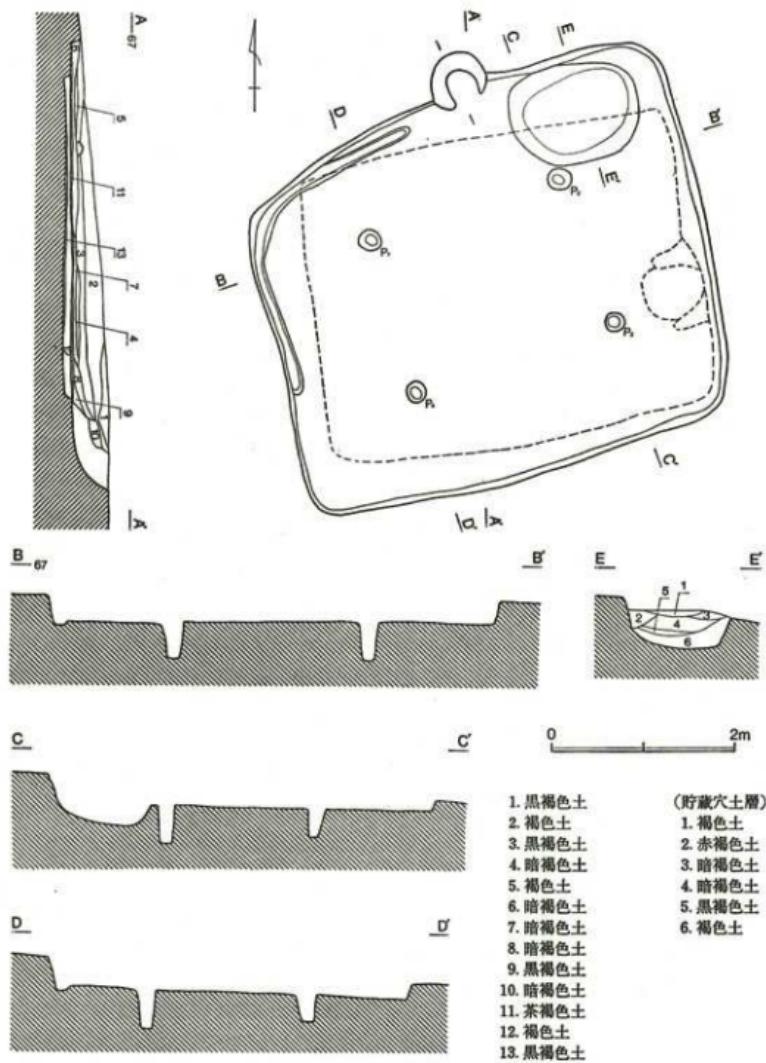
6号住居跡（第20図）

南側緩傾斜面に位置し、西には接する様に9号住居跡が所在する。5号住居跡を掘削、貼床して構築されており、5号住居跡を一回り大きくした形で重複している。

プランは東西に長い長方形を呈するが、東壁が少し長くややいびつである。規模は4.95×4.28mを計る。主軸方向はN-18°-Wである。壁は急角度で立ち上がるが、斜面であるため北壁が高く南壁が低い。現壁高は最高部で30cmである。床面は平坦であるが、北側がやや高くなっている。

柱穴はコーナーに沿って4本発見され、規模は直徑23cm前後、深さ30cm~40cmと小形である。貯蔵穴はカマドの東側にあり東西1.42m、南北1.07mの橢円形を呈し、深さは40cmであり、覆土中には焼土、炭化物が含まれていた。

カマドは北壁のはば中央部に構築され、幅140cm、全長155cmを計り、壁外に約100cm出ている。遺存状態は悪く、袖部も痕跡が見られた程度であった。器設部、煙道部は不明である。カマドからは平坦であるが、北側がやや高くなっている。



第20圖 6号住居跡

柱穴はコーナーに沿って4本発見され、規模は直径23cm前後深さ30cm~40cmと小形である。貯蔵穴はカマドの東側にあり東西1.42m、南北1.47mの椭円形を呈し、深さは40cmであり、覆土中には焼土、炭化物が含まれていた。

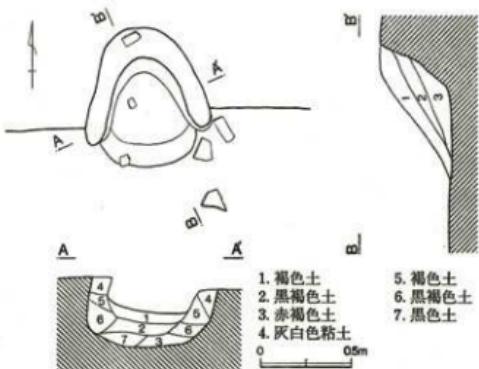
カマドは北壁のはば中央部に構築され、幅140cm、全長155cmを計り、壁外に約100cm出している。遺存状態は悪く、袖部も痕跡が見られた程度であった。

器設部、煙道部は不明である。カマドからは、土器の他に瓦、砾石が出土している。

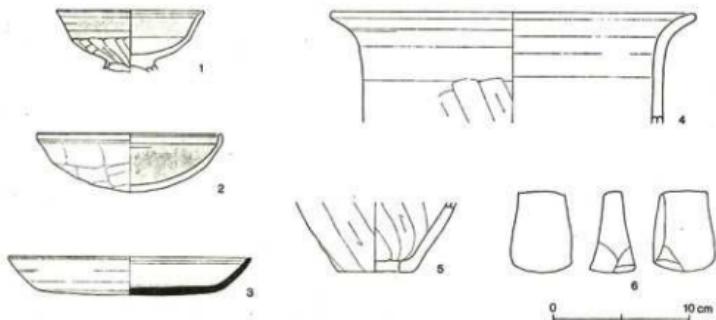
出土土器には土師器盤、高坏、甕等がある。

6号住居跡出土土器

| 器種 | 番号 | 大きさ(cm) | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|-----|----|------------------------------|--|--|------------------|
| 高坏 | 1 | 口径 10.3 底径 4.0 | 脚部欠損。全面丹形。体部と口縁部との間にゆるい段をもち、口縁は外傾しながらわざかに外反する。 | 体部外面丁寧な箇削り。内面ナデ口縁部内外面丁寧な横ナデ。焼成、作りとも丁寧である。 | 胎土 砂粒含むが、きめ細かい。 |
| 坏 | 2 | 口径 13.6 器高 4.2 40% | 丸味をもった体部から口縁部は小さく直立する。口唇は肥厚している。口縁部外面、内面全面丹形。 | 底部は細やかな箇削り、体部外面やや粗い箇削り。内面丁寧なナデ。口縁部内外面横ナデ。焼成良好。 | 胎土 砂粒多色調 赤褐色 |
| 須恵盤 | 3 | 口径 17.7 底径 12.8 器高 2.8 | 扁平な器形。丸味のある底部から体部は外傾しながら短く開く。口縁内面に一条の沈線がある。 | 体部外面、内面全面が丁寧なナデだが小さな凹凸がある。底部は細やかな手持ち箇削り。ロクロ右回り。焼成良好、堅敏、作り丁寧。 | 胎土 砂粒多色調 濃灰色下層出土 |
| 甕 | 4 | 口径 26.7 | 口縁部のみ。厚手。口縁部は短かく、大きく外反しながら開く。 | 胴部外面縱方向箇削り、口縁部内外面横ナデ。焼成良好。 | 胎土 砂粒含色調 黒色 |
| 瓶 | 5 | 底径 5.6 孔径 3.4 | 底部破片。底部中央に大きな孔が1つ。 | 外面は縦方向の粗い箇削り。内面は口縁方向の細やかな箇削り。焼成良好。 | 胎土 小球多色調 茶褐色上層出土 |
| 砾石 | 6 | 全長 5.7 | 幅4cm、厚さ12cm。四面とも使用されている。表裏面が主底面で中央がすり減っている。 | 細粒砂岩製 | 半欠品 |



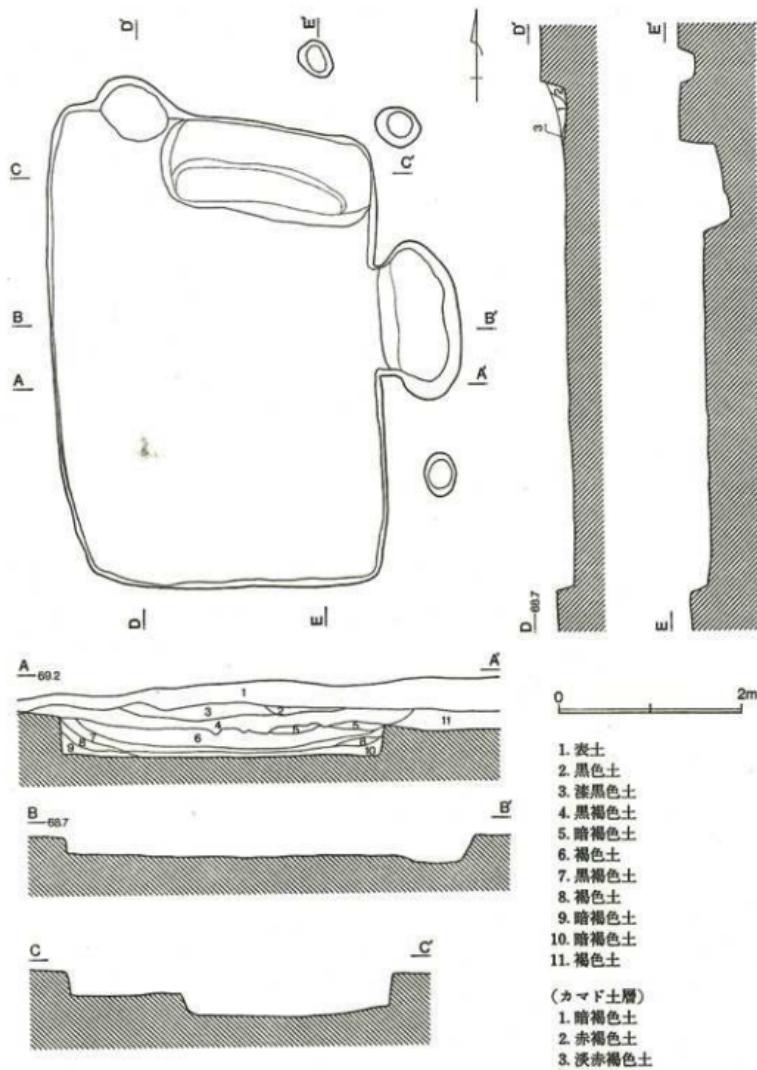
第21図 6号住居跡カマド



第22図 6号住居跡出土土器・石器

6号住居跡出土瓦

| 種別 | 図No. | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 厚さ (cm) | 凸 面 | 凹 面 | 桶 軸 | 胎 土 | 焼成 | 色調 | 接合関係 | 備考 |
|----|------|------------|-----------|------------|--|--|---|---|----------------|--|-------|----|
| 平瓦 | -7 | 9.5 | 9 | 1.7 | ヘラで横ナ ~デ。 | 布、枠板痕。右上端部へ抜ける 糸切り。 | 2.4-2.5 -2.8 | 0.2 mm 以下の砂粒・ 含有。粘土質部分 きめ細かい。 | 6住カマド 周辺1点。 | | | |
| | + | | + | | | | | | | | | |
| | α | | α | 2.2 | | | | | | | | |
| 平瓦 | -8 | | | | 長方形格子 に斜行を加 えた叩きの 上を幅約6 cmのヘラで 横ナデ。 | 広端部から入り 右側端部へ抜け た。左手支点に した弧を描く系 途中に紐を抜い つけた跡。 | 1.7-2.4 -3.3- 1.8-3.1 -3.3- 2.0-2.6 -2.2- 2.4 | 最大0.8 mmの砂粒 や微砂粒多量に含 有。白色針状物質 1 cm=8 | 普通 | 6住フク土 4点、6住と同 カマド周辺類と 1点、F 6と思わ れる | No.21 | |
| 平瓦 | -9 | 20.1 | 16.4 | 1.55 | 平行叩き、 ~ヘラで横ナ 1.88 デ。 | 側端部から入り 左手支点にした 弧を描く糸切り 布つなぎ目あり | 2.9-3.0 -2.7- 2.2+3.0 | 最大0.6 mmの砂粒 少量、0.1 mm以下 の砂粒、黑色微粒 子含有。僅かに粘 性あり。白色針状 物質。 | 普通 | 6住フク土 3点 | | |
| | + | | + | | | | | | | | | |
| | α | | α | | | | | | | | | |
| 丸瓦 | -1 | 43.5 | 13.6 | 1.1 | 長方形格子 ~上に幅6 cm 1.5ヘラ横ナデ。 | 広端部から狭端 部へ左手支点の 弧を描く糸切り 布、枠木底。 | 2.2-2.6 -2.1- 2.5 | 0.1 mm 以下の砂粒 多量に含有。白色 針状物質 1 cm=4 | 普通 | 6住カマド 2点、フク F 2点、9 住1点° | | |
| 丸瓦 | -3 | 45.4 | 16.8 | 0.9 | 長方形格子 +の上にヘラ 1.6横ナデ。 | 布接合痕、重ね 痕。一部布がま くれ上がり枠板 接着痕が観える | 3.1-2.7 -2.4-3.2 2.1-2.4 2.2-2.9-5 | 0.2 mm 以下の砂粒 多量に含有。 白色針状物質 1 cm 5 | 普通 | 1住カマド 2点、フク 土6点、0 住1点。 | | |
| | + | | + | | | | | | | | | |
| | α | | α | | | | | | | | | |



第23図 7号住居跡

7号住居跡（第23図）

緑山遺跡で最も標高の高い頂部の狭い平坦面に位置する。東壁のはば中央部に、 $170\text{cm} \times 90\text{cm}$ の梢円形を呈する土壇があり、当初、本住居跡と重複関係にあるかと思われたが、覆土の差が明確でなく、その位置から本住居跡に伴なうものと思われる。

プランは長方形を呈し、主軸方向はN-Sである。規模は長辺5.15m、短辺3.5mを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、現壁高は最高部で40cmである。壁溝はない。

床面は、ほぼ水平であり凹凸も観られず、良く踏み固められ堅い。ピットは $24\text{cm} \times 12\text{cm}$ の小ピットがあるが、他に住居跡外に3個のピットが北東コーナーから東壁にかけて検出された。貯蔵穴はカマドの東側で確認されたが、東西2.1m、南北1mの長大なもので、床面からの深さも40cmある。

カマドは北壁の北西コーナーに近い所にあるが、遺存状態は悪く、焼土ブロックの堆積が若干ある程度で、袖部や天井部等の細部についてはほとんど痕跡もなかった。幅80cm、全長70cmで、床面より5cm程度掘り込まれていた。

出土遺物は、厚手の土師器壺の1点である。

7号住居跡出土土器

| 器種 | 番号 | 大きさ(cm) | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|----|----|-----------------------------|---|---|--------------|
| 壺 | 1 | 口径 11.6 底径 6.5 器高 5.2 | 全体的に厚く、深い。丸味のある底部から内湾気味に開き、口縁部は、わずかに外反する。 | 体部内外面ナデ。指痕、指紋が見られる。底部外面箠削り。内面箠削り後ナデ。焼成良好。 | 胎土 小疋多色調 茶褐色 |

8号住居跡（第26図）

平坦面から南へ傾斜する緩傾斜面の肩部に位置し、周辺には炉穴や土壇が多数分布している。確認面はソフトロームである。平面プランは隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-24°-Wである。規模は長辺4m、短辺3.3mを計る。壁は急角度をもって立ち上がり、現壁高は最高部の東壁で46cmある。壁溝は、北壁と東壁に観られ、幅15cm、深さ7cmで廻っている。

床面は良く踏みしめられ、ほぼ平坦である。北西コーナー部に厚さ5cm程の焼土の堆積が、又、南東コーナー部には、厚さ10cmでかなり広く灰白色粘土の堆積がある。

炉、カマドは確認されなかった。ピットは3個検出された。いずれも深さ25cm程の浅めのもので、住居跡西半部に片寄っている。

なお、検出された焼土、粘土はいずれも流れ込んだものではなく、床面に密着した状態にあり、置かれたものである。

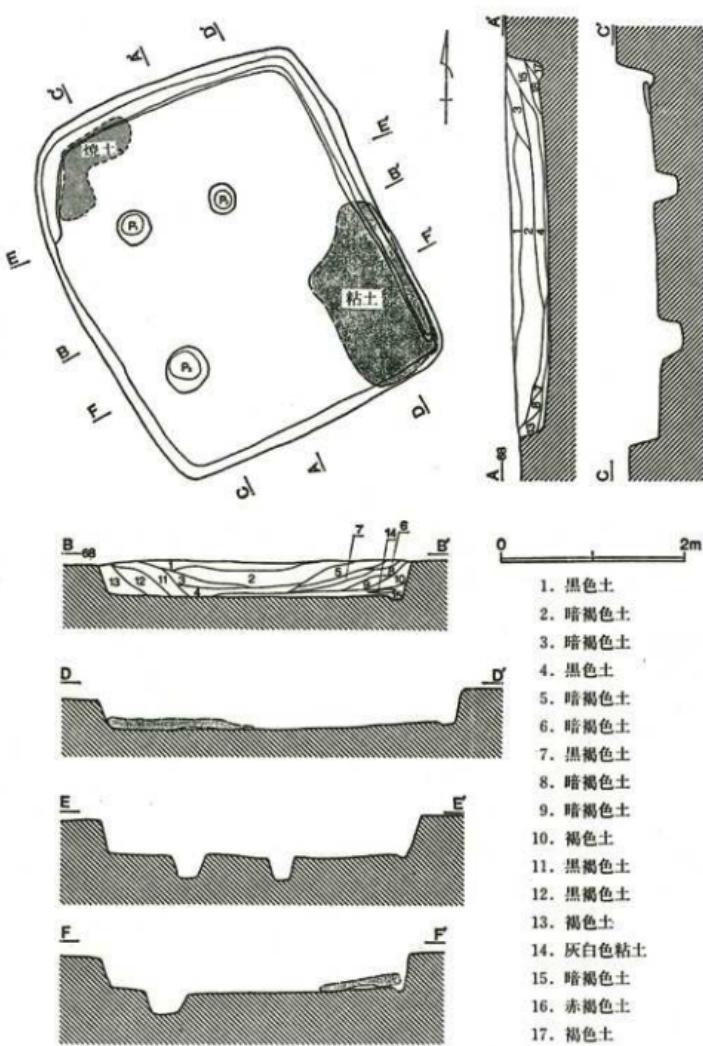
出土遺物は、歪んだ形の土師器壺と丹彩の壺及び平瓦、丸瓦の破片が出土している。



第24図 7号住居跡出土土器



第25図 8号住居跡出土土器



第26圖 8号住居跡

8号住居跡出土土器

| 器種 | 番号 | 大きさ(cm) | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|----|----|----------------------------|---|---|-------------------------|
| 壺 | 1 | 口径 8.9 底径 5.8 器高 5.8 | 全体的に厚く深い。歪んだ器形。 平底からやや外傾気味に直線的に立ち上がる。 | 底部難な窓削り。体部外面横ナデ 内面窓削り後難なナデ。焼成良好 だが加熱により表面荒れている。 | 胎土 砂粒少 量含む 色調 濃褐色 |
| | 2 | 口径 14.1 器高 5.6 | 内外面丹彩。九底の底部から体部 は内湾し、口縁部は短く直立する 口縁外面に一条の沈線。 | 体部外面横位の窓削りと逆方向の 窓削り。口縁部外面横ナデ。焼 成良好で堅緻。作りは丁寧。 | 胎土 細砂粒 含む |

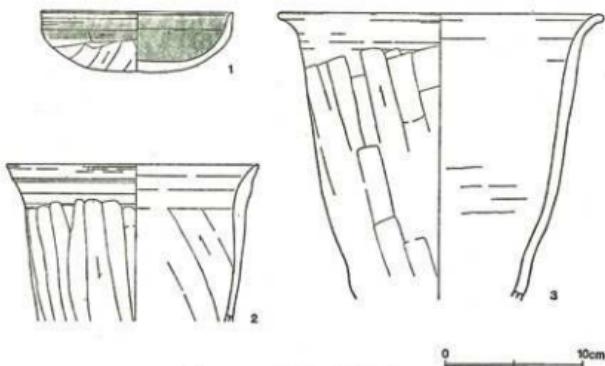
8号住居跡出土瓦

| 種別 | 図No. | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 凸面 | 凹面 | 桶幅 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 接合関係 | 備考 |
|----|------|--------|-------|--------|--------------------------------|----|---------|--|---------|-----------------|------|------------------------|
| | -6 | 9.6 | 8.2 | 1.8 | 平行叩きの布痕、枠木痕。 | | 2.7-2.5 | 白色粒など 0.1mm 以下の砂粒含有。うけ やや粘性あり。白 色針状物質 1cm- 2 | 火熱 | | | No.3 の胎 土と 類似 |
| | + | + | + | | 上をヘラに よる横ナデ | | | | うけ | | | |
| | a | a | a | | | | | | やや 白 | | | |
| 丸瓦 | -2 | 43.5 | 15.1 | 0.9 | 長方形格子布、枠板痕。 | | 2.1-2.1 | 最大 0.5mm 以下で あるが、大半 0.1 2.6-3.2 | 良 | 3住フク土 | | |
| | | ~ | ~ | | ~の上を幅 1.8-7.9cm のへ チ横ナデ。 | | 2.7-2.4 | 以下。白色針状 物質 1cm-3 | | 3点、4住 フク土 1点 | | |

9号住居跡（第28図）

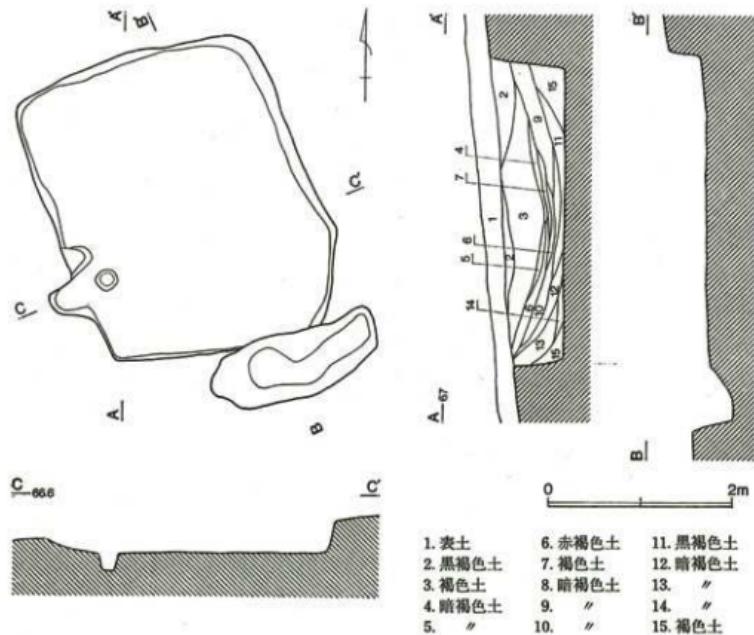
緑山遺跡で最も南に位置する住居跡で、5・6号住居跡に近接し、南への緩傾斜面に構築されている。南東コーナー部をE7グリッド1号土壙に切られている。

プランは隅丸方形を呈し、主軸方向はN-114°-Wである。規模は長辺3.48m、短辺2.75mを計る。壁は急角度で立ち上がり、現壁高は最高部の北壁では80cmであるが、南壁では30cm程度である。壁溝はない。床面は、ほぼ水平で平坦であるが、やや軟弱である。



第27図 9号住居跡出土土器

カマドは西壁の
南側で確認された。
遺存状態は悪く、
焼土、炭化物がわ
ざかに検出された
程度である。壁を
40cm程掘り込み、
幅も40cmである。
焚口に当たる部分
に直径23cm、深さ
18cmのピットが存
在している。



第28図 9号住居跡

覆土は茶褐色土が主体に堆積し、中層に焼土、炭化物を多く含む層が確認された。

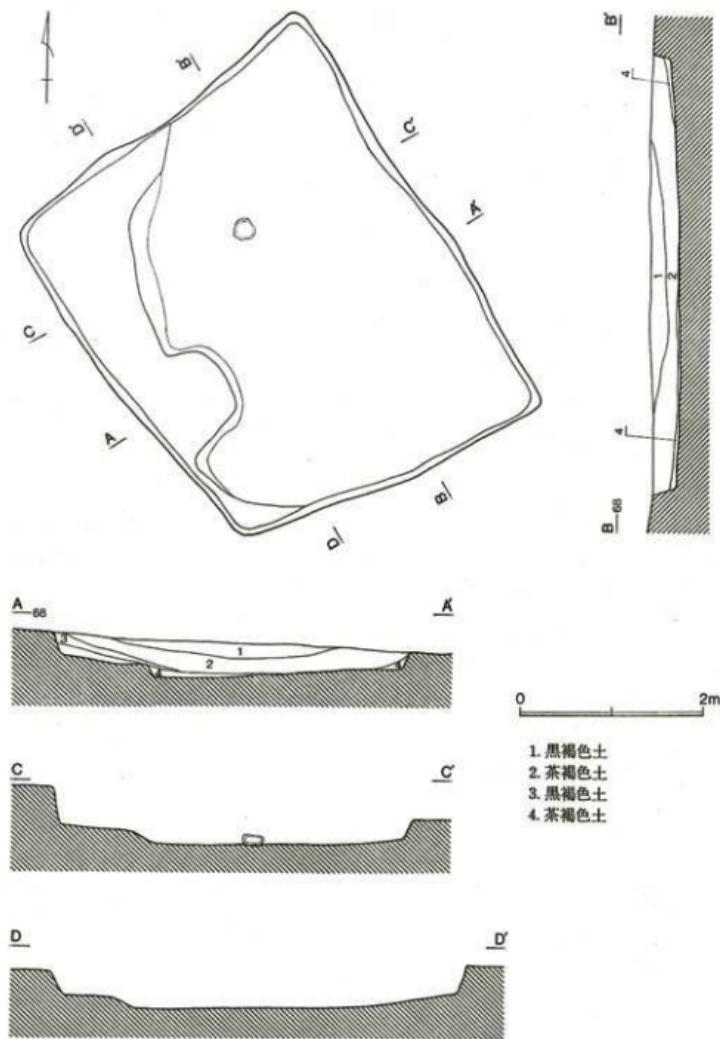
出土遺物は、土師器の丹彩の坏と甕、及び丸瓦の破片である。

9号住居跡出土土器

| 器種 | 番号 | 大きさ(cm) | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|----|----|-------------------|---|---|--------------|
| 坏 | 1 | 口径 13.9 器高 4.4 | 口縁外面、内面全面丹彩。底部上げ底氣味で体部は丸味をもつ。口縁部は外反氣味に直立し内面に一条の沈線。口唇薄く尖る。 | 体部は口縁方向への窪削り。体部内面は丁寧なナデ。口縁部内外面横ナデ。焼成良好で堅緻。作りは丁寧。 | 胎土 小疊多く含む |
| 甕 | 2 | 口径 18.3 20% | 胴部はほぼ直線的に立ち上がり頸部は肥厚し、口縁部は外反して薄くなる。 | 胴部外面縦方向の窪削り。内面逆方向の窪削り。口縁部内外面横ナデ。焼成良好。 | 胎土 小疊多色調 茶褐色 |
| 甕 | 3 | 口径 23.7 50% | 全体的に厚い。胴部は外傾しながら開き、口縁部は短く大きく外反する。口唇部は丸い。 | 胴部外面は口縁方向への複数の窪削り。内面粘土を補強してナデしている。口縁内外面横ナデ。焼成不良。雜な作り。 | 胎土 小疊多色調 茶褐色 |

住居跡一覧表

| 住居No. | 図No. | 形 無 | 規模(長径×短 径×深さ m) | 主軸方向 | 付 屬 施 設 | 出 土 遺 物 | 備 考 |
|-------|------|-------|--------------------|----------|---|--|----------------|
| 1 | 6 | 長方形 | 4.92×3.75×0.1 | | 主柱穴 6 本、西コーナー部ピット。 | 黒浜式土器、石鐵 石皿・凹石・ナイフ形石器。 | E 4 P 1 と重複 |
| 2 | 9 | 隅丸長方形 | 5.12×4.33×0.54 | | 主柱穴 4 本、北壁寄り柱穴間炉跡、中央部 ビット。 | 条痕文・黒浜・諸 式土器、石鐵・ 打製石斧・凹石、 勾玉。 | |
| 3 | 14 | | | | 柱穴 4 本、炉跡。 | 黒浜式土器 | |
| 4 | 15 | 長方形 | 3.2×2.4×0.25 | N-69°E | 柱穴 4 本、東壁寄り炉跡。 | 土師器壺 2 個体 | 東壁擾乱 |
| 5 | 17 | 長方形 | 4.25×3.4×0.1 | N-87°-E | 柱穴 1 本、東壁南寄り にカマド、カマド右袖 部貯藏穴。 | 土師器壺・壺・鉢 ・甕・壺・壺、須恵器 壺、耳環。 | 6 号住と 重複 |
| 6 | 20 | 長方形 | 4.95×4.28×0.3 | N-18°-W | 主柱穴 4 本、北壁中央 カマド、カマド右袖 部貯藏穴。北西コーナー部 壁溝。 | 土師器高壺・壺・ 甕・須恵器盤 平瓦・丸瓦。 | 5 号住を 切る。 |
| 7 | 23 | 長方形 | 5.15×3.5×0.4 | N-S | 竪穴外柱穴 3 本、北壁 西寄りにカマド、カマ ド右袖に貯藏穴、東壁 中央にピット。 | 土師器壺。 | |
| 8 | 26 | 隅丸長方形 | 4.0×3.3×0.46 | N-24°-W | 柱穴 3 本、北・東壁に 壁溝、西コーナーに焼 土、南コーナー床直で 粘土。 | 土師器壺・丹彩の 壺・甕・壺、平瓦・丸瓦。 | |
| 9 | 28 | 隅丸方形 | 3.48×2.75×0.8 | N-114°-W | 西壁南寄りカマド、焚 口部ピット。 | 土師器丹彩壺・甕 丸瓦。 | E 7 P 1 と重複 |



第29圖 1号窓穴跡

2 穴跡と出土遺物

1号穴跡（第29図）

遺跡北端の台地肩部Fグリッドより検出された。4.81×3.95mの長方形を呈する大型の穴跡である。壁高は西辺で40cm、東辺で22cmを測り、壁は緩く立ち上がっている。覆土は黒褐色土、茶褐色土が主体をなし、両層中より条痕土器が出土している。床面はやや南側へ傾斜しているが、凹凸はほとんど無く堅固である。北壁の一部から西壁にかけて床面より20cm程高いベッド状となっている。中央の床面上には台石と思われる表面が平らな自然隕が置かれていた。伊跡、柱穴は検出されなかった。遺物は土器の他、石鐵、凹石が出土している。



第30図 1号穴跡出土土器・石器

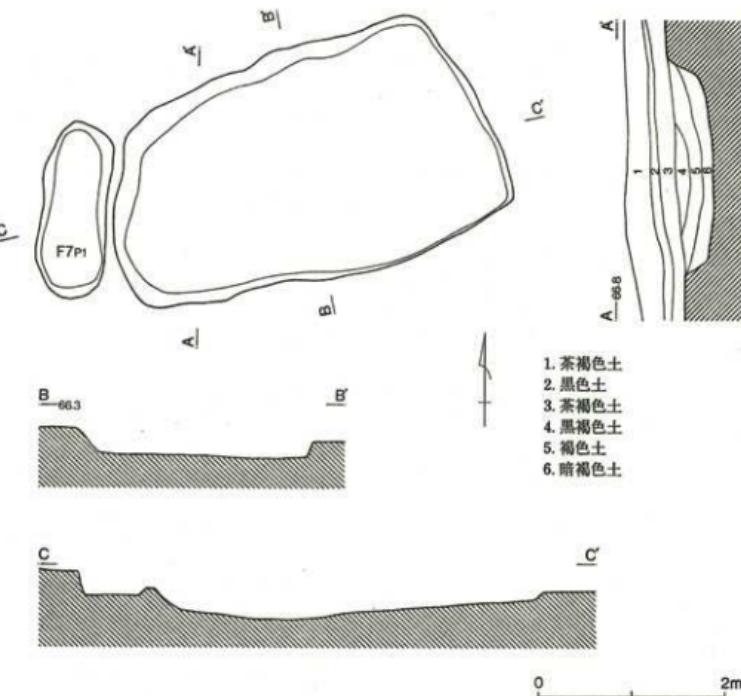
土器（第30図）

1は唯一の文様を持つもの。竹管沈線で波状文が描かれている。胎土には少量の纖維と雲母が含まれるが、焼成は良好、茶褐色。2は無文、3は擦痕文の口縁部。胎土は1と同様、内面が丁寧に磨かれている。焼成は良好で赤褐色を呈している。4～12は条痕のみの胴部片。条痕の太さ、方向ともバラエティーに富む。条痕の太いもの（4、5、9、10）、細いもの（6～8、11）、擦痕状（12）と有り、何れも条痕の施文は浅い。4は太い条痕で外面縦、内面横に、7は細い条痕で外面縦とも縦に丁寧に施文されている。すべて胎土には少量の纖維と砂粒が認められ、12以外は焼成良好。5、8、9は茶褐色、他は黒褐色を呈している。13は鈍角に開く内外面とも無文の底部。纖維と多量の砂粒を含み表面荒れている。焼成は良好で堅固、赤褐色を呈している。

石器

石鎌（第30図7）

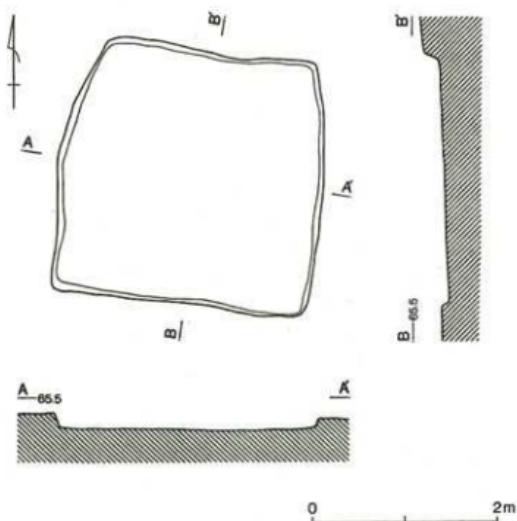
先端部を欠損しているが、二等辺三角形を呈する良好な無茎の石鎌、側辺より入念な調整剥離が行なわれている。0.85g、黒曜石製。



第31図 2号堅穴跡

凹石、磨石（第 図14）

少程度欠損しているが、偏平な自然縁の両面を凹石と磨石に利用している。凹みは一ヶ所見られ浅い皿状を呈する。磨石としては両面使用し、片面には顕著な使用痕が認められる。475g、安山岩製。



第32図 3号竪穴跡

2号竪穴跡（第31図）

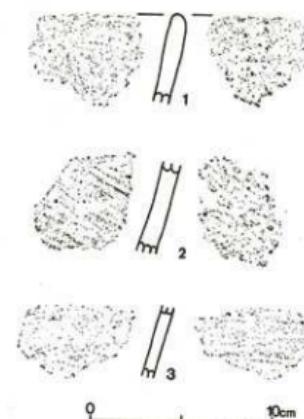
5、6号住居跡の東側、G7グリッドの緩傾斜面に検出された。4.18×2.51mの隅丸長方形プランを呈している。覆土は弱い粘性を持つ褐色土暗褐色土が主体をなし、硬く締っていた。壁高は北辺24cm南辺18cmと浅く、立ち上がりは緩い。床面は西側が若干深くなっているが、凹凸も無く堅固であった。床面を精査したが、炉跡、柱穴は検出されなかった。遺物は褐色土中より条痕文土器の細片が見られたに過ぎない。

3号竪穴跡（第32図）

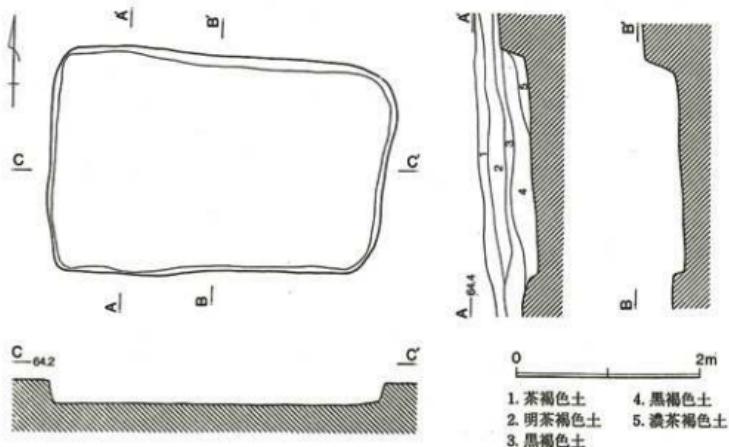
9号住居跡と4号竪穴跡に挟まれたF8グリッドに検出された。プランは2.91×2.71mのほぼ正方形を呈し、覆土は粘質化した濃茶褐色土であった。壁高は北辺14cm、南辺10cmと南側へ行くにつれ浅くなっている。床面は少し傾斜しているが、凹凸はない。一部軟弱であるが全体的に堅固である。炉跡、柱穴は検出されなかった。少量の条痕文土器が出土している。

土器（第33図）

1は口唇部が丸みを帯びる口縁部、内外面とも擦痕が認められる。胎土には少量の繊維と多量の砂粒を含みザラついている。焼成は良好で硬い。茶褐色。2、3は内外面とも条痕のみの胴部。条痕の施文は浅く、内面は荒れている。多量の繊維を含み焼成不良で脆い。赤褐色を呈している。



第33図 3号竪穴跡出土土器



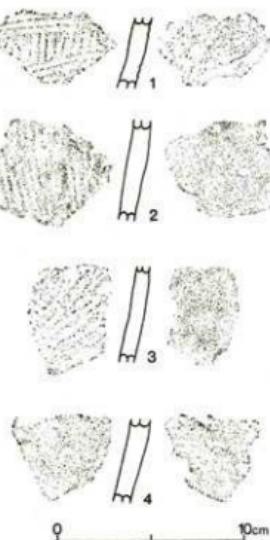
第34図 4号竖穴跡

4号竖穴跡（第34図）

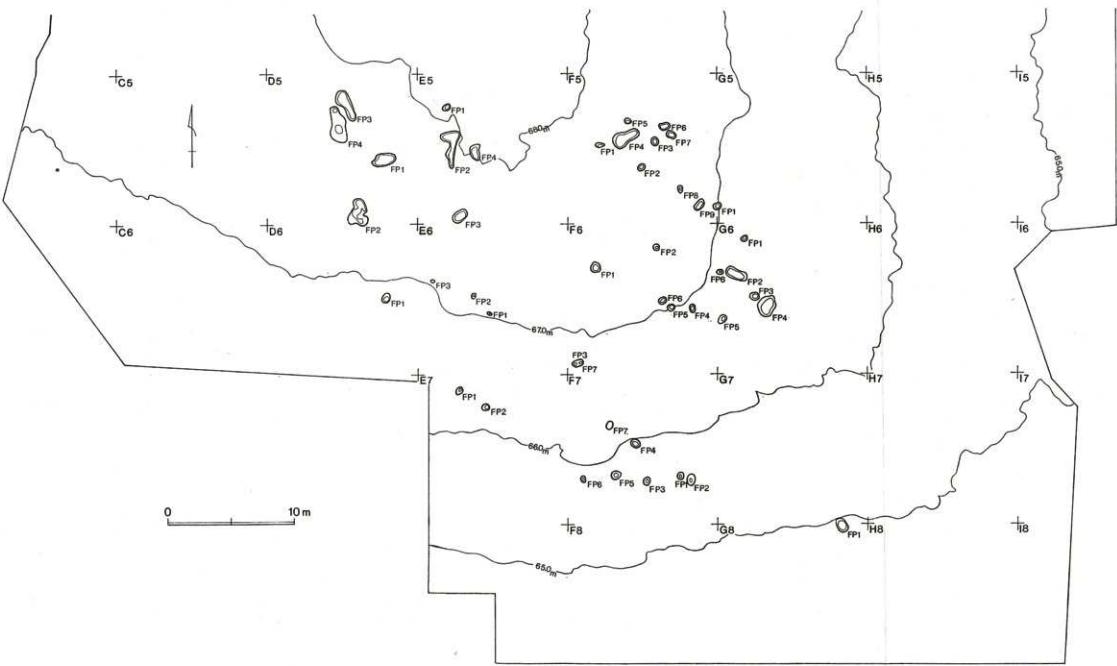
3号竖穴跡に近接して南端のF 8 グリッドで検出された。遺跡で最も標高の低い地点に担当する。3.64×2.47mの隅丸長方形プランを呈する。壁高は西辺で26cm、東辺で22cmを測り、保存状態良好な竖穴跡である。床面はやや南側へ傾斜しているが、凹凸ではなく、堅固である。覆土は弱い粘性を持つ黒褐色土で少量の条痕文土器が出士している。炉穴は床面を精査したが、検出されなかつた。

土器

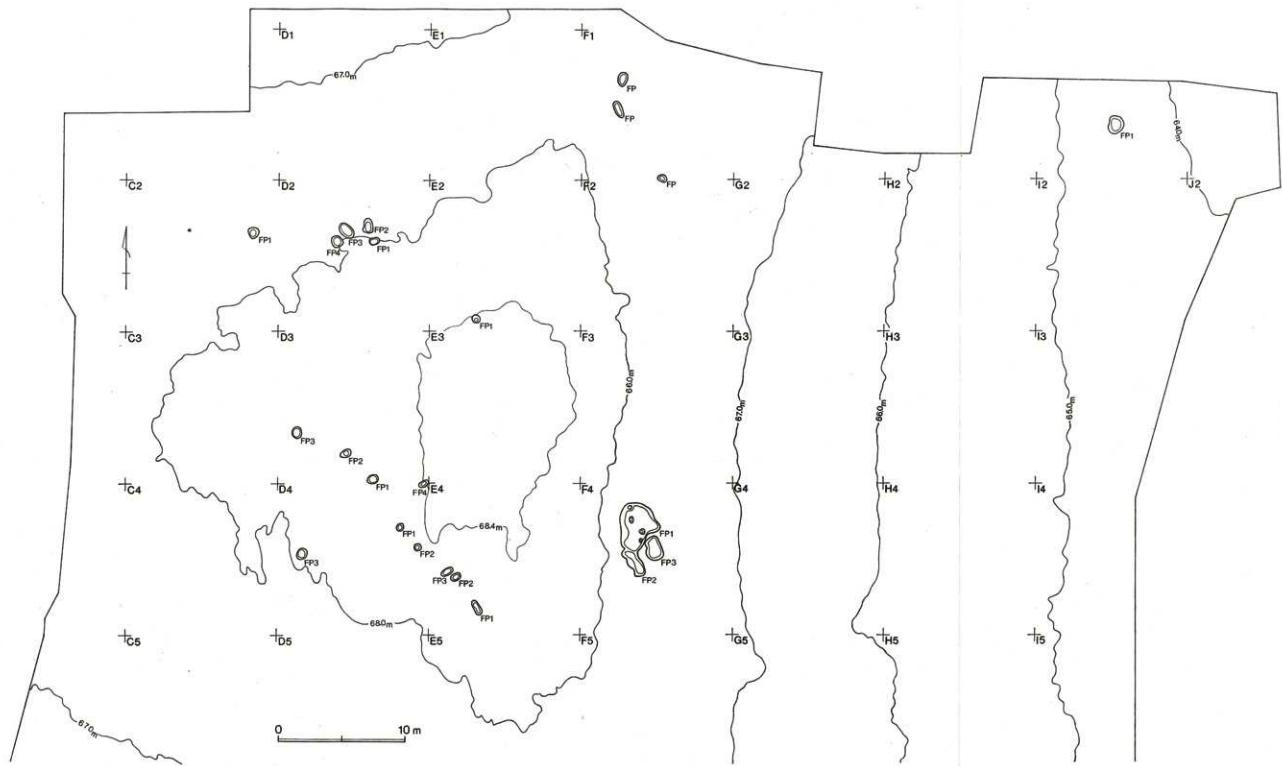
1は太めの条痕を地文に、竹管による平行沈線文が描かれ、内面にも僅かな条痕が認められる。2、3は外面に条痕が浅く施文され、内面は無文、4は内外面とも無文である。総て胎土には少量の纖維と多量の砂粒を含み表面はザラつく。焼成は3以外良好、1、3黒褐色、2は赤褐色を呈している。



第35図 4号竖穴跡出土土器



第37图 炉穴分布图



第36図 炉穴分布図(1)

3 炉穴と出土遺跡

鐵文時代早期後半の炉穴は、総数69基検出され、綠山遺跡の一つの中心をなしている。平坦面から緩傾斜面にかけ、數地点に群在している。野島期から茅山上層期まで時間差がある。

挿図中のスクリントーンは、明確に炉跡と認められたものである。

C 2 グリッド（第38図）

1号炉穴

（形態）不整円形 （規模） $0.88 \times 0.7 \times 0.26 m$ （炉跡）覆土中に多量の焼土が認められたが明確な炉跡は検出されなかった。（主軸方向）N—10°—W （構造）壁はなだらかに立ち上がる。填底は平坦で凹凸もない。（遺物）出土していない。

D 2 グリッド（第38図）

台地の平坦面から緩傾斜面に移行する肩部に相当し、4基の炉穴が非常に近接した状態で検出されている。

1号炉穴

（形態）不整円形 （規模） $0.64 \times 0.6 \times 0.08 m$ （炉跡） $33 \times 26 \times 1 cm$ （主軸方向）N—90°—W （構造）浅い皿状を呈し、壁はなだらかに立ち上がり、填底も平坦である。炉跡は中心部に位置している。（遺物）なし。

2号炉穴

（形態）不整円形 （規模） $1.05 \times 0.69 \times 0.2 m$ （炉跡） $48 \times 17 \times 1 cm$ （主軸方向）N—20°—W （構造）壁は垂直に近く立ち上がり、填底はやや南側に傾斜している。炉跡は炉穴の北側に位置している。（遺物）条痕文の細片が出土している。

3号炉穴

（形態）梢円形 （規模） $1.37 \times 0.87 \times 0.22 m$ （炉跡）明確な炉跡は検出されなかった。（主軸方向）N—41°—W （構造）南、西壁は角度をもち、東、北壁はなだらかに立ち上がる。填底は緩く南側へ傾斜している。（遺物）なし。

4号炉穴

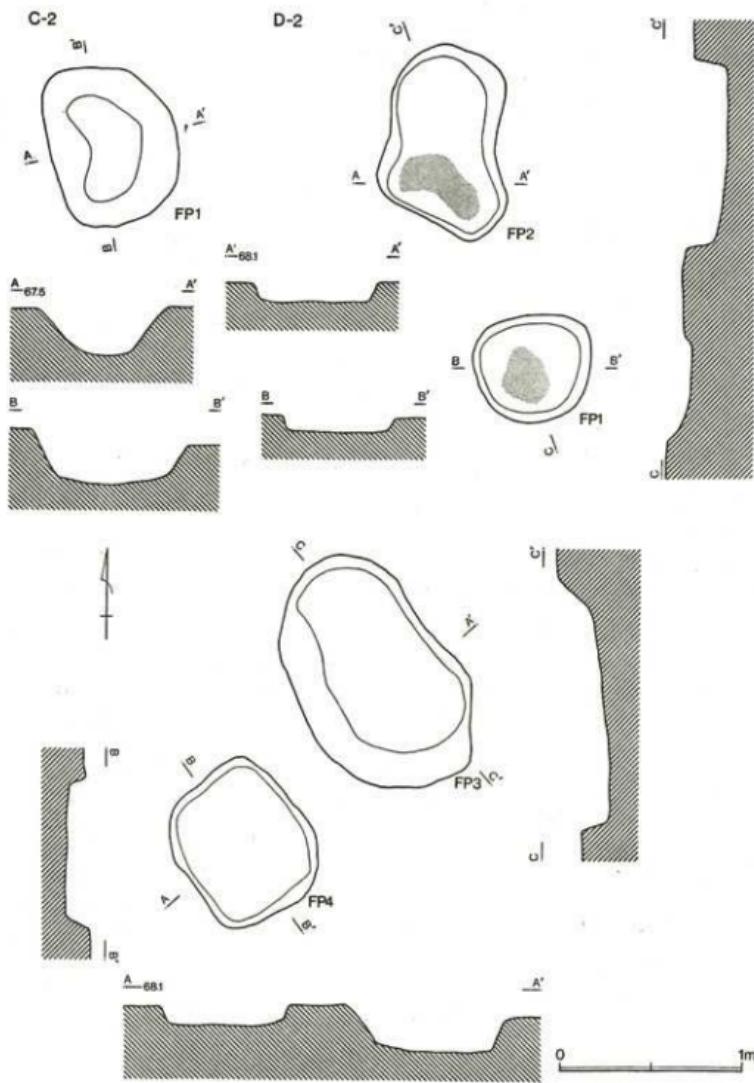
（形態）隅丸方形 （規模） $0.84 \times 0.7 \times 0.12 m$ （炉跡）覆土に多量の焼土ブロックが堆積していたが、炉跡は検出し得なかった。（主軸方向）N—36°—W （構造）壁はなだらかに立ち上がる。填底は凹凸もなく平坦である。（遺物）小砾が一点出土している。

D 3 グリッド（第39図）

遺跡中央の平坦面に相当するが、遺構の分布は少ない。小規模な4基の炉穴が直線的に並び検出されている。

1号炉穴

（形態）円形 （規模） $0.78 \times 0.73 \times 0.23 m$ （炉跡） $58 \times 46 \times 4 cm$ （主軸方向）N—76°—W （構造）西壁以外はなだらかに立ち上がる。西壁直下には、平坦な填底より一段深く掘り下げられたビットがある。炉跡は西壁寄りに位置している。（遺物）なし。



第38図 C 2・D 2 グリッド掘穴

2号炉穴

(形態) 不整円形 (規模) $0.78 \times 0.62 \times 0.24\text{m}$ (炉跡) 検出されなかった。 (主軸方向) N—52°—E (構造) 東壁寄りに足場を有し、壁は角度をもって立ち上がる。 壇底は平坦。 (遺物) 拳大の礫が 1 点出土している。

3号炉穴

(形態) 楕円形 (規模) $0.87 \times 0.68 \times 0.21\text{m}$ (炉跡) $33 \times 25 \times 0.5\text{cm}$ (主軸方向) N—3°—E (構造) 壁はなだらかに立ち上がり、中央に壇底より一段掘り下げられたピットが存在する。 炉跡は、そのピットにかけて位置している。 (遺物) なし。

4号炉穴

(形態) 楕円形 (規模) $0.8 \times 0.48 \times 0.17\text{m}$ (炉跡) $71 \times 43 \times 3\text{m}$ (主軸方向) N—53°—E (構造) 浅い皿状を呈し、壁はなだらかに立ち上がる。 壇底は平坦。 炉跡は壇底すべてと西壁にかけて検出されている。 (遺物) なし。

D 4 グリッド (第39図)

1号炉穴

(形態) 円形 (規模) $0.64 \times 0.6 \times 0.07\text{m}$ (炉跡) $22 \times 20 \times 1\text{cm}$ (主軸方向) N—36°—E (構造) 浅い皿状を呈し、壁はなだらかに立ち上がる。 壇底も平坦。 炉跡は西南寄りに位置している。 (遺物) 出土していない。

2号炉穴

(形態) 円形 (規模) $0.58 \times 0.49 \times 0.08\text{m}$ (炉跡) 覆土中より少量の焼土ブロックが検出されたが炉跡は不明である。 (主軸方向) N—41°—W (構造) 壁はなだらかに立ち上がり、壇底は西側へやや低くなっている。 (遺物) なし。

3号炉穴

(形態) 不整円形 (規模) $0.72 \times 0.7 \times 0.21\text{m}$ (炉跡) $63 \times 37 \times 12\text{cm}$ (主軸方向) N—65°—W (構造) 角度を持って立ち上がる北壁直下にはピットが存在し、他壁はなだらかに立ち上がる。 ピットを除く壇底全域が炉跡となり、焼土の堆積も厚い。 (遺物) 条痕文細片 1 片、小礫 2 点が出土している。

D 5 グリッド (第40図)

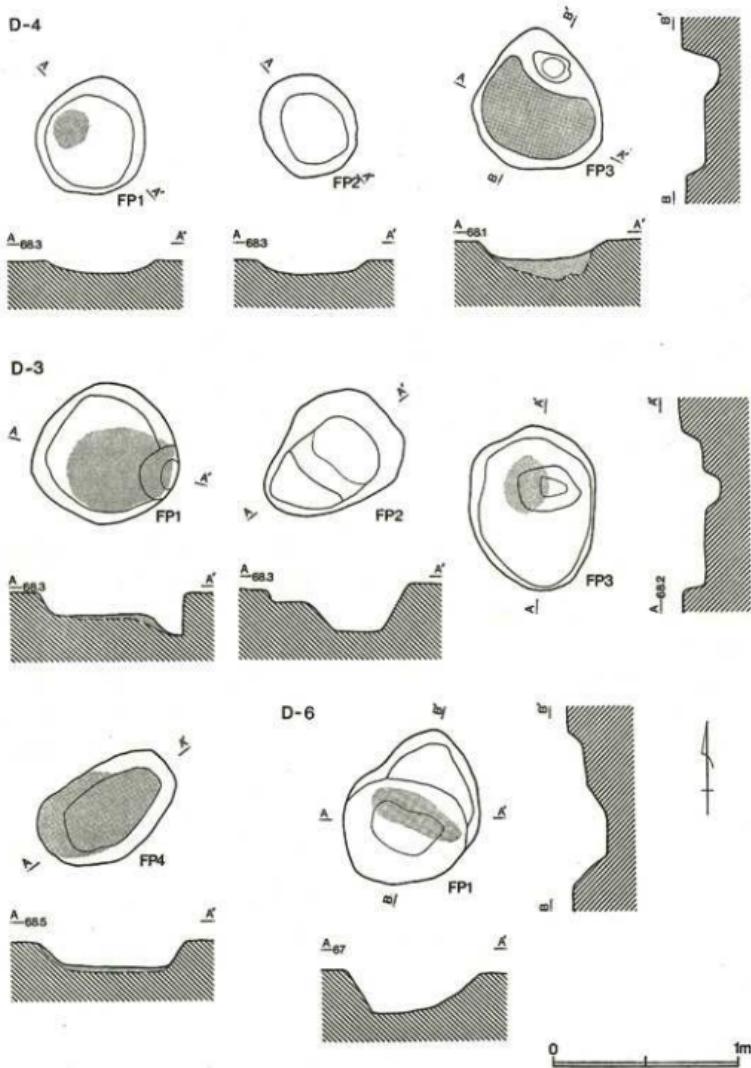
遺跡の最西端、緩傾斜面に位置する当グリッドでは、緑山遺跡では大形に属する炉穴が 4 基検出されている。

1号炉穴

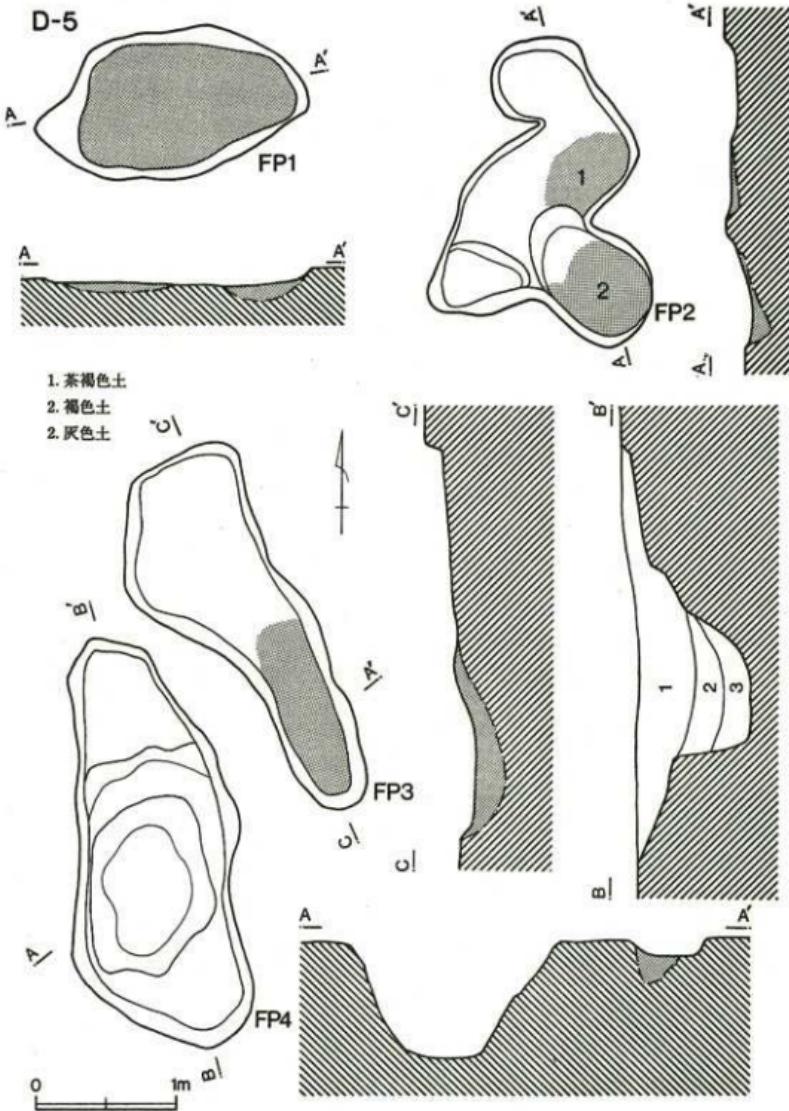
(形態) 楕円形 (規模) $1.88 \times 1.04 \times 0.22\text{m}$ (炉跡) $156 \times 88 \times 10\text{cm}$ (主軸方向) N—80°—B (構造) 壁も僅かに立ち上がる程度の浅い皿状を呈した炉穴である。 壇底も平坦で凹凸もない。 壇底すべてが炉跡となっている。 (遺物) なし。

2号炉穴

(形態) 不整円形 (規模) $2.22 \times 1.86 \times 0.2\text{m}$ (炉跡) 1. $74 \times 44 \times 6\text{cm}$ 2. $66 \times 30 \times 14\text{cm}$ (主軸方向) N—15°—W (構造) 壁はなだらかに立ち上がり、壇底は凹凸が激しい。 突出し



第39図 D 3・D 4・D 6 グリッド伊穴



第40図 D-5 グリッド炉穴

た西壁直下にはピットが存在する。炉跡1は西壁寄りに、炉跡2は突出した南壁寄りに位置している。炉跡1、2間には足場が存在している。(遺物) 条痕文と打製石斧が出土している。

土器(第41図1~3)

1は条痕を地文として沈線文が描かれ、内面にも条痕が施文されている。胎土には少量の繊維と細かな砂粒が含まれ、焼成は良好で堅い。黒褐色。2は内外面とも擦痕のみの口縁部、口唇部には刻み目がある。繊維と砂粒を含み表面が荒れている。焼成良好、赤褐色。3は深鉢の底部、内外面とも横方向の擦痕が認められ、内面は荒れている。焼成不良で脆く、赤褐色を呈する。

石器(第42図1)

丸みを帯びた短冊形の小形打製石斧、完形品。片面には自然面を残し、主翼離面側は側辺より細かな調整加工が施されている。刃部は自然面を利用し薄い。重さ42g、石材ホルンフェルス。

3号炉穴

(形態) 不整橢円形 (規模) $2.76 \times 1.04 \times 0.78$ (炉跡) $130 \times 40 \times 22\text{cm}$ (主軸方向) N -23° — W (構造) 壁はなだらかに立ち上がり、壇底は炉跡の位置する北側へ傾斜している。炉跡の焼土堆積は厚い。(遺物) 鶴ヶ島台期の土器が出土している。

土器(第41図4・6~8)

4は沈線上に竹管の刺突文が見られる。くびれ部内面には細かな条痕が施文されている。6、7は太めの条痕、8は細めの条痕が内外面とも施文されている。胎土には少量の繊維と砂粒が含まれ焼成良好で堅い。6は黒褐色、他は赤褐色。

4号炉穴

(形態) 長楕円形 (規模) $2.98 \times 1.43 \times 0.82\text{m}$ (炉跡) 東壁の中段に多量の焼土ブロックが認められたが、明確な炉跡は検出しえなかった。(主軸方向) N -16° — W (構造) 挖り込みの深いシリバチ状を呈し、壁は段をもって立ち上がる。(遺物) 茅山上層式の土器と打製石斧が出土している。

土器(第41図5・9)

5は隆帶上に竹管による刺突文が施文され、内面は無文。胎土には多量の繊維と砂粒を含みザラついている。焼成不良、赤褐色。9は外面擦痕文、内面条痕文、胎土には少量の繊維を含む。焼成は良好で堅く、茶褐色を呈している。

石器(第42図2)

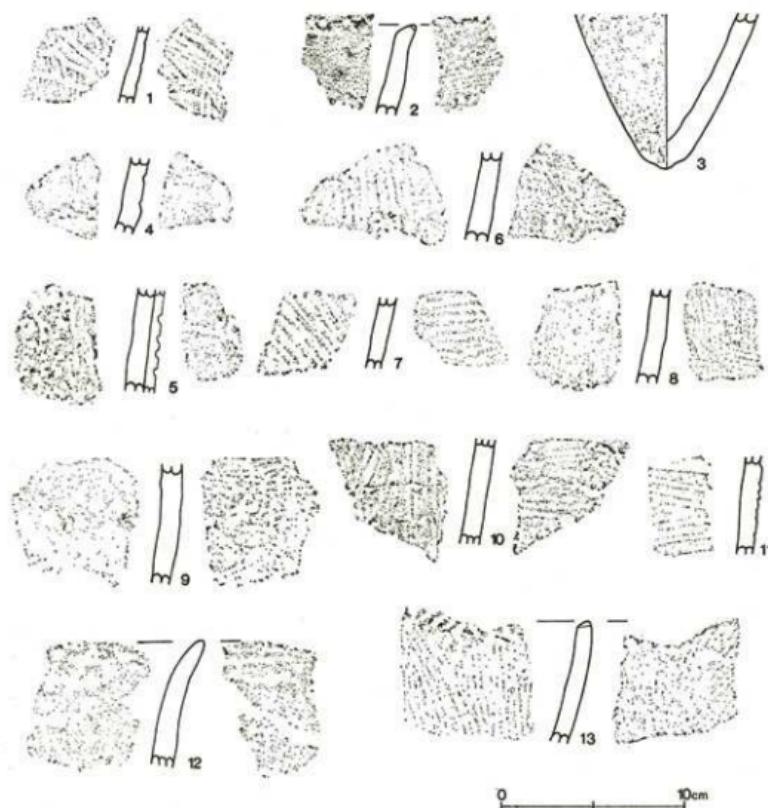
頭部及び刃部を欠損した撓形の打製石斧。両面とも粗い調整加工が施され、粗雑な作りである。重さ48g、石材は砂岩。

D 6 グリット(第39図)

1号炉穴

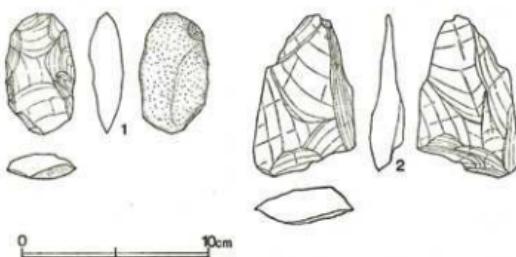
(形態) 不整円形 (規模) $0.85 \times 0.74 \times 0.2\text{m}$ (炉跡) $52 \times 18 \times 0.5\text{cm}$ (主軸方向) N -15° — E (構造) 西壁は角度を持ち、他の壁はなだらかに立ち上がる。北壁寄りに足場を持つ。炉跡は中央に位置している。(遺物) 条痕文が一片出土している。

土器(第41図10)



第41図 D5・D6・E6・F1グリッド炉穴出土土器

外面縦、内面横方向に浅く施された条痕文が観られる。胎土には多量の繊維を含む。焼成は良好、茶褐色を呈している。



第42図 D5グリッド炉穴2・4出土石器

E 2 グリッド（第43図）

1号炉穴

（形態）不整円形 （規模） $0.97 \times 0.61 \times 0.31 m$ （炉跡） $33 \times 32 \times 1 cm$ （主軸方向）N—13°—W （構造）小規模ではあるが掘り込みの深いもので、北壁以外は角度をもって立ち上がる。炉跡は突出した北壁寄りに位置している。（遺物）なし。

E 4 グリッド（第43図）

1号炉穴

（形態）長梢円形 （規模） $1.29 \times 0.59 \times 0.12 m$ （炉跡）1. $63 \times 22 \times 4 cm$ 2. $56 \times 32 \times 6 cm$, （主軸方向）N—31°—W （構造）壁はなだらかに立ち上がり、横底は炉跡2側に傾斜している。炉跡1は南側に、炉跡2は北側に位置している。（遺物）条痕文が出土している。

2号炉穴

（形態）長梢円形 （規模） $0.94 \times 0.53 \times 0.18 m$ （炉跡） $38 \times 23 \times 8 cm$ （主軸方向）N—53°—W （構造）壁はなだらかに立ち上がり、横底は凹凸もなく平坦である。炉跡は南壁下に片寄って位置している。（遺物）なし。

3号炉穴

（形態）隅丸方形 （規模） $0.92 \times 0.52 \times 0.27 m$ （炉跡） $49 \times 30 \times 5 cm$ （主軸方向）N—53°—W （構造）壁は角度を持って立ち上がる。横底は西壁側へきつて傾斜している。炉跡は中央部に位置し、焼土も厚い。（遺物）なし。

E 5 グリッド（第44図）

台地肩部に相当する当グリッドは、住居跡、炉穴、土壤が密集して分布している。炉跡は、8号住居跡の北側に近接して検出されている。

1号炉穴

（形態）梢円形 （規模） $0.59 \times 0.44 \times 0.08 m$ （炉跡） $45 \times 27 \times 1 cm$ （主軸方向）N—53°—E （構造）非常に小形のもの。壁はなだらかに立ち上がる。平坦な横底が炉跡となっている。（遺物）出土していない。

2号炉穴

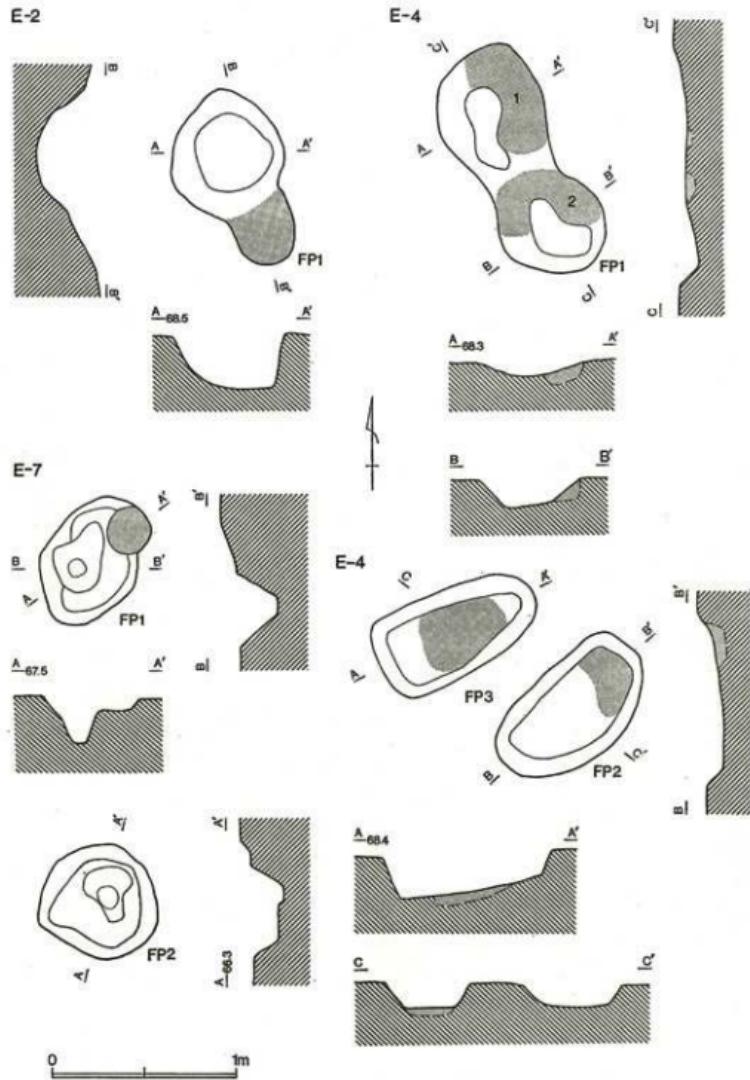
（形態）不整梢円形 （規模） $2.97 \times 1.48 \times 0.22 m$ （炉跡） $33 \times 14 \times 1 cm$ （主軸方向）N—43°—E （構造）南壁以外はなだらかに立ち上がり、横底は平坦である。炉跡は西壁寄りに位置している。（遺物）なし。

3号炉穴

（形態）隅丸方形 （規模） $1.82 \times 0.81 \times 0.1 m$ （炉跡） $69 \times 35 \times 1 cm$ （主軸方向）N—48°—E （構造）壁はなだらかに立ち上がり、横底は凹凸もなく平坦である。炉跡は南壁寄りに位置している。（遺物）条痕文が1片出土している。

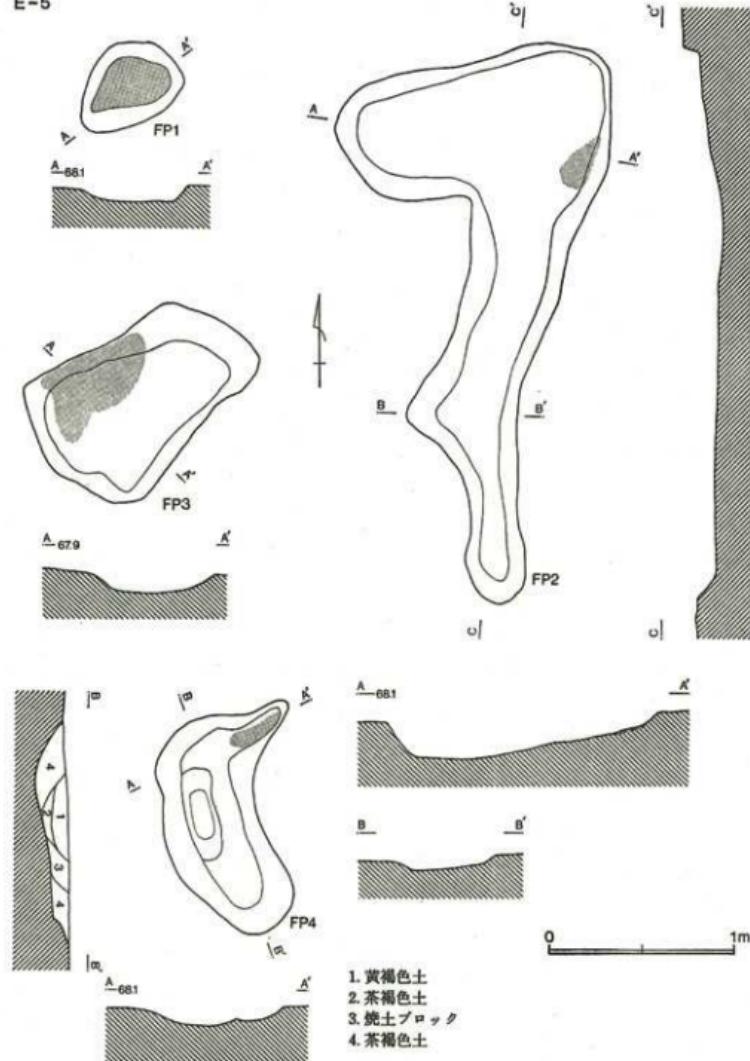
4号炉穴

（形態）不整梢円形 （規模） $1.2 \times 0.8 \times 0.18 m$ （炉跡） $30 \times 12 \times 1 cm$ （主軸方向）N—20°—W （構造）壁はなだらかに立ち上がる。横底は南側へ傾斜している。炉跡は突出した東壁寄り



第43図 E 2 • E 4 • E 7 グリット炉穴

E-5



第44図 E-5 グリット炉穴

に位置している。（遺物）なし。

E 6 グリッド（第45図）

1号炉穴

（形態） 楕円形 （規模） $0.65 \times 0.34 \times 0.8\text{m}$ （炉跡） $65 \times 34 \times 1\text{cm}$ （主軸方向） N— 54° —W （構造） 炉穴全体が炉跡のものである。壁はなだらかに立ち上がり、壇底も平坦である。（遺物） 覆土中より田戸下層式が1片出土している。

土器（第41図11）

太い沈線と細い平行沈線で文様が描かれている。胎土には細かな砂粒を含み、内面は丁寧に撫でられ滑沢を呈している。焼成は良好で堅敏、赤褐色を呈している。

2号炉穴

（形態） 楕円形 （規模） $0.46 \times 0.41 \times 0.05\text{m}$ （炉跡） 壇底を精査したが検出し得なかった。（主軸方向） N— 14° —W （構造） 浅い皿状を呈し、北壁の立ち上がりは僅かである。壇底は平坦。（遺物） 条痕文が1片出土している。

3号炉穴

（形態） 楕円形 （規模） $0.47 \times 0.29 \times 0.03\text{m}$ （炉跡） $47 \times 29 \times 3\text{cm}$ （主軸方向） N— 12° —W （構造） 1号炉穴と同じく炉穴全体が炉跡となっているものである。焼土の堆積は薄い。（遺物） 覆土中より条痕文が1片出土している。

土器（第41図12）

緩い波状を呈し、外反する口縁部。外面は綫方向の細い条痕が浅く施文され、内面は荒れて不明。胎土には多量の繊維と雲母を含み、焼成不良で脆い。赤褐色を呈している。

E 7 グリッド（第43図）

1号炉穴

（形態） 楕円形 （規模） $0.75 \times 0.52 \times 0.25\text{m}$ （炉跡） $25 \times 24 \times 1\text{cm}$ （主軸方向） N— 27° —E （構造） 西壁はなだらかに、他の壁は角度をもって立ち上がる。小形で掘り込みの深いものである。炉跡は西壁に片寄って位置している。（遺物）なし。

2号炉穴

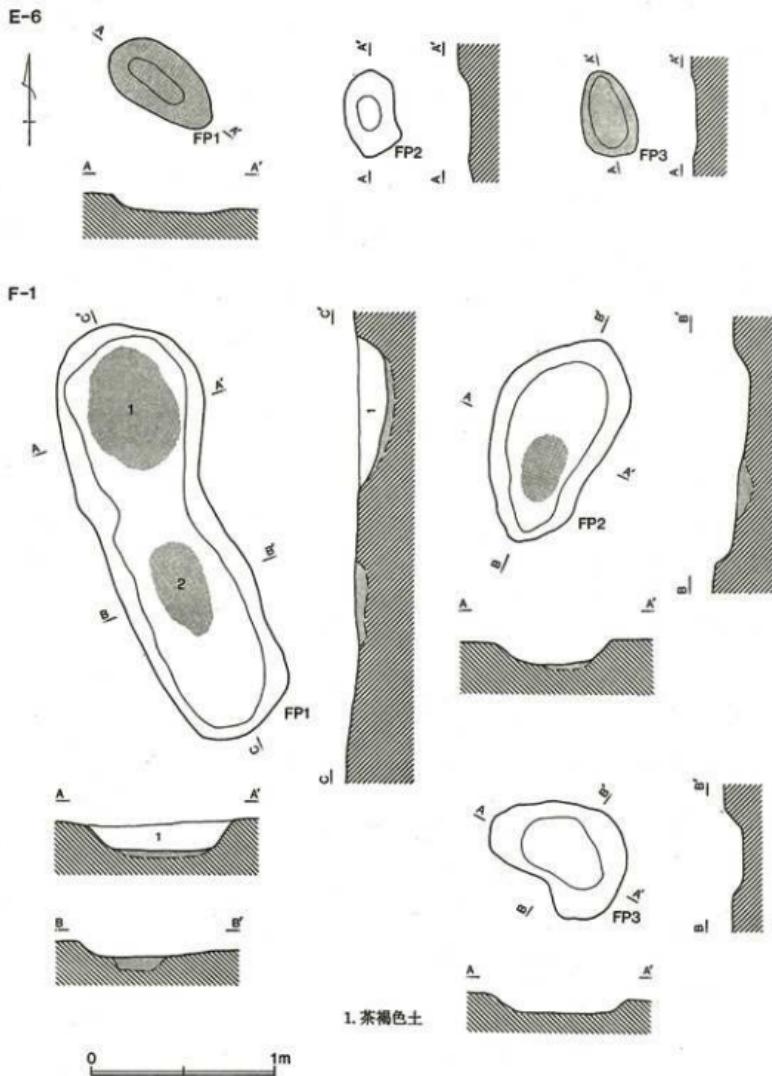
（形態） 円形 （規模） $0.65 \times 0.62 \times 0.2\text{m}$ （炉跡） 北壁中段に焼土ブロックが検出されたが、明確な炉跡は検出し得なかった。（主軸方向） N— 77° —E （構造） 中央部が一段深く掘り窪められ、壁は角度を持って立ち上がる。壇底は平坦。（遺物）なし。

F 1 グリッド（第45図）

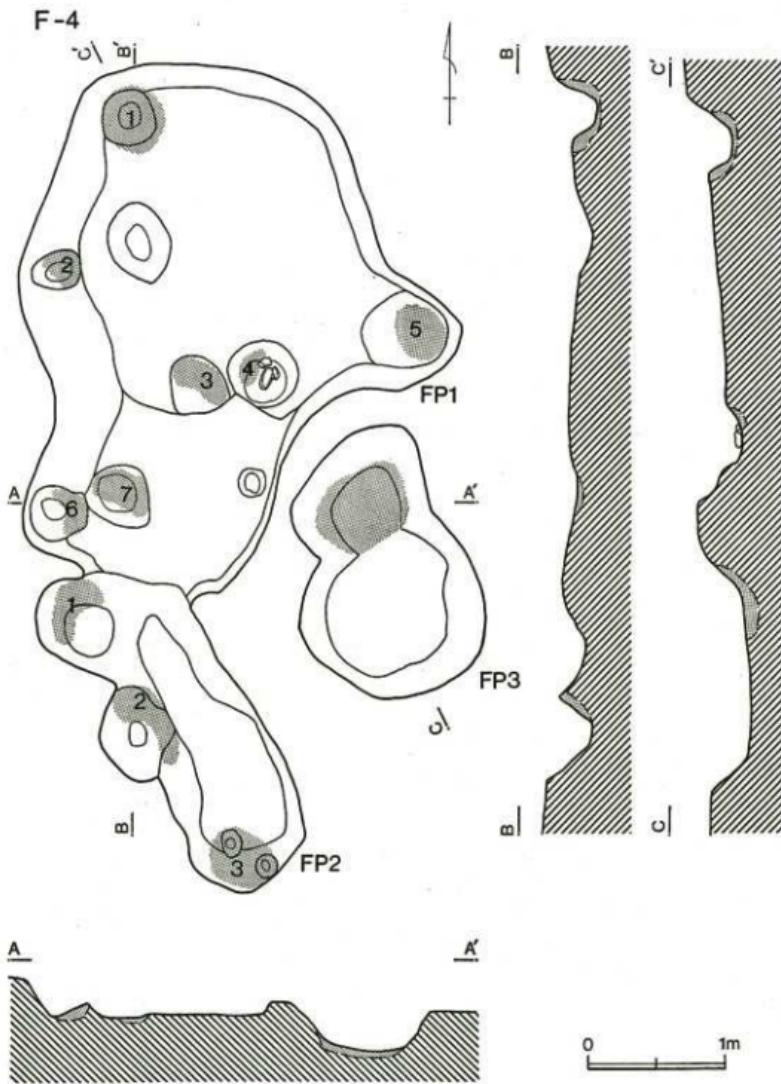
当グリッドは遺跡の最北端に位置し、谷を間近に臨む台地肩部に相当している。3基の炉跡が1号竪穴跡周辺に検出されている。

1号炉穴

（形態） 隅丸長方形 （規模） $2.34 \times 0.81 \times 0.2\text{m}$ （炉跡） 1. $69 \times 49 \times 5\text{cm}$ 2. $54 \times 28 \times 7\text{cm}$ （主軸方向） N— 22° —W （構造） 西・北壁は立ち上がりが不明瞭なほど浅く、他の壁はなだらかに立ち上がる。炉跡1は南壁寄りに、炉跡2は中央に位置している。壇底は炉跡2から1側



第45図 E-6・F-1 グリッフ炉穴



第46図 F-4 グリッド炉穴

へ傾斜している。(遺物) 条痕文が1片炉跡2直上より出土している。

土器(第41図13)

やや内反する口縁部。口唇部には刻み目を持ち内外面とも条痕文が縦方向に施文されている。胎土には少量の纖維と多量の雲母を含み、焼成良好で堅い。赤褐色を呈している。

2号炉穴

(形態) 楕円形 (規模) $1.18 \times 0.62 \times 0.18$ m (炉跡) $38 \times 23 \times 7$ cm (主軸方向) N— 23° —E (構造) 壁はなだらかに立ち上がり、壇底は北側へ傾斜している。炉跡は北壁側に片寄っている。(遺物) なし。

3号炉穴

(形態) 不整円形 (規模) $0.78 \times 0.48 \times 0.1$ m (炉跡) 検出されなかった。(主軸方向) N— 63° —W (構造) 壁はなだらかに立ち上がり、壇底も平坦。(遺物) なし。

F4グリッド(第46図)

緩傾斜面に存在する5号及び6号住居跡の南側、標高65.6mのコント上にほぼ等間隔に並んで5基の小規模な炉穴が検出されている。5号住居跡の床面下にも検出されており、他の奈良時代の住居跡に切られた炉穴が存在した可能性もある。

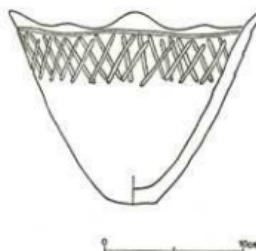
1号炉穴

(形態) 不整椭円形 (規模) $3.7 \times 3.2 \times 0.36$ m (炉跡) 1. $48 \times 46 \times 20$ 2. $30 \times 30 \times 1$ 3. $46 \times 22 \times 1$ 4. $30 \times 14 \times 4$ 5. $44 \times 36 \times 1$ 6. $38 \times 26 \times 8$ 7. $46 \times 26 \times 4$ cm (主軸方向) N— 14° —E (構造) 緑山遺跡で最大規模、最多数の炉跡を持ち、唯一の重複関係の認められるものである。西壁は角度を持ち、他の壁はなだらかに立ち上がる。床面は中央部で緩い段を持ち、北壁側へ少し傾斜している。炉跡1は北西コーナー、2は西壁中央、3、4は近接して炉穴中央、5は突出した東壁に弧状を呈して位置している。1～5の間には共有の足場が観られる。炉跡6、7は接して北壁に位置し、東側に足場が存在している。炉跡4の底部には、拳大の疎が置かれていた。炉跡の新旧関係は不明である。(遺物) 覆土中より野鳥期の小形深鉢1個体と条痕文、無文の土器片が出土している。

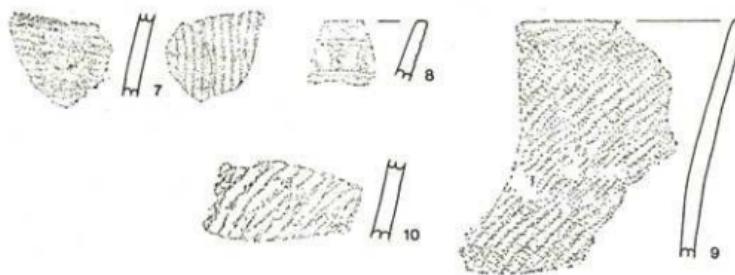
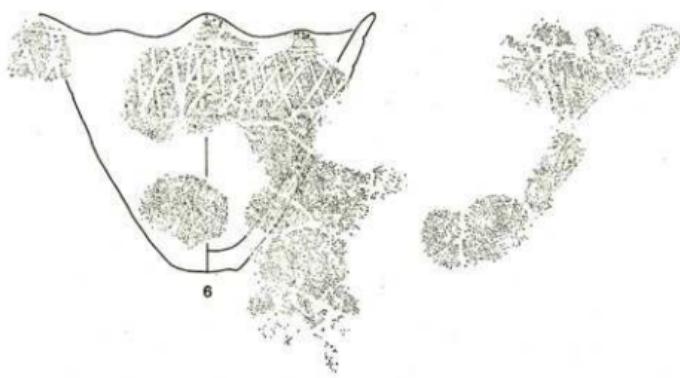
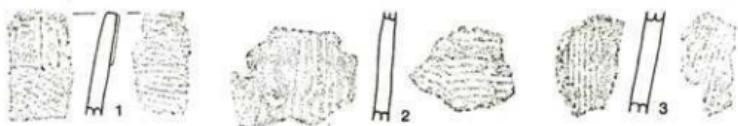
土器(第48図1～6)

1は条痕を地文とし、口縁より微隆起線が垂下している。内面にも条痕が丁寧に施文されている。胎土に少量の纖維を含むが、焼成良好、黒褐色。2～4は内外面とも条痕が浅く施文され、5は無文土器である。何れも胎土に少量の纖維を含む。焼成良好。2は茶褐色。他は赤褐色。

6は推定口径18.4、器高13.8、底径42cm、4単位の波状口縁を呈する小形の深鉢である。口縁に沿って竹管による一条の沈線文が巡り沈線下には同じ竹管を使用した格子状沈線文が描かれている。施文順位は、口縁下の横



第47図 F4グリッド 1号炉穴出土土器



0 1 10cm

第48図 F 4・F 7・G 8 グリッフ炉穴出土土器

位沈線右下がりの沈線左下がりの沈線である。地文は無文で、内面は荒れており条痕等の有無は不明である。胎土には少量の纖維と多量の砂粒を含み、表面はザラついている。焼成はやや不良で脆い。色調は赤褐色を呈している。野島式と思われる。

2号炉穴

(形態) 長椭円形 (規模) $2.64 \times 1.08 \times 0.15\text{m}$ (炉跡) 1. $50 \times 26 \times 1$ 2. $66 \times 32 \times 10$ 3. $52 \times 42 \times 1\text{cm}$ (主軸方向) N— 40° —W (構造) 1号炉穴の南壁を切って構築されている。壁はなだらかに立ち上がり、壇底は凹凸もなく平坦である。炉跡1は北西コーナー、2は西壁中央部3は南壁に直線的に片側に片寄って位置し、壇底を足場として利用したものと思われる。(遺物) 出土していない。

3号炉穴

(形態) 不整椭円形 (規模) $2.24 \times 1.34 \times 0.4\text{m}$ (炉跡) $74 \times 54 \times 8\text{cm}$ (主軸方向) N— 8° —W (構造) 壁は極くなだらかに立ち上がり、壇底は平坦である。炉跡は北側に片寄って位置し南半部は足場と思われる。(遺物) なし。

F 5 グリッド(第49図)

炉穴、土壤の密集した緩傾斜面のグリッドである。炉穴は9基検出され、何れも小規模で単独に存在している。

1号炉穴

(形態) 楕円形 (規模) $0.63 \times 0.49 \times 0.18\text{m}$ (炉跡) $14 \times 11 \times 0.5\text{cm}$ (主軸方向) N— 90° —W (構造) 壁はなだらかに立ち上がり、壇底は平坦である。(遺物) 条痕文が覆土中より出土している。

2号炉穴

(形態) 楕丸方形 (規模) $0.51 \times 0.43 \times 0.26\text{m}$ (炉跡) $35 \times 24 \times 2\text{cm}$ (主軸方向) N— 65° —E (構造) 西壁はほぼ垂直に立ち上がり、他の壁は極くなだらかに立ち上がる。壇底は少し凹凸があり、西壁側へ傾斜している。炉跡は中央に位置している。(遺物) なし。

3号炉穴

(形態) 楕丸方形 (規模) $0.67 \times 0.52 \times 0.16\text{m}$ (炉跡) $42 \times 30 \times 1\text{cm}$ (主軸方向) N— 45° —E (構造) 西及び北壁は垂直に近く立ち上がり、東、南壁はなだらかに立ち上がる。壇底はやや凹凸があるが平坦である。炉跡は西壁に片寄って位置している。(遺物) なし。

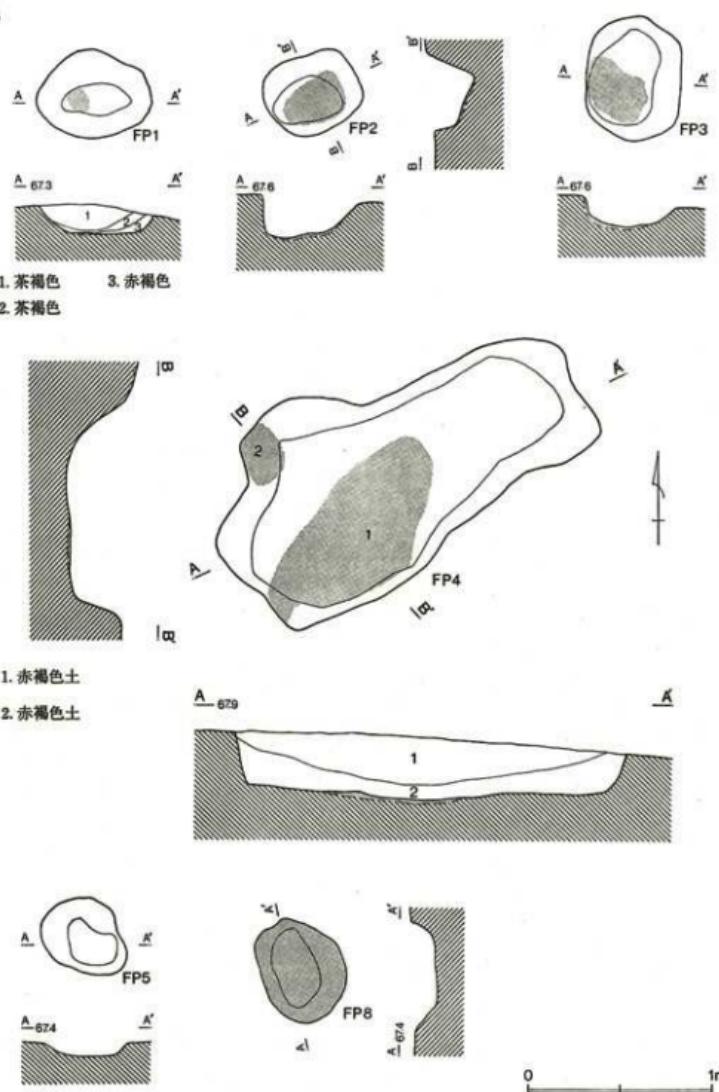
4号炉穴

(形態) 楕丸方形 (規模) $2.14 \times 1.16 \times 0.33\text{m}$ (炉跡) 1. $121 \times 59 \times 3$ 2. $33 \times 23 \times 1\text{cm}$ (主軸方向) N— 65° —E (構造) 覆土は赤褐色が主体をなし、多量の焼土、炭化物が認められた。壁は西、南壁がやや角度を持ち、他の壁はなだらかに立ち上がる。壇底は足場と思われる西壁側が僅かに高くなっている。炉跡1は中央部から西壁にかけて、2は突出した南壁に片寄って位置している。(遺物) なし。

5号炉穴

(形態) 不整円形 (規模) $0.49 \times 0.44 \times 0.08\text{m}$ (炉跡) 覆土下面に焼土ブロックを検出した

F-5



第49図 F-5 グリッド切穴

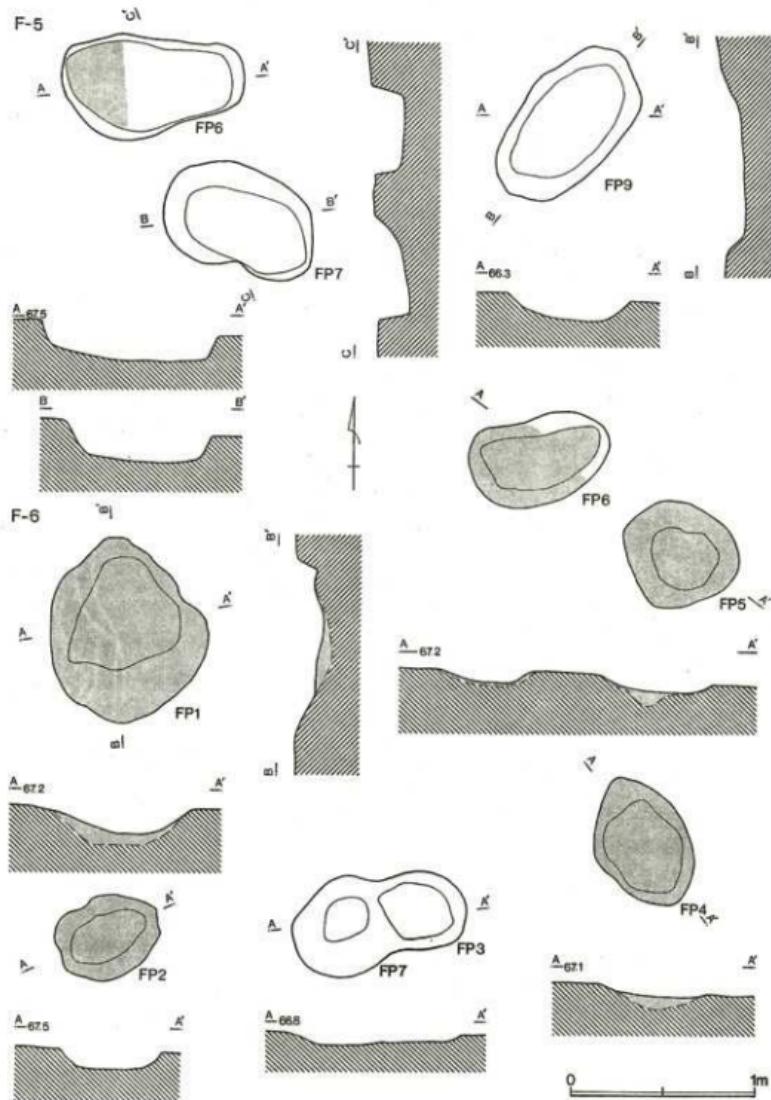


図50 F5・F6 グリッソドロイド穴

が炉跡は確認できなかった。（主軸方向）N—43°—W （構造）壁は極くなだらかに立ち上がり
墳底も平坦。（遺物）なし。

6号炉穴

（形態）隅丸方形 （規模） $0.99 \times 0.49 \times 0.18$ m （炉跡） $48 \times 30 \times 0.5$ cm （主軸方向）N—
85°—E （構造）西及び北壁は角度を持ち、他の壁はなだらかに立ち上がる。墳底は西側へ傾斜
している。炉跡は墳底の西側に位置している。（遺物）条痕文が1片出土している。

7号炉穴

（形態）橢円形 （規模） $0.79 \times 0.56 \times 0.19$ m （炉跡）検出し得なかった。（主軸方向）N—
85°—E （構造）北壁は垂直に近く立ち上がり、他の壁は極くなだらかに立ち上がる。墳底は凹
凸はないが、北側へ緩く傾斜している。（遺物）出土していない。

8号炉穴

（形態）橢円形 （規模） $0.55 \times 0.45 \times 0.13$ m （炉跡） $55 \times 45 \times 0.5$ cm （主軸方向）N—13°—
W （構造）炉穴全体が炉跡となっている。壁は極くなだらかに立ち上がり、墳底も平坦。（遺
物）なし。

9号炉穴

（形態）橢円形 （規模） $0.94 \times 0.66 \times 0.13$ m （炉跡）西壁寄りに多量の焼土ブロックが確認
されたが炉跡は検出し得なかった。（主軸方向）N—39°—E （構造）壁は極くなだらかに立ち
上がり、墳底は少し西側へ傾斜している。（遺物）なし。

F 6グリッド（第50図）

1号炉穴

（形態）不整円形 （規模） $1 \times 0.82 \times 0.4$ m （炉跡） $100 \times 82 \times 10$ cm （主軸方向）N—4°—
W （構造）炉穴全体が炉跡となり、焼土層も厚い。西壁の一部は垂直に近く、他の壁は極くな
だらかに立ち上がる。墳底は西壁寄りに段差もあり凹凸が激しい。（遺物）無文土器の細片が2片出
土している。

2号炉穴

（形態）橢円形 （規模） $0.55 \times 0.44 \times 0.11$ m （炉跡） $55 \times 44 \times 1$ cm （主軸方向）N—65°—
E （構造）炉穴全体が炉跡となっているが、焼土の堆積は薄い。壁はなだらかに立ち上がり、
墳底も平坦である。（遺物）なし。

3号炉穴

（形態）橢円形 （規模） $0.48 \times 0.41 \times 0.04$ m （炉跡）検出されなかった。（主軸方向）N—
78°—E （構造）7号炉穴と重複しているが、新旧関係は不明である。壁は極くなだらかに立ち
上がり、墳底は平らである。（遺物）出土していない。

4号炉穴

（形態）橢円形 （規模） $0.7 \times 0.5 \times 0.11$ m （炉跡） $70 \times 50 \times 7$ cm （主軸方向）N—37°—
W （構造）1・2・5号炉穴同様に炉穴—炉跡となっている。非常に浅い皿状を呈し、壁も極
くなだらかに立ち上がる。墳底も平坦である。炉跡の焼土堆積は厚い。（遺物）出土していない。

5号炉穴

(形態) 円形 (規模) $0.61 \times 0.56 \times 0.56 m$ (炉跡) $61 \times 56 \times 8 cm$ (主軸方向) N— 54° —W (構造) 4号炉穴同様に炉穴—炉跡となっている。皿状を呈し、壇底は緩く西側へ傾斜している。(遺物) 出土していない。

6号炉穴

(形態) 楕円形 (規模) $0.76 \times 0.52 \times 0.09 m$ (炉跡) $61 \times 56 \times 8 cm$ (主軸方向) N— 73° —E (構造) 極く浅い皿状を呈し、壁もなだらかに立ち上がる。壇底はやや西壁側へ傾斜している。炉跡は壇底全体である。(遺物) 出土していない。

7号炉穴

(形態) 楕円形 (規模) $0.52 \times 0.48 \times 0.07 m$ (炉跡) 焼土ブロックが認められたが検出しえなかった。(主軸方向) N— 28° —W (構造) 3号炉穴と重複。極く浅い皿状を呈し、西壁は不明瞭、壇底は平坦である。(遺物) 出土していない。

F 7グリット (第51図)

緩傾計画に存在する5号及び6号住居跡の南側、標高65.6mのコンタ上にはば間隔に並んで5基の小規模な炉穴が検出されている。5号住居跡の床面下にも検出されており、他の奈良時代の住居跡に切られた炉穴が存在した可能性もある。

1号炉穴

(形態) 円形 (規模) $0.62 \times 0.55 \times 0.13 m$ (炉跡) $62 \times 55 \times 3 cm$ (主軸方向) N— 20° —W (構造) F 6 F P 4・5同様に炉穴—炉跡であり、小規模な浅い皿状を呈している。壁も緩やか、壇底も平坦。(遺物) なし。

2号炉穴

(形態) 楕円形 (規模) $0.89 \times 0.7 \times 0.07 m$ (炉跡) $64 \times 48 \times 1 cm$ (主軸方向) N— 23° —E (構造) 極く浅い皿状を呈する。炉跡は中央から東壁寄りにかけて位置している。(遺物) 条痕文細片が覆土中より出土している。

3号炉穴

(形態) 円形 (規模) $0.73 \times 0.64 \times 0.12 m$ (炉跡) $43 \times 35 \times 0.5 m$ (主軸方向) N— 1° —E (構造) 壁はなだらかに立ち上がり、壇底は平坦。炉跡は中央部に位置するが、焼土の堆積は薄い。(遺物) 炉跡内より条痕文土器が1片出土している。

土器 (第44図7)

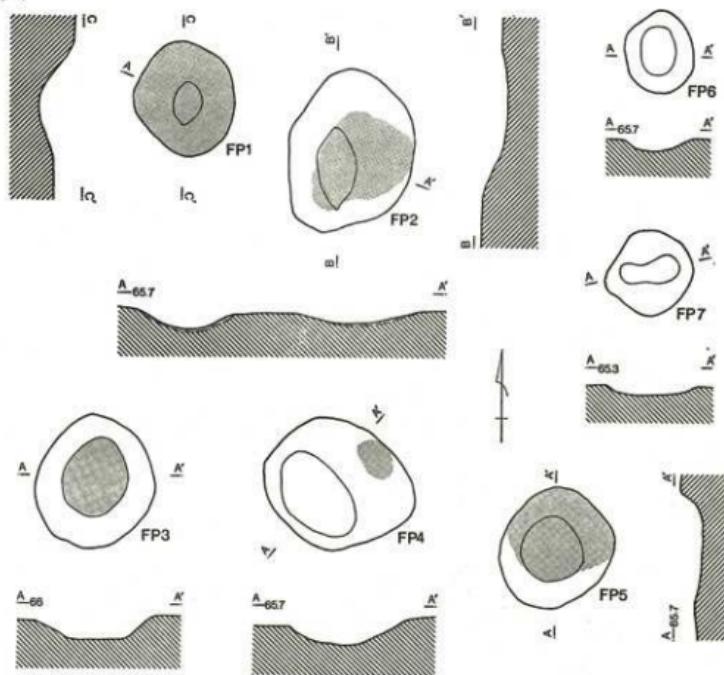
内外面とも条痕が施文され、内面の条痕施文は深い。胎土には極く僅かな繊維と多量の砂粒を含む。焼成は良好で堅緻な土器である。色調は赤褐色を呈している。

4号炉穴

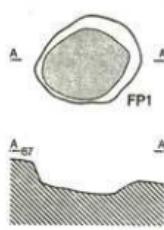
(形態) 楕円形 (規模) $0.81 \times 0.74 \times 0.13 m$ (炉跡) $24 \times 16 \times 0.5 cm$ (主軸方向) N— 60° —W (構造) 足場と思われる壇底中央部が僅かに凹み、西壁以外は極くなだらかに立ち上がる。炉跡は西端部に位置している。(遺物) なし。

5号炉穴

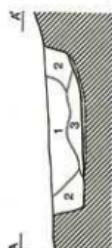
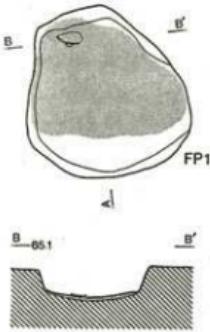
F-7



G-5



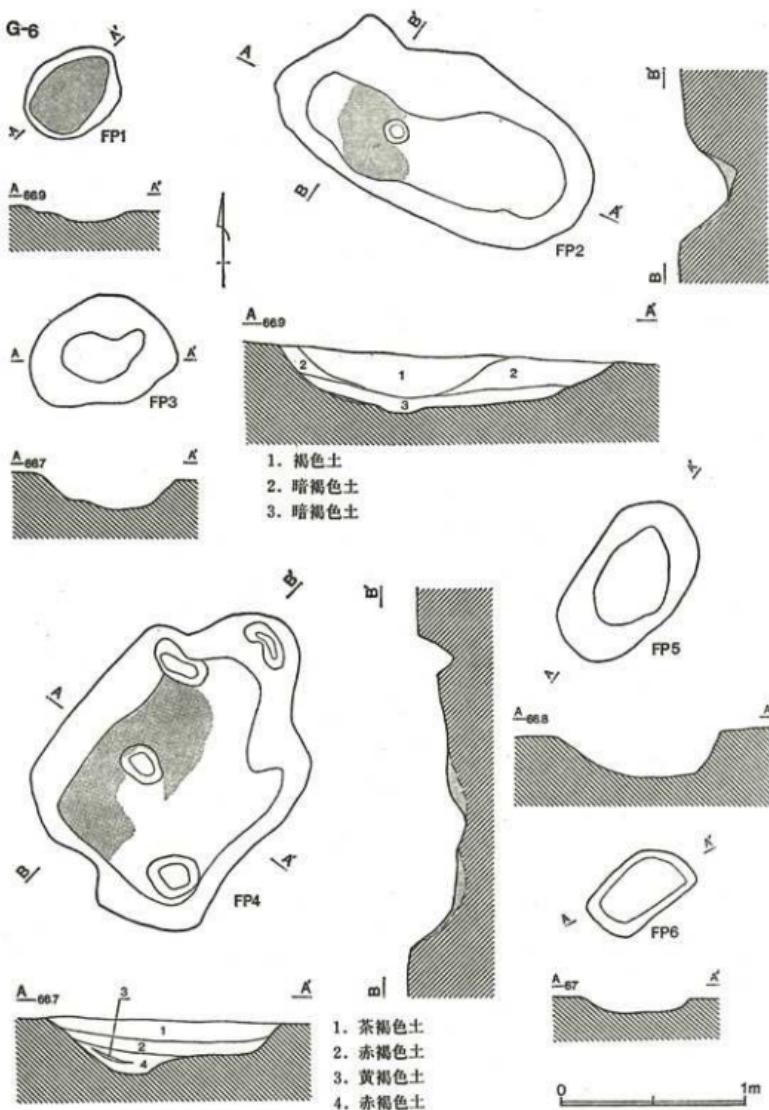
G-8



0 1m

1. 黒色土
2. 茶褐色土
3. 灰土

第51図 F 7・G 5・G 8グリッド炉穴



第52図 G-6 グリット炉穴

(形態) 円形 (規模) $0.66 \times 0.64 \times 0.1 m$ (炉跡) $60 \times 51 \times 0.5 cm$ (主軸方向) N—41°—E (構造) 盤状を呈し、南壁は浅く不明瞭、他の壁は角度を持って立ち上がる。炉跡は北壁寄りに位置している。(遺物)なし。

6号炉穴

(形態) 楕円形 (規模) $0.45 \times 0.37 \times 0.07 m$ (炉跡) 検出し得なかった。(主軸方向) N—1°—E (構造) 浅い皿状を呈する。壁はなだらかに立ち上がり、壇底は平坦。(遺物)なし。

7号炉穴

(形態) 不整円形 (規模) $0.49 \times 0.47 \times 0.06 m$ (炉跡) 覆土中に焼土ブロックが、確認されたが、検出されなかった。(主軸方向) N—65°—E (構造) 極く浅い皿状、壇底も凹凸なく平坦。(遺物)出土していない。

G 5 グリッド(第51図)

1号炉穴

(形態) 楕円形 (規模) $0.56 \times 0.48 \times 0.12 m$ (炉跡) $48 \times 38 \times 1 cm$ (主軸方向) N—90°—W (構造) 全体が東へ傾斜している。西壁は角度を持ち、他の壁はなだらかに立ち上がる。平坦で東へ傾斜する壇底が炉跡となっている。(遺物)なし。

G 6 グリッド(第52図)

1号炉穴

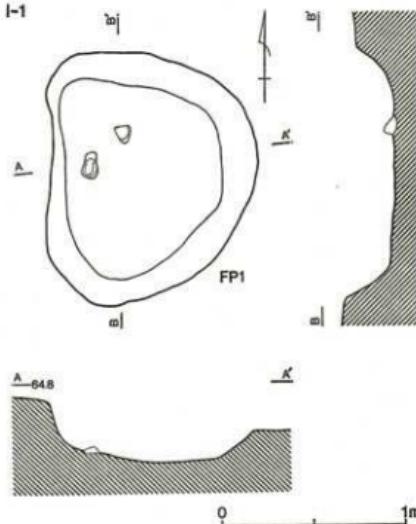
(形態) 楕円形 (規模) $0.57 \times 0.45 \times 0.07 m$ (炉跡) $48 \times 30 \times 5 cm$ (主軸方向) N—48°—E (構造) 極く浅い皿状を呈し ていて。北壁寄りに僅かな段差を持つ壇底が炉跡となり、焼土の堆積は薄い。(遺物)なし。

2号炉穴

(形態) 長楕円形 (規模) $1.81 \times 0.93 \times 0.6 m$ (炉跡) $43 \times 26 \times 8 cm$ (主軸方向) N—66°—W (構造) 西及び北壁は角度を持ち、他の壁はなだらかに立ち上がる。壇底は中央のピットに向かい緩く傾斜している。炉跡はピットを囲む様に位置している。炉跡西側には広く平坦な足場が観られる。(遺物) 覆土中及び炉跡より条痕文の細片が出土している。

3号炉穴

(形態) 不整円形 (規模) 0.8



第53図 I-1 グリッド 1号炉穴

$\times 0.59 \times 0.17 m$ (炉跡) 覆土下層に多量の焼土ブロックが確認されたが、明確な炉跡は検出されなかった。(主軸方向) N—90°—W (構造) 皿状を呈し、壁はなだらかに立ち上がる。墳底は西壁寄りに段を持ち西側へ緩く傾斜している。(遺物) なし。

4号炉穴

(形態) 隅丸方形 (規模) $1.66 \times 1.22 \times 0.29 m$ (炉跡) $103 \times 43 \times 8 cm$ (主軸方向) N—44°—E (構造) 壁直下にピットが存在する南壁はほぼ垂直に、他の壁はなだらかに立ち上がる。墳底には3ヶ所のピットが存在し、凹凸が激しい。炉跡は墳底中央のピットを囲む様に認められ、焼土の堆積も厚い。覆土は焼土及び炭化物を多量に含む茶褐色土、赤褐色土が主体となっていた。(遺物) 条痕文が2片出土している。

5号炉穴

(形態) 楕円形 (規模) $0.64 \times 0.55 \times 0.24 m$ (炉跡) 検出し得なかった。(主軸方向) N—35°—E (構造) 東及び北壁は角度を持ち、南、西壁は極くなだらかに立ち上がる。墳底は平坦である。(遺物) なし。

6号炉穴形

(形態) 隅丸方形 (規模) $0.6 \times 0.33 \times 0.07 m$ (炉跡) 墳底直上に焼土ブロックが認められたが、明確な炉跡は検出し得なかった。(主軸方向) N—63°—E (構造) 極く浅い皿状を呈する。墳底中央がやや盛り上がる。(遺物) なし。

G 8 グリッド (第51図)

1号炉穴

(形態) 不整円形 (規模) $0.94 \times 0.9 \times 0.2 m$ (炉跡) $85 \times 60 \times 2 cm$ (主軸方向) N—65°—W (構造) 調査当初、黒浜期の土壤と考えられたが、土層観察や焼土の在り方から炉穴と判断したものである。壁は垂直に近く立ち上がる。墳底は平坦で凹凸も無い。(遺物) 条痕文と黒浜期の土器片が出土している。

土器 (第48図 8~10)

8は緩く外反すると思われる口縁部。口唇部は撫でられ平坦、内面も丁寧に撫でられ滑沢である。竹管工具による平行沈線文間に、爪形状の刺突文が加えられている。胎土には少量の纖維と砂粒を含み、焼成良好、赤褐色を呈している。9は繩文のやや外反する深鉢、原体はLRで深く施文されている。内面は丁寧に磨かれて滑沢を呈している。10は無節のL_T。9、10とも胎土に少量の纖維を含み、焼成良好である。9は赤褐色、10は茶褐色を呈している。

I 1 グリッド (第53図)

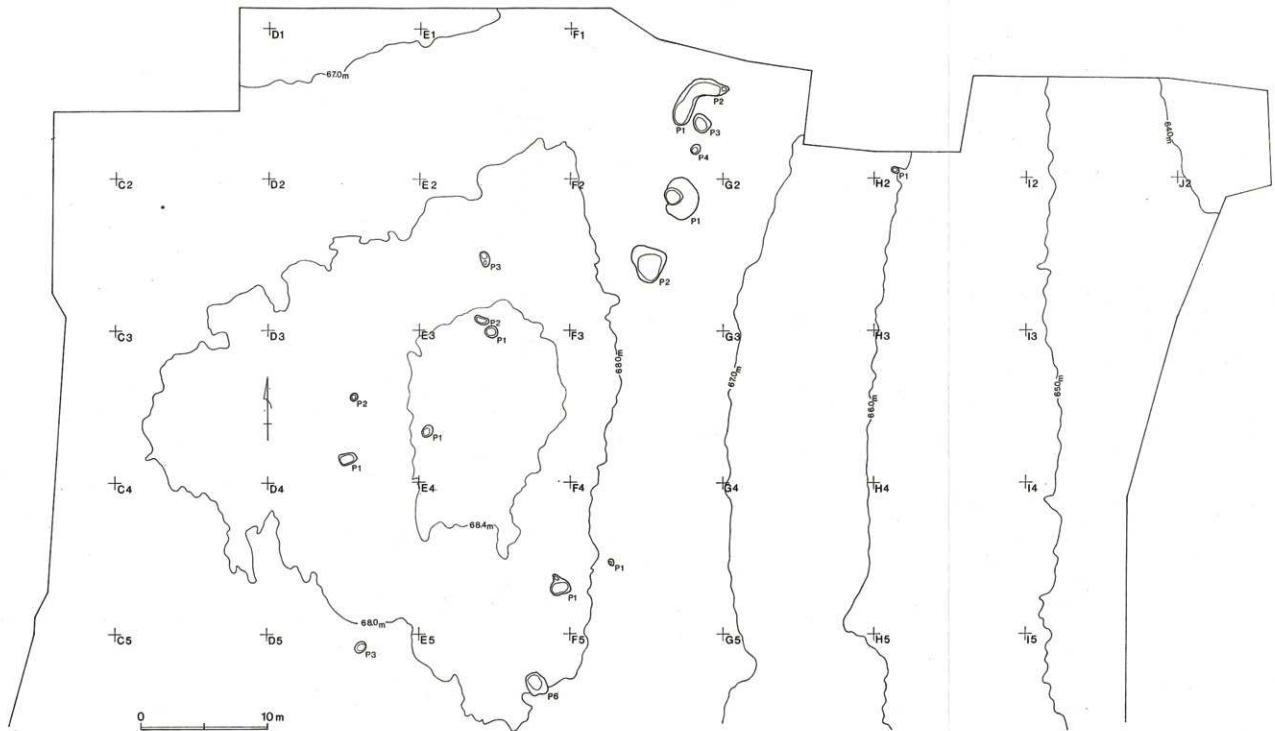
1号炉穴

(形態) 不整円形 (規模) $1.36 \times 1.13 \times 0.25 m$ (炉跡) 墳底を精査したが明確な炉跡は検出し得なかった。(主軸方向) N—26°—E (構造) 遺跡東北端の緩傾斜面に単独で存在している。ロームでは無く、濃茶褐色粘質土を掘り込み構築されている。西壁は角度を持ち、他の壁はなだらかに立ち上がる。墳底は東側へ緩く傾斜しているが平坦である。墳底には拳大の礫が2点観られる。(遺物) なし。

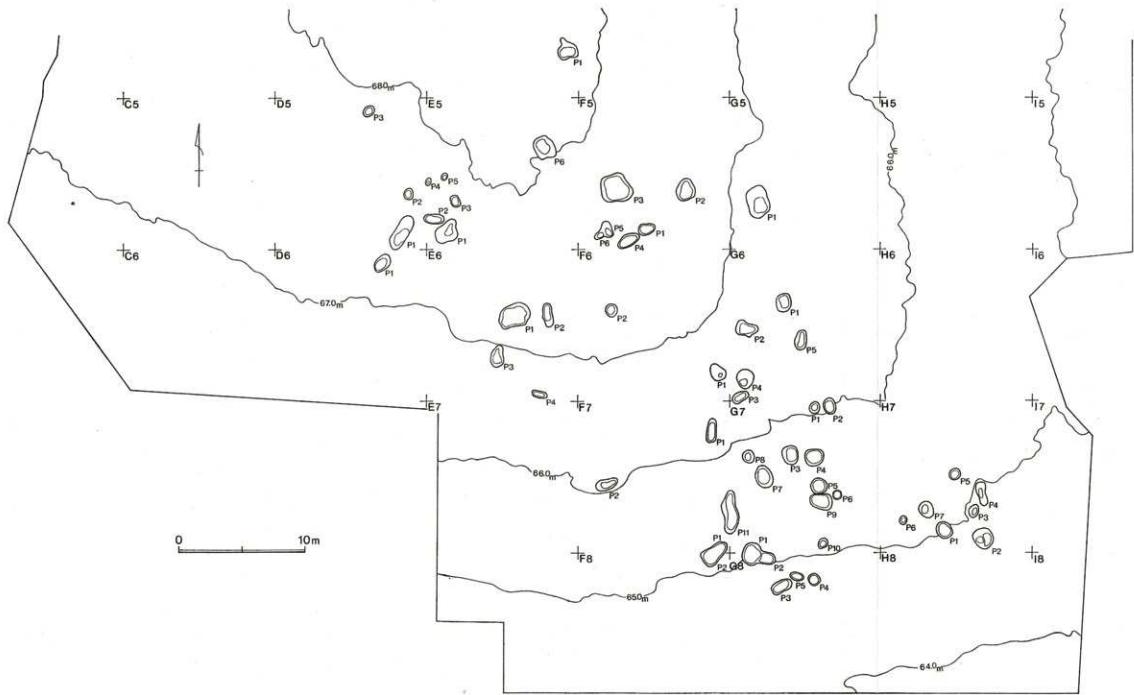
縁山遺跡炉穴

| 炉穴番号 | 挿図番号 | 形態 (プラン) | 規 模 長径×短径×深さ(cm) | 炉跡の数とその 規模(cm) | 主軸方向 | 出土 遺物 | 備考 |
|-------|------|-------------|------------------------|---------------------------|---------|-----------|----|
| C 2 | 38 | 不整円形 | 0.88×0.7×0.26 | | N-10°-W | | |
| F P 1 | | | | | | | |
| D 2 | 38 | 不整円形 | 0.64×0.60×0.08 | 33×26×1 | N-90°-W | | |
| F P 1 | | | | | | | |
| F P 2 | | 不整円形 | 1.05×0.69×0.20 | 48×17×1 | N-20°-W | 条痕文 | |
| F P 3 | | 椭円形 | 1.37×0.87×0.22 | | N-41°-W | | |
| F P 4 | | 楕丸方形 | 0.84×0.70×0.12 | | N-36°-W | | |
| D 3 | 39 | 円形 | 0.78×0.73×0.23 | 58×46×4 | N-76°-W | | |
| F P 1 | | | | | | | |
| F P 2 | | 不整円形 | 0.78×0.62×0.24 | | N-52°-E | | |
| F P 3 | | 椭円形 | 0.87×0.68×0.21 | 33×25×0.5 | N-3°-E | | |
| F P 4 | | 椭円形 | 0.80×0.48×0.17 | 71×43×3 | N-53°-E | | |
| D 4 | 39 | 円形 | 0.64×0.60×0.07 | 22×20×1 | N-36°-E | | |
| F P 1 | | | | | | | |
| F P 2 | | 円形 | 0.58×0.49×0.08 | | N-41°-W | | |
| F P 3 | | 不整円形 | 0.72×0.70×0.21 | 63×37×1.2 | N-65°-W | 条痕文 | |
| D 5 | 40 | 椭円形 | 1.88×1.04×0.22 | 156×88×10 | N-80°-E | | |
| F P 1 | | | | | | | |
| F P 2 | | 不整円形 | 2.22×1.86×0.20 | 1. 74×44×6 2. 66×30×14 | N-15°-W | 茅山上層・打製石斧 | |
| F P 3 | | 不整椭円形 | 2.76×1.04×0.78 | 130×40×22 | N-23°-W | 鶴ヶ島台・条痕文 | |
| F P 4 | | 長椭円形 | 2.98×1.48×0.82 | | N-16°-W | 茅山上層・打製石斧 | |
| D 6 | 39 | 不整円形 | 0.85×0.74×0.20 | 52×18×0.5 | N-15°-E | | |
| F P 1 | | | | | | | |
| E 2 | 43 | 不整円形 | 0.97×0.61×0.31 | 33×32×1 | N-13°-W | | |
| F P 1 | | | | | | | |
| E 4 | 43 | 長椭円形 | 1.29×0.59×0.12 | 1. 63×22×4 2. 56×32×6 | N-31°-W | 条痕文 | |
| F P 2 | | | | | | | |
| F P 3 | | 長椭円形 | 0.94×0.53×0.18 | 38×23×8 | N-53°-W | | |
| F P 4 | | 楕丸方形 | 0.92×0.52×0.27 | 49×30×5 | N-53°-W | | |
| E 5 | 44 | 椭円形 | 0.59×0.44×0.08 | 45×27×1 | N-53°-E | | |
| F P 1 | | | | | | | |
| F P 2 | | 不整椭円形 | 2.97×1.48×0.22 | 33×14×1 | N-4°-E | | |
| F P 3 | | 楕丸方形 | 1.82×0.81×0.10 | 69×35×1 | N-48°-E | 条痕文 | |
| F P 4 | | 不整椭円形 | 1.20×0.80×0.18 | 30×12×1 | N-20°-W | | |
| E 6 | 45 | 椭円形 | 0.65×0.34×0.08 | 65×34×1 | N-54°-W | 田戸下層式 | |
| F P 1 | | | | | | | |
| F P 2 | | 椭円形 | 0.46×0.41×0.05 | | N-14°-W | 条痕文 | |
| F P 3 | | 椭円形 | 0.47×0.29×0.03 | 47×29×1 | N-12°-W | 条痕文 | |
| E 7 | 43 | 椭円形 | 0.75×0.52×0.25 | 25×24×1 | N-27°-E | | |
| F P 1 | | | | | | | |
| F P 2 | | 円形 | 0.65×0.62×0.20 | | N-77°-E | | |
| F 1 | 45 | 楕丸長方形 | 2.34×0.81×0.20 | 1. 69×49×5 2. 54×28×7 | N-22°-W | 条痕文 | |
| F P 1 | | | | | | | |
| F P 2 | | 椭円形 | 1.18×0.62×0.18 | 38×23×7 | N-23°-E | | |

| 炉穴番号 | 拂団番号 | 形態 (プラン) | 規 模 長径×短径×深さ(m) | 炉跡の数とその 規模(cm) | 主軸方向 | 出 土 遺 物 | 備考 |
|-------|---------|-------------|--------------------|---|-----------|---------------|----|
| F P 3 | | 不整円形 | 0.78×0.48×0.10 | | N-63°-W | | |
| F 4 | 46 | 不整椭円形 | 3.70×3.20×0.36 | 1. 48×46×20 2. 30×30×1 3. 46×22×1 4. 30×14×4 5. 44×36×1 6. 38×26×8 7. 46×26×4 | N-14°-E | 野島式・条痕文 無文 | |
| F P 1 | | 長椭円形 | 2.64×1.08×0.15 | 1. 50×26×1 2. 66×32×10 3. 52×42×1 | N-41°-W | 条痕文 | |
| F P 2 | | 不整椭円形 | 2.24×1.34×0.40 | 74×54×8 | N- 8°-W | | |
| F P 3 | | 椭円形 | 0.63×0.49×0.18 | 14×11×0.5 | N-90°-W | 条痕文 | |
| F 5 | 49 + 50 | 隅丸方形 | 0.51×0.43×0.26 | 35×24×2 | N-65°-E | | |
| F P 2 | | 隅丸方形 | 0.67×0.52×0.16 | 42×30×1 | N-45°-E | | |
| F P 3 | | 隅丸方形 | 2.14×1.16×0.33 | 1. 121×59×3 2. 33×23×1 | N-65°-E | | |
| F P 4 | | 椭円形 | 0.49×0.44×0.08 | | N-43°-W | | |
| F P 5 | | 隅丸方形 | 0.99×0.49×0.18 | 48×30×0.5 | N-85°-E | 条痕文 | |
| F P 6 | | 椭円形 | 0.79×0.56×0.19 | | N-85°-E | | |
| F P 7 | | 椭円形 | 0.55×0.45×0.13 | 55×45×0.5 | -13°-W | | |
| F P 9 | | 椭円形 | 0.94×0.66×0.13 | | N-39°-E | | |
| F 6 | 50 | 不整円形 | 1.00×0.82×0.40 | 100×82×10 | N- 4°-W | 無文 | |
| F P 1 | | 椭円形 | 0.55×0.44×0.11 | 55×44×1 | N-65°-E | | |
| F P 2 | | 椭円形 | 0.48×0.41×0.04 | | N-75°-E | | |
| F P 3 | | 椭円形 | 0.70×0.50×0.11 | 70×50×7 | N-37°-W | | |
| F P 4 | | 椭円形 | 0.61×0.56×0.16 | 61×56×8 | N-54°-W | | |
| F P 5 | | 円形 | 0.66×0.52×0.09 | 72×46×3 | N-73°-E | | |
| F P 6 | | 椭円形 | 0.52×0.48×0.07 | | N-23°-W | | |
| F 7 | 51 | 円形 | 0.62×0.55×0.13 | 62×55×3 | N-20°-W | | |
| F P 1 | | 椭円形 | 0.89×0.70×0.07 | 64×48×1 | N-23°-E | 条痕文 | |
| F P 2 | | 円形 | 0.73×0.64×0.12 | 43×35×0.5 | N- 1°-E | 条痕文 | |
| F P 3 | | 椭円形 | 0.81×0.74×0.13 | 24×16×0.5 | N-60°-W | | |
| F P 4 | | 円形 | 0.66×0.64×0.10 | 60×51×0.5 | N-41°-E | | |
| F P 5 | | 椭円形 | 0.45×0.37×0.07 | | N- 1°-E | | |
| F P 6 | | 不整円形 | 0.49×0.47×0.06 | | N-65°-E | | |
| G 5 | 51 | 椭円形 | 0.56×0.48×0.12 | 48×38×1 | N-90°-W | | |
| F P 1 | | 椭円形 | 0.57×0.45×0.07 | 48×30×5 | N-48°-E | | |
| G 6 | 52 | 長椭円形 | 1.81×0.93×0.60 | 43×26×8 | N 66°-W | 条痕文 | |
| F P 2 | | 不整円形 | 0.80×0.59×0.17 | | N-90°-W | | |
| F P 3 | | 隅丸方形 | 1.66×1.22×0.29 | 103×43×8 | N-44°-E | 条痕文 | |
| F P 4 | | 椭円形 | 0.64×0.55×0.24 | | N-35°-E | | |



第54図 土壤分布図(1)



第55図 土壤分布図(2)

| 炉穴番号 | 挿図番号 | 形態 (プラン) | 規 模 長径×短径×深さ(m) | 炉跡の数とその 規模(cm) | 主軸方向 | 出土 遺物 | 備考 |
|-------|------|-------------|-----------------------|-------------------|---------|----------|----|
| F P 6 | | 隅丸方形 | 0.60 × 0.33 × 0.07 | | N-63°-E | | |
| G 8 | 51 | | | | | | |
| F P 1 | | 不整円形 | 0.94 × 0.90 × 0.20 | 85 × 60 × 2 | N-65°-W | 黒浜式・条痕文 | |
| I 1 | 53 | | | | | | |
| F P 1 | | 不整円形 | 1.36 × 1.13 × 0.25 | | N-26°-E | | |

4 土壙と出土遺物

縄山遺跡で検出された土壙は、総数70基を数え、炉穴同様に一つの中心を成すものである。

炉穴が黒浜期の1基を除き、縄文時代早期に限定されるのに対して、土壙は縄文時代早期、前期及び奈良時代と時期差が認められる。

土壙は、遺跡北端のF 1・2グリッドにも散在して存在しているが、多くは遺跡南半部の緩傾斜面E 5・6、F 5、G 6～8、H 7グリッドに集中している。散在するものもあるが、G 7・8グリッドでは20基、H 7グリッドは6基の土壙が連続状に分布しているものもある。

D 3グリッド(第56図)

1号土壙

(形態) 長方形 (規模) 1.29 × 0.79 × 0.61m (主軸方向) N-67°-E (構造) 覆土は少量のロームを含む茶褐色土が厚く堆積していた。壁は垂直に立ち上がり、壙底は東及び北壁側へ傾斜している。(遺物) 茶褐色土中より野島式、条痕文、無文土器が少量出土している。

土器(第57図1～4)

1は波状口縁を呈する深鉢の波頂部片。波頂部より垂下する細隆起線と直交する細隆起線で区画文を構成し、区画内を縦位及び波状の沈線で充填している。沈線間に刺突文が観られ、垂下する細隆起線には刻み目が施されている。器壁は薄く、胎土には少量の纖維を含み、焼成良好で堅い土器である。茶褐色を呈している。2は無文、外反する深鉢口縁、内外面とも難な整形で凹凸が目立ち、内厚である。3も無文であるが、内面には僅かに条痕が認められる。4は内外面とも浅い条痕が施文されている。いずれも胎土には、少量の纖維と多量の砂粒を含み、表面がザラついている。
2、4は焼成良好で堅い。3は焼成不良で脆い。2、3赤褐色、4は茶褐色を呈している。

2号土壙

(形態) 不整円形 (規模) 0.55 × 0.49 × 0.34m (主軸方向) N-34°-E (構造) 小形で掘り込みの深い土壙である。壁は角度を持って立ち上がり、壙底は平坦である。(遺物) なし。

D 5 グリッド (第56図)

隣接する E 5 グリッド寄り、8号住居跡の西側緩傾斜面に、炉穴と混在して3基の土壙が検出されている。

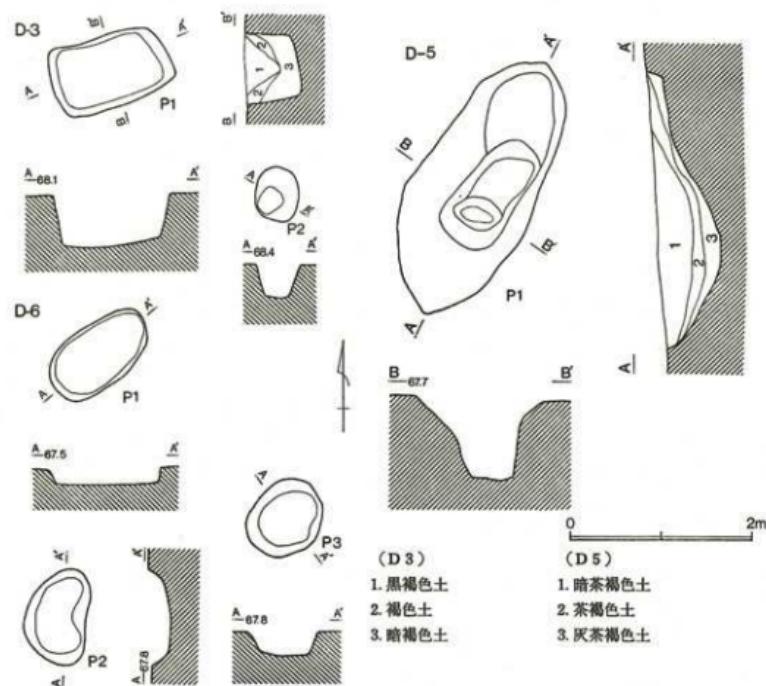
1号土壙

(形態) 長椭円形 (規模) $3.04 \times 1.39 \times 0.9\text{m}$ (主軸方向) N- 27° —E (構造) 東及北壁はほぼ垂直に立ち上がり、西、南壁は中位に段を持ちながらに立ち上がる。壙底は北壁側から南壁側へ緩く傾斜し、凹凸が激しい。(遺物) 少量の炭化物を含む茶褐色土中より2片の条痕文器が出土している。

土器 (第57図5・6)

5は底部に近いもの。内外面とも条痕が浅く施文されている。6は深い条痕が外面に観られるが内面は荒れていて不明。何れも胎土には少量の繊維と多量の砂粒を含む。焼成は良好、赤褐色を呈している。

2号土壙



第56図 D 3・D 5・D 6・グリッド土壙

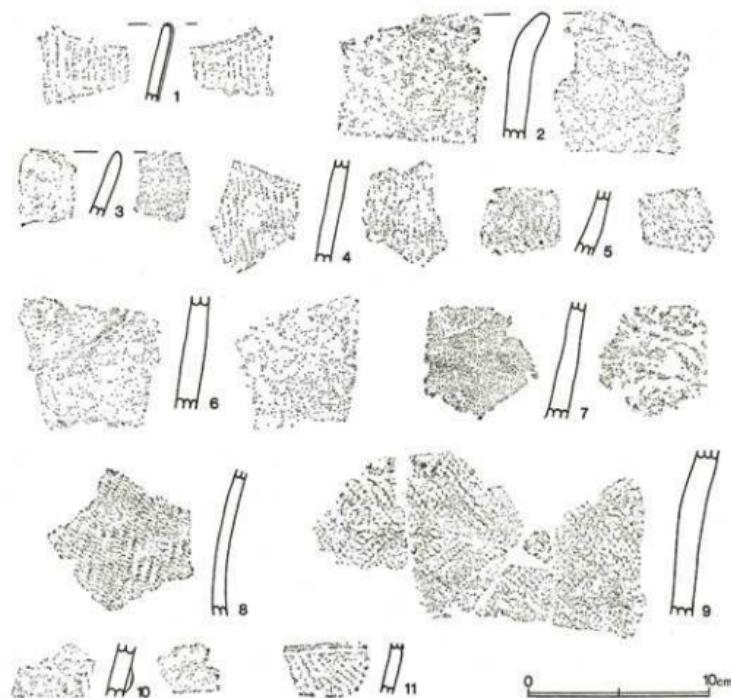
(形態) 不整円形 (規模) $1.05 \times 0.68 \times 0.24m$ (主軸方向) N— 2° —E (構造) 浅い皿状を呈する。壁は極くなだらかに立ち上がり、壇底は緩く北側へ傾斜している。(遺物) 覆土下層より条痕文細片が出土している。

8号土壙

(形態) 不整円形 (規模) $0.91 \times 0.76 \times 0.27m$ (主軸方向) N— 50° —E (構造) 西壁はやや角度を持ち、他の壁はなだらかに立ち上がる。壇底は凹凸もなく平坦である。(遺物) 壇底より条痕文土器が出土している。

土器 (第57図7)

外面に浅い条痕の施文された底部に近い土器。胎土には多量の纖維と雲母が含まれ、表面がザラついている。焼成良好、赤褐色を呈している。



第57図 D3・D5・D6・F2・E3・E5・E6グリッド土壙出土土器

D 6 グリッド（第56図）

1号土壙

（形態） 横円形 （規模） $1.23 \times 0.68 \times 0.18\text{m}$ （主軸方向） N— 18° —E （構造） 極く浅い皿状を呈し、壁はなだらかに立ち上がる。壙底は平坦である。（遺物） 条痕文の細片が1片出土している。

E 2 グリッド（第58図）

遺構の分布が希薄な平坦面上に位置する E 2 グリッドからは、長径 1m 前後のほぼ同一規模の3基の土壙が検出されている。

1号土壙

（形態） 不整円形 （規模） $0.95 \times 0.89 \times 0.22\text{m}$ （主軸方向） N— 45° —W 2号土壙と近接している。浅い皿状を呈し、壁は極くなだらかに立ち上がる。壙底は平坦である。（遺物） 覆土中より条痕文、打製石斧が出土している。

石器（第62図4）

細長い自然砾の一端に粗い調製加工を加え、鈍角の刃部を作り出している。刃部以外に調整加工は加えられていない。硬質砂質頁岩製、重さ 116g 。

2号土壙

（形態） 不整円形 （規模） $0.99 \times 0.49 \times 0.13\text{m}$ （主軸方向） N— 44° —W （構造） 極く浅い皿状を呈している。壙底も凹凸なく平坦である。（遺物） 壙底直上より条痕文細片が出土している。

3号土壙

（形態） 長椭円形 （規模） $1.25 \times 0.52 \times 0.56\text{m}$ （主軸方向） N— 7° —W （構造） 2基の重複と思われたが、土層観察では単一の土壙であった。北壁寄りの壙底が一段深く掘り込まれ、壁は垂直に近く立ち上がっている。（遺物） 出土していない。

E 3 グリッド（第58図）

1号土壙

（形態） 横円形 （規模） $1 \times 0.7 \times 0.74\text{m}$ （主軸方向） N— 22° —E （構造） 7号住居跡の北西コーナーに近接して検出された。小形で掘り込みは深く、壁は垂直に立ち上がる。壙底は平坦。（遺物） 覆土中より条痕文底部が出土している。

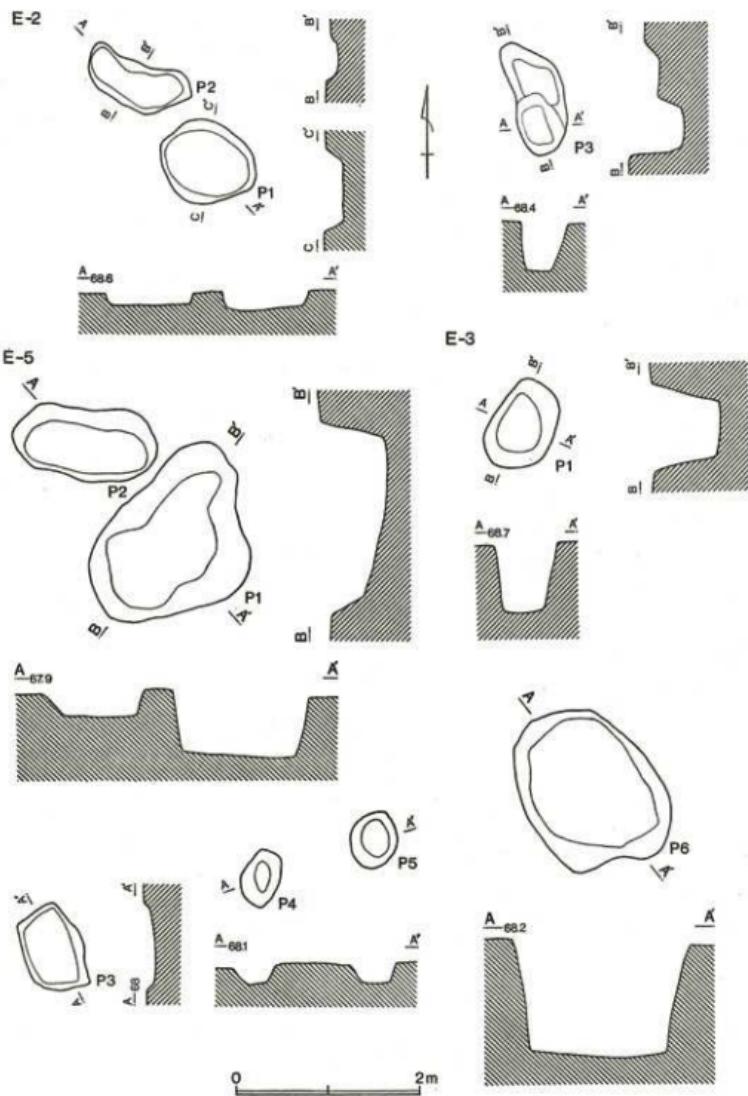
E 4 グリッド（第6図）

1号土壙

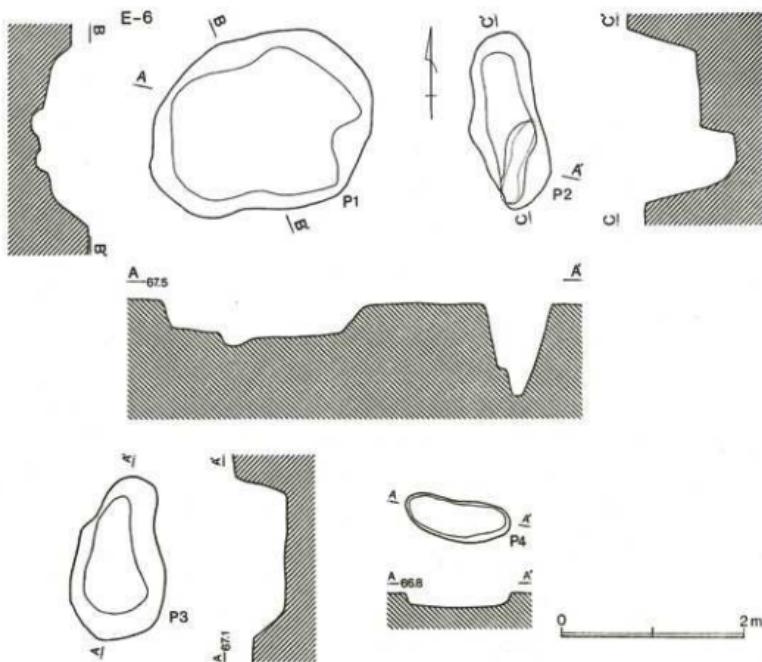
（形態） 横円形 （規模） $1.49 \times 1.05 \times 0.27\text{m}$ （主軸方向） N— 87° —E （構造） 1号住居跡の南コーナーを切って掘り込まれている。西壁は垂直に近く、他の壁はなだらかに立ち上がる。壙底は平坦で凹凸もない。（遺物） 出土していない。

E 5 グリッド（第58図）

台地肩部から緩傾斜面に相当する E 5 グリッドでは、8号住居跡西側に集中して5基の土壙が検出されている。形態、規模などバラつきが観られる。



第58図 E 2 + E 3 + E 5 グリット土壤



第59図 E-6 グリッド土壤

1号土壤

(形態) 不整円形 (規模) $2.12 \times 1.5 \times 0.71\text{m}$ (主軸方向) N-35°—E (構造) 西壁は極くならかに、他の壁はほとんど垂直に立ち上がる。墳底は南壁側へ強く傾斜している。(遺物) 花瓶下層式が出土している。

土器 (第57図9)

原体R LとL Rを用い、羽状縦文の施された深鉢の頭部片。器肉は厚く、胎土には多量の繊維と砂粒を含み、表面がザラついている。焼成は良く、赤褐色を呈している。

2号土壤

(形態) 長椭円形 (規模) $1.58 \times 0.79 \times 0.26\text{m}$ (主軸方向) N-81°—W (構造) 浅い皿状を呈している。墳底は極く平坦で凹凸も観られない。(遺物) 覆土より諸畿a式土器が1片出土している。

土器 (第57図8)

縦文が施された深鉢頭部、原体はLP。器壁が充分乾燥した後に施文され深い。内面の撫では雜で荒れている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で堅い。赤褐色を呈している。

3号土壙

(形態) 楕丸方形 (規模) $0.94 \times 0.66 \times 0.11m$ (主軸方向) N— 29° —W (構造) 極く浅い皿状を呈している。墳底は南壁側へ緩く傾斜している。(遺物) 条痕文が1片出土している。

4号土壙

(形態) 円形 (規模) $0.63 \times 0.46 \times 0.19m$ (主軸方向) N— 90° —W (構造) 非常に小形の土壙である。掘り込みも浅く、壁もなだらかに立ち上がる。墳底は西壁側へ緩く傾斜している。(遺物) 条痕文細片が出土している。

5号土壙

(形態) 円形 (規模) $0.61 \times 0.52 \times 0.22m$ (主軸方向) N— 5° —E (構造) 小形で浅い皿状を呈している。墳底も平坦。(遺物) 出土していない。

6号土壙

(形態) 不整円形 (規模) $1.29 \times 1.44 \times 1.24m$ (主軸方向) N— 38° —W (構造) 壁はほぼ垂直に立ち上がり、墳底は中央部がやや低くなっている。覆土はロームブロックを含み、堅く締まった黒褐色土が堆積していた。(遺物) 出土していない。

E 6グリッド (第59図)

8号住居跡の南側緩傾斜面のF 6グリッド寄りに、1～4号の土壙が環状を呈して検出されている。

1号土壙

(形態) 不整円形 (規模) $2.59 \times 1.81 \times 0.5m$ (主軸方向) N— 60° —E (構造) 浅い皿状を呈している。壁は極くなだらかに立ち上がり、墳底中央部は凹凸が激しい。(遺物) 覆土下層より条痕文が2片出土している。

2号土壙

(形態) 長楕円形 (規模) $1.9 \times 0.8 \times 1m$ (主軸方向) N— 10° —W (構造) 壁は垂直に近く立ち上がり、墳底は平坦で、北壁寄りには $90 \times 25cm$ の一段深く掘り込まれたビットが存在している。ビット底部はオーバーハンプを呈している。覆土はロームブロックを含む茶褐色土、黒褐色土が主体となり、重複関係は認められなかった。(遺物) 黒褐色土中より条痕文、諸磯a式が出土している。

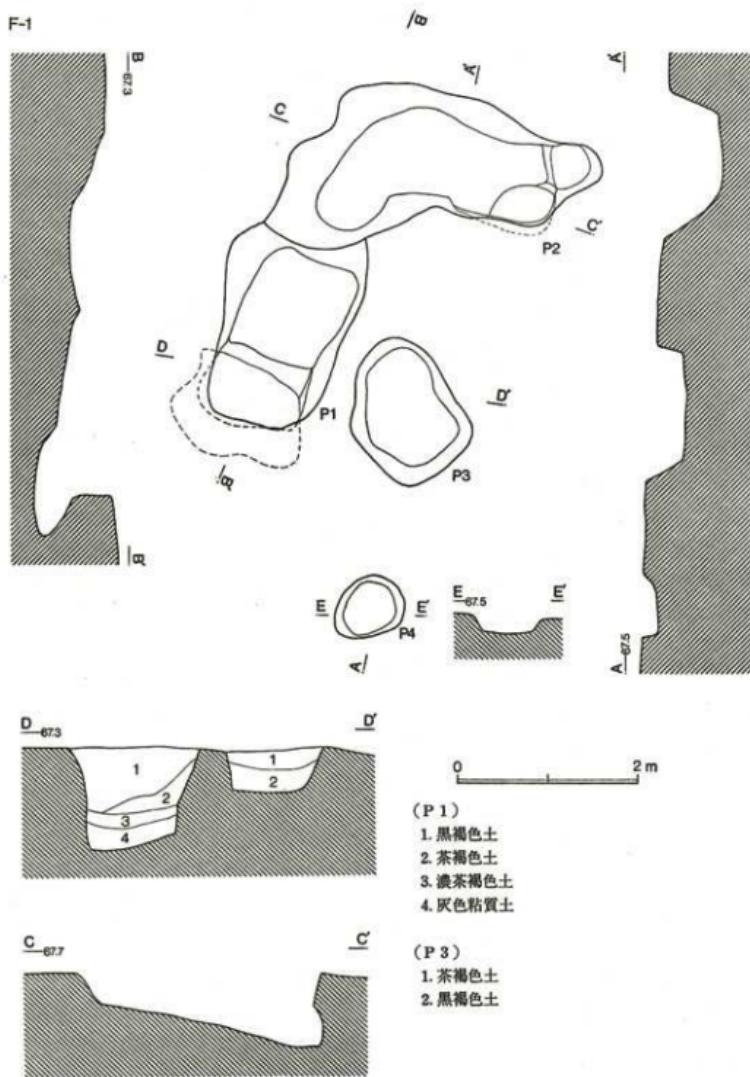
土器 (第57図10・11)

10は括れ部上に刺突文が施文された深鉢片。胎土には多量の繊維を含み、焼成不良で脆い。茶褐色。2は原体が単節P Lを地文とし、平行沈線文が描かれている。胎土には砂粒を含み、焼成良好で堅い土器である。赤褐色を呈している。

3号土壙

(形態) 長楕円形 (規模) $1.81 \times 1.04 \times 0.51m$ (主軸方向) N— 10° —E (構造) 南壁は垂直に、他の壁は極くなだらかに立ち上がる。墳底は中央がやや高く盛り上がっている。(遺物) 出土していない。

4号土壙



第60図 F 1 グリッド土壤

(形態) 長椭円形 (規模) $1.15 \times 0.44 \times 0.16\text{m}$ (主軸方向) N—80°—W (構造) 浅い皿状を呈している。墳底も平坦である。(遺物) 出土していない。

F 1 グリッド (第60図)

遺跡の最北端、台地肩部に相当する当グリッドからは、縄文時代早期に属する堅穴跡、炉穴、土壙が検出されている。土壙は1号堅穴跡の東側に近接して存在している。

1号土壙

(形態) 隅九方形 (規模) $2.88 \times 1.44 \times 1.11\text{m}$ (主軸方向) N—21°—E (構造) 2号土壙に北壁を切られている。覆土は炭化物、焼土を含み堅く締まった黒褐色土が厚く堆積していた。壁は北壁を除きほぼ垂直に立ち上がる。墳底は北側から南壁側へ緩く傾斜し、墳底中央部に段を持ち、南壁下はオーバーハングを呈している。(遺物) 覆土中より20数片の条痕文土器と打製石斧が出土している。

土器 (第61図1~7)

1は、竹管による刺突文と沈線文で文様が構成される深鉢の括れ部。胎土には極く少量の繊維が含まれている。焼成良好で堅く、茶褐色を呈する。2~7は内外面に条痕文の施文されたものである。太めの条痕(2・4・5・7)、細めの条痕(3・6)が観られ、いずれも条痕の施文は浅い。6の内面には条痕が認められず、他のものは条痕が雜に施文されている。胎土には少量の繊維が含まれている。焼成は良好、7は赤褐色、他は茶褐色を呈している。

石器 (第62図5)

1%以上を欠損した打製石斧の刃部と思われる。片面には大きく自然面を残している。主剥離面調整加工も粗雑であり、刃部も敲打痕が激しい。千枚岩製、重さ92g。

2号土壙

(形態) 不整円形 (規模) $2.74 \times 1.25 \times 0.79\text{cm}$ (主軸方向) N—70°—W (構造) 1号土壙の北壁を切り、直交して存在している。北壁及び東壁は角度を持ち、他の壁はなだらかに立ち上がる。墳底は西壁側から東壁側へ強く傾斜しており、東壁下ではオーバーハングを呈している。

(遺物) 覆土中及び墳底上より条痕文が数点出土している。

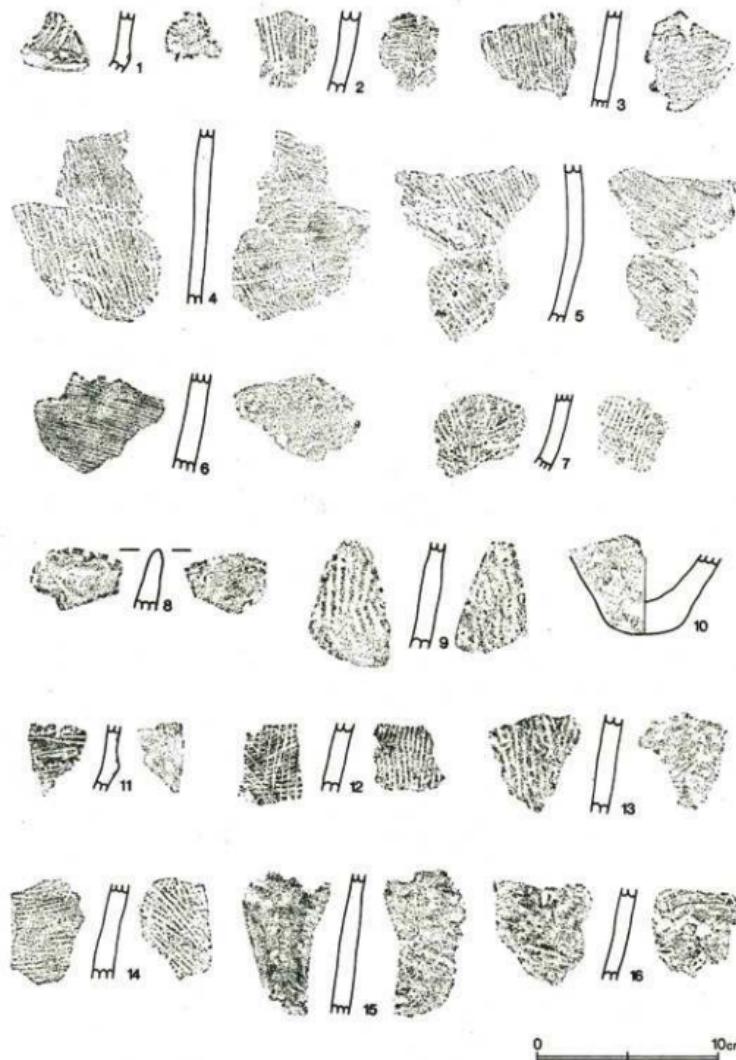
土器 (第61図8~10)

8は内外面とも無文の口縁部。口唇には刻み目が施され、内削ぎ状を呈している。胎土には少量の繊維と多量の雲母を含む。焼成良好で堅く、赤褐色。9は条痕文が施文されたもので、外面は深く、内面は浅い。胎土には極く微量の繊維と多量の雲母が含まれ、表面はザラついている。焼成良好で堅い。茶褐色。10は、無文深鉢のやや丸味を帯びた尖底部。内外面とも雜な整形で凹凸が目立つ。胎土は2に近似し、焼成不良で脆い。赤褐色を呈している。

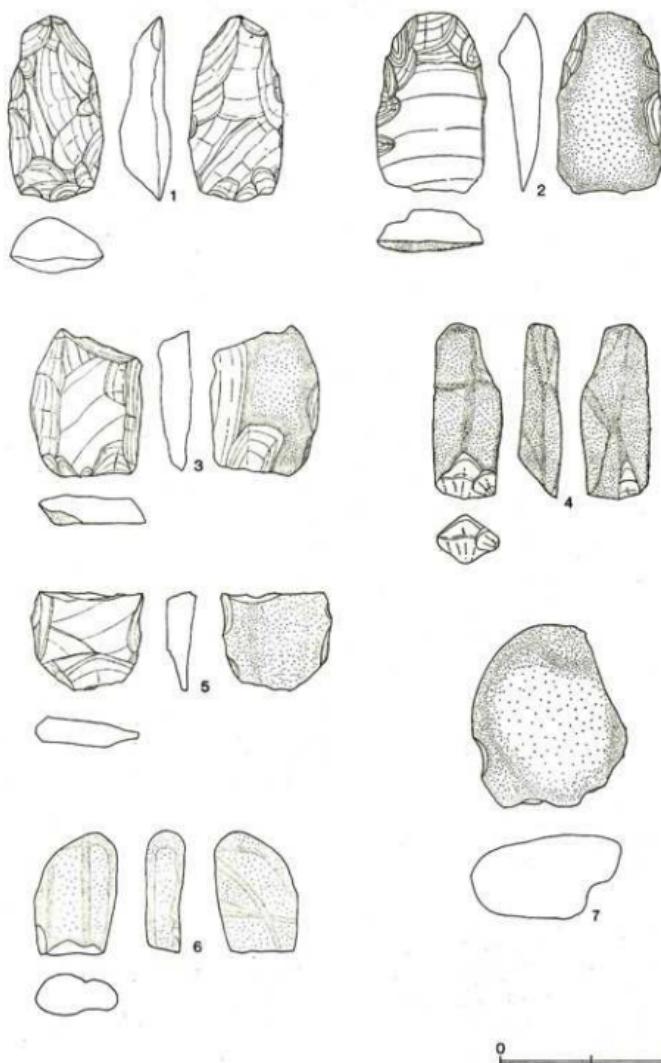
3号土壙

(形態) 不整円形 (規模) $1.62 \times 1.34 \times 0.45\text{m}$ (主軸方向) N—4°—W (構造) 西及び北壁はほぼ垂直に、他の壁はなだらかに立ち上がる。覆土は少量の炭化物を含む茶褐色土、黒褐色土が堆積していた。墳底は凹凸もなく平坦である。(遺物) 条痕文が覆土中より出土している。

土器 (第61図11~16)



第61図 F1グリッド土壌出土土器



第62図 土墳出土石器

文様を持つものは11と12である。11は刺突文と沈線文、12は地文条痕として平行沈線による矢羽状文が施されている。胎土に少量の繊維を含み、焼成良好、赤褐色。13、14は内外面とも条痕が観られるもの。何れも条痕の施文は浅い。15、16は無文のもので、16の内面には僅かに条痕が認められる。13は胎土に多量の繊維を含むが、他は少量含む。焼成は良好、13は赤褐色、他は茶褐色。

4号土壙

(形態) 円形 (規模) $0.74 \times 0.69 \times 0.18\text{m}$ (主軸方向) N—4°—E (構造) 浅い皿状を呈している。墳底も平坦。(遺物) 出土していない。

F 2 グリッド (第63図)

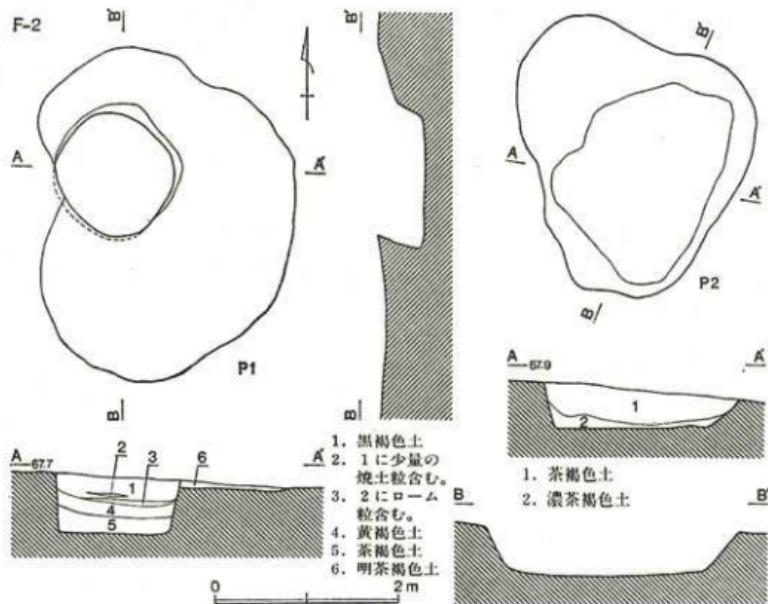
3号住居跡東側の緩傾斜面に2基の土壙が検出された。

1号土壙

(形態) 円形 (規模) $1.42 \times 1.3 \times 0.6\text{m}$ (主軸方向) N—5°—E (構造) 緩傾斜面の浅い凹地に位置している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。墳底は平坦であるが、南壁下では6~10cm前後オーバーハンプを呈している。(遺物) 条痕細片と打製石斧が出土している。

石器 (第62図)

断面三角形を呈する梯形の打製石斧の完形品である。両面とも大きな剥離痕を残し、側辺より細



第63図 F 2 グリッド土壙

かな調整剝離が加えられている。刃部も両面より剥離が加えられ、鈍角に仕上げられている。重さ 182g。石材はホルソフェルス。

2号土壤

(形態) 不整円形 (規模) $2.74 \times 2.15 \times 0.51m$ (主軸方向) N— 22° —E (構造) 覆土は炭化物を含む砂質の強い茶褐色土が堆積していた。西壁は角度を持ち、他の壁はなだらかに立ち上がる。墳底は西壁側へ緩く傾斜している。(遺物) 少量の条痕細片が出している。

F 4 グリッド (第64図)

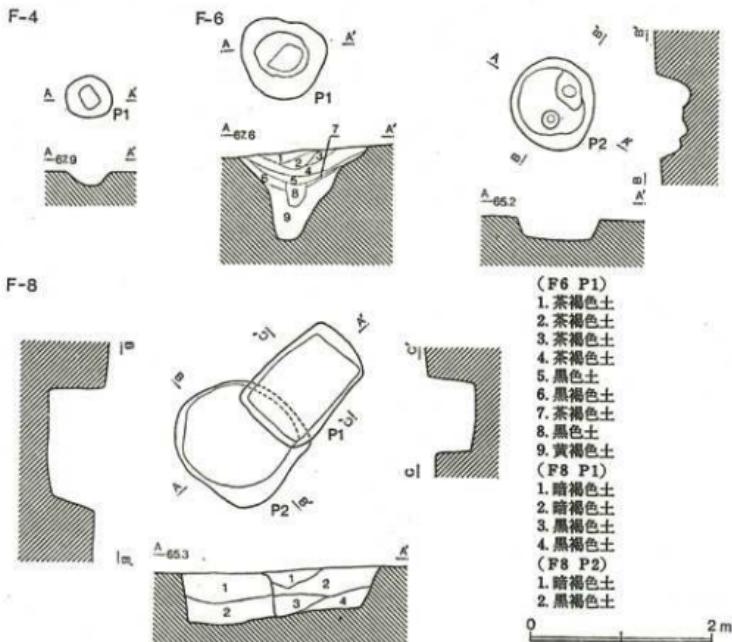
1号土壤

(形態) 円形 (規模) $0.5 \times 0.47 \times 0.14m$ (主軸方向) N— 30° —W (構造) 浅い皿状を呈した小規模な土壤である。(遺物) 黒浜式土器、打製石斧、磨石が出土している。

土器 (第65図1、2)

同一個体と思われる深鉢の口縁部と頸部である。全面に原体0段多条RLの繩文が施文されている。内面は丁寧に磨かれ、胎土には多量の纖維を含む。焼成不良で脆く、赤褐色。

石器 (第62図2、7)



第64図 F 4・F 6・F 8 グリッド土壤



第65図 F4・F5グリッド土壤出土土器

2は打製石斧の完形品。片面に大きく自然面を残し、主剥離面側は側辺より細かな調整加工が加えられている。刃部は鋭いが調整加工は加えられていない。重さ138g、石材は粗粒砂岩。7は1/2程度欠損した磨石。片面の側辺寄りに著しい使用痕が認められる。重さ576g。石材は安山岩。

F 5 グリット（第66図）

8号住居跡東側の緩傾斜面から6基の土壙が集中して検出されている。

1号土壙

（形態）隅丸方形 （規模） $1.42 \times 0.8 \times 0.42$ m （主軸方向）N—80°—E （構造）覆土はロームブロックを含む褐色土が主体であり、西壁はなだらかに、他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。壙底は東壁側へ緩く傾斜している。（遺物）少量の花積下層式土器とナイフ形石器が出土している。

石器（第97図1）

先端部を欠損するナイフ形石器。褐色土中より出土している。縦長の剥片を用い、片面は主剥離面を残し調整加工は加えられていない。片面は側辺より細かな調整加工が加えられ、薄い刃部が作り出されている。刃部には使用痕と思われる細かな剥離痕が認められる。5.06g、黒曜石製。

2号土壙

（形態）不整円形 （規模） $1.8 \times 1.48 \times 0.38$ m （主軸方向）N—16°—E （構造）ロームブロックを含む褐色土が主体に堆積していた。東壁は角度を持ち、他の壁はなだらかに立ち上がる。壙底は平坦である。（遺物）褐色土中及び壙底直上より黒浜式土器が出土している。

土器（第65図3～6）

縦て0段多条のRL、LRの繩文が施文されている。3は一部「V」字状に、4は羽状繩文となっている。内面は丁寧に磨かれ滑沢を呈している。胎土には多量の繊維を含み、5は焼成不良で赤褐色。他は焼成良好、茶褐色を呈している。

3号土壙

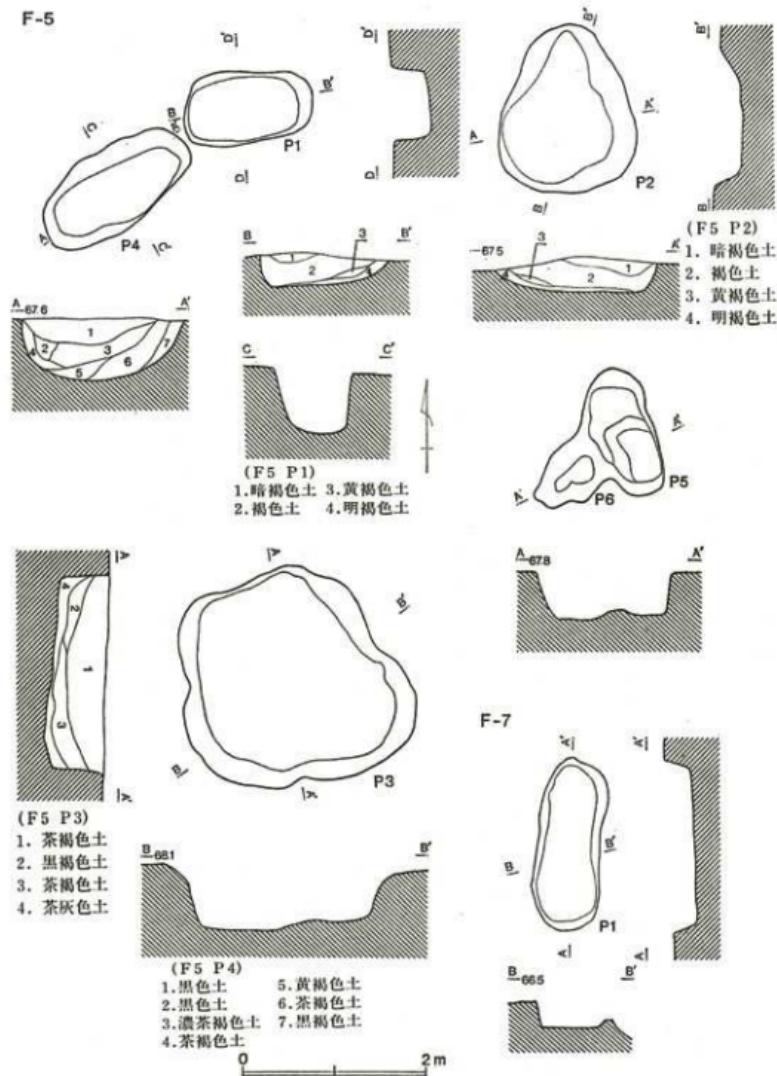
（形態）隅丸方形 （規模） $2.79 \times 2.26 \times 0.69$ m （主軸方向）N—8°—W （構造）覆土はロームブロック、黒色土を含む茶褐色土が厚く堆積し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壙底中央部には一段高くなった部分が存在している。（遺物）条痕文細片と少量の諸磯a式土器が出土している

4号土壙

（形態）隅丸方形 （規模） $1.42 \times 0.66 \times 0.46$ m （主軸方向）N—25°—W （構造）1号土壙に近接している。スリバチ状を呈している。東壁は垂直に、他の壁も角度を持って立ちあがっている。（遺物）器形の推定可能な深鉢を含め多量の条痕文土器が出土している。

土器（第65図7～12）

7は推定口径16.8cm、残高17.8cmを測る小形の深鉢である。口縁部は僅かに外反し、口唇部には刻み目が施されている。器肉は薄く仕上げられているが、凹凸が目立ち雑な整形である。内面は特に荒れており剥落が激しい。内外面とも同一施文具による条痕文が深くしっかりと施文されている。胎土には多量の繊維と少量の砂粒を含み、焼成不良で脆い土器である。色調は濃茶褐色を呈する。8～10は口唇部に刻み目を施された条痕文深鉢の口縁部。8の刻み目は「ハ」状に、9、10は同一方向である。何れも内外面の条痕の施文は浅い。胎土は少量の繊維と砂粒を含む。焼成は不良で



第66図 F 5・F 7 グリッド土壤

脆い。色調は濃茶褐色を呈し、8には黒斑も観られる。11は外面条痕文、内面無文の胴部片。12は横位の隆帯下には斜位の条痕文が観られる。胎土には多量の纖維を含む。焼成不良で脆い。11黒褐色、12は赤褐色を呈している。

5号土器

(形態) 楕円形 (規模) $1.42 \times 0.66 \times 0.46\text{m}$ (主軸方向) N—25°—W (構造) 6号土器の東壁を切り、直交して検出されている。壁は垂直に立ち上がり、墳底中央から南壁側に一段掘り込まれたピットが存在している。(遺物) 条痕文細片と黒浜式が出土している。

土器 (第65図1、2)

1は波状を呈する深鉢口縁部。波頂部より垂下する幅広の隆帶上には刺突文が施され、口唇部には細い沈線の刻み目が施されている。内面には細めの条痕が縦位に浅く施文されている。2は内外面とも条痕文が施文された胴部片。両者とも胎土には多量の纖維を含む。焼成は不良で脆い。1は赤褐色、2は茶褐色を呈している。

6号土器

(形態) 不整円形 (規模) $0.83 \times 0.6 \times 0.51\text{m}$ (主軸方向) N—64°—E (構造) 5号土器に東壁を切られている。壁は垂直に近く立ち上がり墳底は平坦である。(遺物) 出土していない。

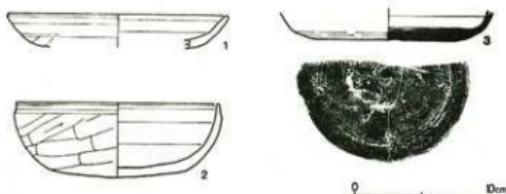
F6グリッド (第64図)

1号土器

(形態) 円形 (規模)

$0.89 \times 0.95 \times 0.96\text{m}$ (主軸方向) N—87°—E

(構造) 覆土は軟らかい黒褐色土が主体に堆積していた。壁は中位に段が観られるが角度を持って立ち上がる。



第67図 F6グリッド土器出土土器

F6グリッド1・2号土器出土土器

| 器種 | 番号 | 大きさ(cm) | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|-----|----|-------------------|---|--|------------------------------------|
| 土師盤 | 1 | 口径 16.4 残高 2.4 | 全体的に肉厚で浅い。口唇部は丸味を帯び、口縁部はきつく外反している。体部と口縁部の境に一条の沈線。 | 体部下半は底部方向への細かな窪削り、体部上半は丁寧な横ナデ、滑沢。内面全体丁寧なナデ。焼成良好、堅緻。 | 胎土 少量の細砂粒含む 色調 茶褐色 |
| 土師碗 | 2 | 口径 15.2 器高 5.5 | 丸味を帯びた底部より、やや内湾気味に口縁部が立ち上がり、口唇部が直立する。底部、体部は肉厚口唇部はつまみ上げられ薄い。口縁部に一段の稜が観られる。 | 底部は細かな窪削り、体部は底部より口縁部方向への丁寧な窪削り口唇部横ナデ、滑沢。内面丁寧なナデが行なわれ滑沢、焼成良好。 | 胎土 砂粒多量に含み表面ザラつく 色調 外面一部黒斑、茶褐色。 |

墳底は狭いが平坦である。（遺物）土師器の盤、塊、甕が出土している。

2号土壙

（形態）円形 （規模） $0.96 \times 0.93 \times 0.36 m$ （主軸方向）N—32°—E （構造）浅い皿状を呈し、壁はなだらかに立ち上がる。墳底中央部に径20cm、北東壁下に径40cmのピットが一段深く掘り込まれている。（遺物）墳底上より須恵器坏が1個体出土している。

| 器種 | 番号 | 大きさ(cm) | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|-----|---------|--------------|---|---|---------------------------|
| 須恵器 | 3 残高 | 口残高15.8 2 | 内厚な底部よりやや外反しながら 薄く仕上げられた口縁部が立ち上 がる。底部内面は凹凸が目立つ。 | 底部中央に回転窓削り痕が観られ 底部は回転窓削り。体部は丁寧に ナデられ滑沢。内面はナデ。焼成 良好、堅緻。 | 胎土 細砂粒 少量含む 色調 淡灰褐色 |

F 7 グリット（第66図）

1号土壙

（形態）長椭円形 （規模） $1.89 \times 0.72 \times 0.29 m$ （主軸方向）N—2°—E （構造）2号堅穴跡の西壁に接して検出された。壁はなだらかに立ち上がる。墳底は凹凸もなく平坦である。（遺物）覆土中より条痕文と諸模a式土器が出土している。

土器（第69図3、4）

3は不明瞭ではあるが、繩文を地文として竹管の平行沈線文が施文され、平行沈線文の交点には円形竹管文が押捺されている。2は細い単節P Lを地文に連続爪形文が横位に施文されている。両者とも胎土に多量の砂粒を含み、表面がザラついている。焼成良好で堅く、赤褐色を呈している。

2号土壙

（形態）隅丸方形 （規模） $1.9 \times 0.74 \times 0.48 m$ （主軸方向）N—69°—W （構造）9号住居跡の南壁を切り、床面より深く掘り込まれている。東壁はほぼ垂直に、他の壁はなだらかに立ち上がる。墳底は弧状を呈しているが、平坦である。（遺物）出土していない。

F 8 グリット（第64図）

1号土壙

（形態）長方形 （規模） $1.34 \times 0.85 \times 0.53 m$ （主軸方向）N—47°—E （構造）2号土壙の北壁を切り掘り込まれている。覆土は少量のロームを含む黒褐色土、暗褐色土が堆積していた。壁はほとんど垂直に立ち上がり、墳底は南壁側へ緩く傾斜している。（遺物）条痕文細片が數片出土している。

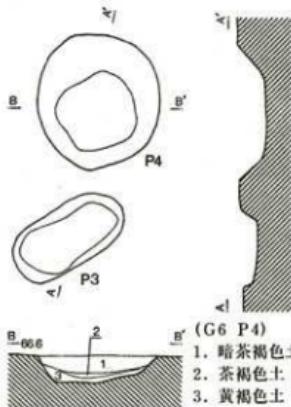
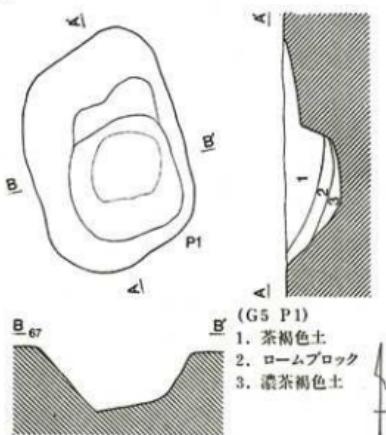
2号土壙

（形態）円形 （規模） $1.37 \times 1.27 \times 0.59 m$ （主軸方向）N—46°—W （構造）壁はほとんど垂直に立ち上がり、墳底は1号土壙側がやや盛り上がっている。（遺物）出土していない。

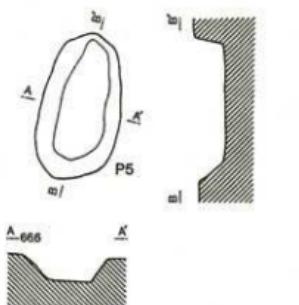
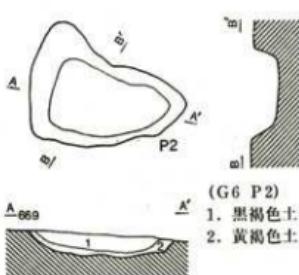
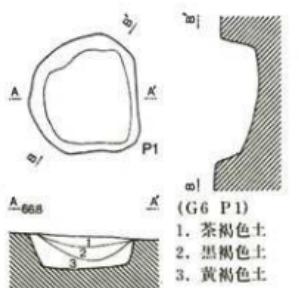
G 5 グリット（第68図）

1号土壙

G-5



G-6



0 1 2m

第68図 G 5 + G 6 グリッド土壤